

「歴史」 指導の手引き

2010年 第1回試験

「歴史」 指導の手引き

2010年 第1回試験

ディプロマプログラム (DP)

「歴史」指導の手引き

2008年3月に発行、
2008年11月、2009年3月、2009年5月に改訂の英文原本 *History guide* の日本語版
2014年11月発行

本資料の翻訳・刊行にあたり、
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

注： 本資料に記載されている内容は、英文原本の発行時の情報に基づいています。ただし、ディプロマプログラムの概要を説明している「ディプロマプログラムとは」のセクションに限り、日本語版刊行時現在の新たな情報が反映されています。

非営利教育財団 国際バカロレア機構
(International Baccalaureate Organization)
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト : www.ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2014

国際バカロレア機構 (以下、「IB」という。) は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくは www.ibo.org/copyright をご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール : sales@ibo.org

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、International Baccalaureate Organization の登録商標です。

IBの使命

IB mission statement

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。

目次

はじめに	1
本資料の目的	1
ディプロマプログラムとは	2
「歴史」の学習	7
ねらい	11
評価目標	12
評価目標の実践	14
シラバス	16
シラバスの概要	16
「歴史」の指導の方法	18
ルート1「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」—— 指定学習項目	24
ルート1「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」—— トピック	26
ルート2「20世紀の世界史」—— 指定学習項目	33
ルート2「20世紀の世界史」—— トピック	35
HL 選択項目	43
評価	81
ディプロマプログラムにおける評価	81
評価の概要—— 標準レベル（SL）	83
評価の概要—— 上級レベル（HL）	84
外部評価	85
内部評価	100
付録	110
指示用語の解説	110

本資料の目的

本資料は、「歴史」を学校で計画、指導、評価するための手引きです。「歴史」の担当教師を対象としていますが、生徒や保護者に「歴史」について説明する際にも、ご活用ください。

本資料は、オンラインカリキュラムセンター（OCC）の教科のページで入手できます。OCC（<http://occ.ibo.org>）は、パスワードで保護されたIBのウェブサイトで、IBの教師をサポートする情報源です。また、本資料はIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。

その他のリソース

教師用参考資料や科目レポート、内部評価のガイダンス、評価規準の説明といったその他のリソースも、OCCで取り扱っています。過去の試験問題とマークスキームはIBストアで取り扱っています。

OCCでは、他の教師が作成したり、活用している教育リソースについて情報を得ることができますので、ご活用ください。教師たちによりウェブサイトや本、ビデオ、定期刊行物、指導案などの役立つリソースも提供されています。

2010年 第1回試験

ディプロマプログラムとは

ディプロマプログラム（DP）は16歳から19歳までの大学入学前の生徒を対象とした、綿密に組み立てられた教育プログラムです。幅広い分野を学習する2年間のプログラムで、知識豊かで探究心に富み、思いやりと共感する力のある人間を育成することを目的としています。また、多様な文化の理解と開かれた心の育成に力を入れており、さまざまな視点を尊重し、評価するために必要な態度を育むことを目指しています。

DPのプログラムモデル

DPは、6つの^{グループ}教科が中心となる核（「コア」）を取り囲んだ形のモデル図で示すことができます（図1参照）。DPでは、幅広い学習分野を同時並行して学ぶのが特徴で、生徒は「言語と文学」（グループ1）と「言語の習得」（グループ2）で現代言語を計2言語（または現代言語と古典言語を1言語ずつ）、「個人と社会」（グループ3）から人文または社会科学を1科目、「理科」（グループ4）から1科目、「数学」（グループ5）から1科目、そして「芸術」（グループ6）から1科目を履修します。多岐にわたる分野を学習するため、学習量が多く、大学入学に向けて効果的に準備できるようになっています。生徒は各教科から柔軟に科目を選択できるため、特に興味のある科目や、大学で専攻したいと考えている分野の科目を選ぶことができます。



図1

DPのプログラムモデル

科目の選択

生徒は、6つの教科からそれぞれ1科目を選択します。ただし、「芸術」から1科目選ぶ代わりに、他の教科で2科目選択することもできます。通常3科目（最大4科目）を上級レベル（HL）、その他を標準レベル（SL）で履修します。IBでは、HL科目の学習に240時間、SL科目の学習に150時間を割りあててることを推奨しています。HL科目はSL科目よりも幅広い内容を深く学習します。

いずれのレベルにおいても、さまざまなスキルを身につけますが、特に批判的^{クリティカル}な思考と分析に重点を置いています。各科目の修了時に、学校外で実施されるIBによる外部評価で生徒の学力を評価します。また、多くの科目で、科目を担当する教師が評価する課題（コースワーク）を課しています。

プログラムモデルの「コア」

DPで学ぶすべての生徒は、プログラムモデルの「コア」を形づくる次の3つの必修要件を履修します。「知の理論」（TOK：theory of knowledge）では、批判的^{クリティカルシンキング}な思考に取り組みます。具体的な知識について学習するのではなく、知るプロセスを探究するコースです。「知識の本質」について考え、私たちが「知っている」と主張することを、いったいどのようにして知なのかを考察します。具体的には、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究するよう生徒に働きかけていきます。TOKの目的は、共有された「知識の領域」の間のつながりを重視し、それを「個人的な知識」に結びつけることで、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促していくことにあります。

「創造性・活動・奉仕」（CAS：creativity, action, service）は、DPの中核です。「IBの使命」や「IBの学習者像」の倫理原則に沿って、生徒が自分自身のアイデンティティーを構築するのを後押しします。CASでは、DPの期間を通じて、アカデミックな学習と同時並行して多岐にわたる活動を行います。CASは、創造的思考を伴う芸術などの活動に取り組む「創造性」（creativity）、健康的なライフスタイルの実践を促す身体的活動としての「活動」（action）、学習に有益であり、かつ無報酬で自発的な交流活動を行う「奉仕」（service）の3つの要素で構成されています。CASは、DPを構成する他のどの要素よりも、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築く」という「IBの使命」に貢献しているといえるかもしれません。

「課題論文」（EE：extended essay）では、生徒は、関心のあるトピックの個人研究に取り組み、研究成果を4000語（日本語の場合は8000字）の論文にまとめます。EEには、世界を対象に学際的な研究を行う「ワールドスタディーズ」として執筆されるものも含まれます。生徒は、履修しているDP科目から1科目（「ワールドスタディーズ」の場合は2科目）を選び、対象とする研究分野を定めます。また、EEを通じて大学で必要とされるリサーチスキルや記述力を身につけます。研究は、正式な書式で構成された論文にまとめ、選択した科目にふさわしい論理的で一貫した形式で、アイデアや研究結果を伝えます。高

いレベルのリサーチスキル、記述力、創造性を育成し、知的発見を促すことを目的としており、担当教員の指導のもと、生徒が、自分自身で選択したトピックに関する研究に自立的に取り組む機会となっています。

「指導の方法」と「学習の方法」

DPでの「指導の方法」(approaches to teaching) と「学習の方法」(approaches to learning) は、熟慮された戦略やスキル、態度として、指導や学習の場に浸透しています。「指導の方法」も「学習の方法」も、「IBの学習者像」に示されている人物像と本質的に関連しています。そして、生徒の学習の質を高めると同時に、DPの最終評価やその先の学びのための礎をつくります。DPでの「指導の方法」と「学習の方法」には、次のようなねらいがあります。

- ・ 学習内容を教えるだけでなく、学習者を導く存在としての教師のあり方を支援する。
- ・ 生徒の有意義で体系的な探究と、批判的思考や創造的思考を促すため、教師がファシリテーターとしてより効果的な戦略を立てられるよう支援する。
- ・ 各教科のねらい（科目別に掲げる目標以上のもの）と、それぞれの知識の関連づけ（同時並行的な学習）の両方を推進する。
- ・ 生徒が卒業後も積極的に学び続けるために、さまざまなスキルを系統的に身につけるよう奨励する。また生徒が良い成績を得て大学に進学できるよう支援すると同時に、大学在学中の学業の成就や卒業後の成功に向けて準備する。
- ・ DPでの生徒の体験の一貫性と関連性をよりいっそう高める。
- ・ 理想主義と実用主義が融合したDPの教育ならではの本質に対して、学校の理解を促進する。

5つの「学習の方法」(思考スキル、社会性スキル、コミュニケーションスキル、自己管理スキル、リサーチスキルの各スキルを高める) と、6つの「指導の方法」(探究を基盤とした指導、概念に重点を置く指導、文脈化された指導、協働に基づく指導、生徒の多様性に応じて差別化した指導、評価を取り入れた指導) には、IBの教育を支える重要な価値観と原則が含まれています。

「IBの使命」と「IBの学習者像」

DPでは、「IBの使命」と「IBの学習者像」に示された目的の達成に向かって、生徒たちが必要な知識やスキル、態度を身につけられるよう働きかけます。DPにおける「指導」と「学習」は、IBの教育理念を日々の実践において具現化したものです。

学問的誠実性

DPにおける「学問的誠実性」(academic honesty)は、「IBの学習者像」の人物像を通じて示されている価値観と振る舞いに則しています。学問的誠実性は、指導、学習、そして評価において、各自が誠実で公正であることを促し、他人とその成果物の権利を尊重することを奨励します。また、すべての生徒は学習を通じて身につけた知識や能力を示す機会を等しく得ることが保証されています。

評価のための課題(コースワーク)を含むすべての学習成果物は生徒本人が取り組んだものでなければなりません。学習成果物は生徒自身の独自のアイデアに基づくものであり、他人のアイデアや成果物を用いる場合は出典を明示しなければなりません。教師が課題について生徒に指導する場合や、生徒同士の協働作業を要する評価課題に取り組む際には、必ず、IBが定めるその教科のためのガイドラインを順守しなければなりません。

IBおよびDPにおける学問的誠実性について、より詳しくはIB資料『学問的誠実性』、『DP：原則から実践へ』、および同(英語版)『*General regulations: Diploma Programme* (総則：DP編)』を参照してください。DP科目の学校外で実施されるIBによる外部評価(external assessment)と学校内の教師が評価を手がける内部評価(internal assessment)に関連する学問的誠実性の情報は、本資料の中にも記載されています。

出典を明らかにする

国際バカロレア^{ディプロマ}資格(IB資格)取得志願者は、IBに提出する評価課題で引用した情報の出典をすべて明らかにしなければなりません。コーディネーターと教師は、このことに留意する必要があります。以下にこの要件について説明します。

IB資格取得志願者は、さまざまな媒体を用いた評価課題をIBに提出します。その中には、出版物または電子情報として公表された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどの引用が含まれている場合があります。志願者は、他人の成果物やアイデアを用いる場合、参考文献目録の書式として標準的とされる一定の書式に従い、出典を明示しなければなりません。志願者が出典の明示を怠った場合、IBは規則違反の可能性があると調査を行います。場合によっては、IB最終資格授与委員会(IBM final award committee)による処分の対象となります。

IBは志願者が用いる参考文献目録や本文中の引用の書式については指定せず、志願者の学校の担当者または教師に判断を委ねています。幅広い科目を提供していることや、英語、フランス語、スペイン語の3言語に対応していること、そして多様な参考文献目録の書式があることから、特定の書式を要求することは非合理的かつ制限的です。実際には、ある特定の書式が最も頻繁に使われるかもしれませんが、学校はその科目と使用言語に適した書式を自由に選ぶことができます。その科目のために学校が選ぶ参考文献目録の書式にかかわらず、著者名、発行日、書名、ページ番号などの最低限の情報は明記する必要があります。

志願者は標準的とされる書式を用い、言い換えや要約を含むすべての参考資料の出典を一貫した書式で明示することが求められます。文章執筆の際、生徒は引用符（または、字下げなどのその他の方法）を用いて自分自身の言葉と他人の言葉を明確に区別し、適切な形で引用を示して参考文献目録に明記してください。電子情報を引用した場合、参考文献目録にアクセス日を明記してください。志願者に期待されているのは、参考文献目録の作成の完璧さではありません。すべての出典を明らかに示すことが求められているのです。志願者は、自分自身のものではない出版物や電子情報として公表された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどもすべて出典を明らかにするように必ず指導を受けなければなりません。この場合も参照・引用の適切な書式を用いてください。

学習の多様性と学習支援の必要な生徒への取り組み

I B資格取得志願者で学習支援を必要とする生徒に対して、学校は平等に評価を受けるための配慮と妥当な調整を行わなければなりません。配慮や調整は、I B資料『受験上の配慮の必要な志願者について』および同（英語版）『*Learning diversity in the International Baccalaureate programmes: Special educational needs within the IB programmes*（I B教育と学習の多様性：I Bプログラムにおける特別な教育的ニーズ）』に沿って行わなければなりません。

「歴史」の学習

「個人と社会」（グループ3）の科目では、個人と社会の関係について学びます。グループ3の科目は、人文科学または社会科学と呼ばれる分野の学習で、本質的には、人間と人間を取り巻く環境の相互作用を、時間、空間、場所の観点から探究します。

歴史の学習は、単に「過去を知る」ことではありません。さまざまな資料を調査しながら、過去を記録し、再構築し、解釈するプロセスです。歴史学とは、過去と現在の両方における世界との関連から、私たち自身、そして他の人々について、より深く理解する学問分野であるといえます。

歴史を学ぶにあたって、生徒は、歴史学がどのような考え方の上に成り立っているのかを理解しなければなりません。歴史は、確定的な答えを導き出すのではなく、問いを投げかけることで探究を深める科目です。過去を理解するため、生徒は一次資料と歴史学者による文献の両方を扱うことが求められます。また、歴史の学習には、資料を選別して解釈し、そして、その資料を批判的に評価することが含まれます。また、生徒は、歴史に関する知識や理解は、相対的なものであることも理解しなければなりません。どの世代の人々も、それぞれが置かれた世界と先入観に影響を受けるものだからです。そして、新たな歴史的研究が出てくることによっても、歴史に関する知識や理解は変わります。歴史を学ぶことは、他の時代や環境に生きた人々に対する理解と共感を必要とします。生徒は、歴史の学習を通じてこうした理解と共感を養います。

DP科目である「歴史」では、標準レベル（SL）と上級レベル（HL）ともに共通のカリキュラムに基づいて授業が行われます。両レベルが共通して学習する「SL・HL共通項目」は、掘り下げた学習を行う「指定学習項目」を1項目と、「トピック」から選択する2項目の学習で構成されています。生徒と教師は、ヨーロッパとイスラーム世界における主要な歴史的展開（500年から1570年まで）を扱う「ルート1」、または20世紀の世界史における主要な展開を網羅する「ルート2」のどちらかを選択することができます。また、このほかにHLでは、より広範囲の時代を扱う「HL選択項目」から題材を選択して、さらに学習を深めることができます。

「歴史」は、しっかりとした構成と柔軟性の両方を兼ね備えており、グローバルな文脈における主要な歴史上の出来事理解を育むことができます。生徒は、人類に共通する歴史上の政治的、経済的、社会的状況を取り上げ、それらに対して講じられたさまざまな解決方法を比べます。さらに、異なる文化、政治システム、国ごとの伝統について、比較はしていきますが、判断を下すことはしません。

「歴史」は、本質的に興味深い内容で構成されています。この科目を学ぶ多くの生徒が歴史学という学問分野に魅了され、将来的に歴史学を専攻するにせよ、しないにせよ、生涯にわたって歴史に対する関心をもち続けるよう促します。

また、「歴史」で培われる国際的なものの見方は、グローバル社会の一員として必要な国際理解の促進、および多様な文化への意識の向上のための基盤となります。そして何より、このような国際的なものの見方は、世界中のさまざまな文化における人々や出来事に対する尊重の精神と理解を育むことにつながります。

「標準レベル」と「上級レベル」の違い

「歴史」では、標準レベル（SL）と上級レベル（HL）ともに共通のカリキュラムに基づいて授業が行われます。両レベルが共通して学習する「SL・HL共通項目」は、「指定学習項目」と「トピック」で構成されており、生徒はルート1の「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」、もしくはルート2の「20世紀の世界史」を選択して学習します。これに加え、HLの生徒は、「HL選択項目」を通じて、特定の時代についての学習を深めます。ルート1を選択した生徒は「HL選択項目1」を学習し、ルート2を選択した生徒は「HL選択項目2～5」の中から1つの選択項目を選んで学習します。

「歴史」におけるSLとHLの違いは以下の通りです。

	SL	HL
シラバス	「指定学習項目」のうち1項目を学習	「指定学習項目」のうち1項目を学習
	5つの「トピック」から2項目を選択して学習	5つの「トピック」から2項目を選択して学習
		1つの「HL選択項目」から3セクションを選択して学習
	歴史研究（historical investigation）	歴史研究（historical investigation）

評価	「試験問題 1」(SL) — 「指定学習項目」に関する「資料問題」を通じて、評価目標 1～3 について評価する。	「試験問題 1」(HL) — 「指定学習項目」に関する「資料問題」を通じて、評価目標 1～3 について評価する。
	「試験問題 2」(SL・HL) — 「トピック」に関する小論文を通じて、評価目標 1～4 について評価する。	「試験問題 2」(SL・HL) — 「トピック」に関する小論文を通じて、評価目標 1～4 について評価する。
		「試験問題 3」(HL) — 5つの「HL 選択項目」のいずれかに関する小論文を通じて、評価目標 1～4 について評価する。
	内部評価 — 「歴史研究」を通じて、評価目標 1～4 について評価する。	内部評価 — 「歴史研究」を通じて、評価目標 1～4 について評価する。

歴史の学習において必要とされる多くのスキルはSLとHLに共通しますが、HLの生徒はより深い学習を通じて、知識を統合的に扱い、批判的に評価することが求められます。HLで求められる学習の深さと、生徒への要求の高さは、「HL 選択項目」の学習目標の性質にも現れています。「試験問題 3」(HL)は、評価目標 3の「知識の統合と評価」に重点が置かれており、これは採点基準にも反映されています(本資料「外部評価のマークバンド(採点基準表) — 上級レベル(HL)」を参照)。

事前の学習経験

生徒が「歴史」を履修するにあたって、過去に歴史を学習した経験は必要とされていません。また、国ごとに、あるいは国際的に定められた資格基準を満たす特定科目などの習熟が期待されたり要求されたりすることはありません。「歴史」の学習で必要となるスキルや知識は、授業の中で身につけていきます。

MYPとの接続

「歴史」は、中等教育プログラム(MYP)で学ぶ「人文科学」(Humanities)と、DPの両方において人気の高い科目です。どちらも異なるさまざまな文化の学習を通じて、多様な文化への意識を高めます。MYPの「人文科学」の授業では、さまざまな歴史資料を扱う力、歴史に関する知識や判断を他の人々に伝える力を引き出し、育てます。DPでは、専門的な歴史の探究を通じて、これらの力をさらに伸ばしていきます。また、DPでは、MYPで扱われる概念やスキルをさらに発展させます。MYPの「人文科学」で学習する「時間、場所、空間」(time, place and space)、「変化」(change)、「システム」(system)、「グローバルな意識」(global awareness)などの「重要概念」(key concept)は、DPの「歴史」のシラバスで具体的な学習事項として組み入れられています。また、MYPでは、歴史の

学習において必要となる技術的なスキルのほか、分析、意思決定、調査研究のスキルも育成します。

「歴史」と「知の理論」

他の教科と同様、グループ3の科目においても、知識を得るためにはさまざまな方法があります。例えば、記録文書による証拠^{エビデンス}、収集データ、実験、観察、帰納的推論、演繹的推論などはすべて行動パターンを説明するのに役立ちます。そして、それらは「知の理論」(TOK) で取り組む「知識に関する主張」(knowledge claim) にもつながります。グループ3の科目を履修する生徒は、これらの「知識に関する主張」を妥当性、信頼性、確実性の観点および個人的、文化的視点から評価することが求められます。

グループ3のそれぞれの科目と「知の理論」(TOK) との関係は、DPの根本を成す、きわめて重要な要素です。生徒には、グループ3の科目を学習することにより、さまざまな「知るための方法」(ways of knowing) や人文科学で用いられる手法^{クリティカル}を批判的に振り返り、「IBの使命」に示されている「探究心、知識、そして思いやりのある若者」へと成長することが期待されます。

「歴史」の学習を進める中で、TOKと歴史学の間を際立たせる多くの論点が浮かび上がるでしょう。教師は以下の問いを頭に入れた上で、それらの問いを授業の中で直接的および間接的に扱っていきます。

- ・なぜ歴史を学ぶのだろうか。
- ・過去に関する「確かな知識」とは存在し得るのだろうか。
- ・歴史の学習は、人間の本質に関する私たちの知識を広げるだろうか。
- ・歴史の学習は、現在を理解し、未来を予測するのに役立つだろうか。
- ・歴史学者の分析において、どの程度、「感情」が関与しているだろうか。「(歴史の)客観性」は存在し得るだろうか。
- ・なぜ、同じ歴史上の出来事に対して異なる記述があるのだろうか。私たちは「誰の歴史」を学んでいるのだろうか。
- ・歴史学者の根拠の選択、および出来事に関する記述、解釈、分析の仕方を決定づけるものは何だろうか。
- ・時間の経過に伴う言葉と文化の変化は歴史を学ぶにあたってどのような問題を生むだろうか。
- ・歴史を「科学的」に考察することは可能だろうか。

「個人と社会」（グループ3）のねらい

「個人と社会」（グループ3）の科目は、いずれも以下を学習のねらいとしています。

1. 「人々の経験と行動」「物理的・経済的・社会的環境」「社会制度や文化的慣習の発展とその歴史」についての体系的かつ批判的な学習を促す。
2. 個人や社会の本質およびその活動に関する理論、概念、議論を認識し、それらを批判的に分析、評価する力を育てる。
3. 社会を研究するためのデータを収集、詳述、分析する能力、仮説を検証する能力、複雑なデータや資料を解釈する能力を育てる。
4. 学ぶということは自分たちが属する社会の文化と他の社会の文化の双方に関連するものであるという理解を促す。
5. 人々の態度や見解は多様であり、そして社会を学ぶにあたってはそのような多様性を受け入れる必要があるという理解を育てる。
6. グループ3の科目で扱う内容および手法には議論の余地があり、また、この分野の学問では不確実性を容認する姿勢が求められるという認識を育てる。

「歴史」のねらい

上記に加え、「歴史」（SL・HL）では、以下の事項もねらいとしています。

7. 歴史資料、手法、解釈の性質およびその多様性など、歴史学という学問分野に対する理解を促す。
8. 過去を批判的に考察することによって、現在に対する理解を促す。
9. 歴史上の発展がもたらした影響を、国レベル、地域レベル、国際レベルで理解できるよう促す。
10. 異なる文化における歴史を学ぶことによって、自分自身のアイデンティティと歴史の間の関係性を認識できるよう促す。

評価目標

評価目標 1：知識と理解

- ・ 記憶の中から、問いに関連のある歴史の知識を選び出す。
- ・ 歴史的文脈を理解していることを示す。
- ・ 原因と結果、連続と変化といった歴史の過程を理解していることを示す。
- ・ 歴史資料を理解する。〔「試験問題 1」(SL・HL)〕
- ・ 詳細かつ深く掘り下げた知識を効果的に展開する。〔「試験問題 3」(HL)〕
- ・ 特定の歴史のトピックに関する知識と理解を示す。(内部評価)

評価目標 2：応用と解釈

- ・ 歴史に関する知識を根拠として応用する。
- ・ 歴史問題や歴史上の出来事に対して異なるアプローチや解釈があることを認識している。
- ・ 根拠としての歴史資料を比較し、対比する。〔「試験問題 1」(SL・HL)〕
- ・ 根拠の要約を提示する。(内部評価)

評価目標 3：知識の統合と評価

- ・ 歴史問題および歴史上の出来事に対する異なるアプローチと解釈を評価する。
- ・ 根拠としての歴史資料を評価する。〔「試験問題 1」(SL・HL)、および内部評価〕
- ・ 歴史資料と背景知識に基づく根拠を評価し、統合的に扱う。〔「試験問題 1」(SL・HL)〕
- ・ 根拠に基づいて批判的論評を展開する。〔「試験問題 2」(SL・HL)、および「試験問題 3」(HL)〕
- ・ 根拠と批判的論評を組み合わせ、それらを統合的に扱う。〔「試験問題 3」(HL)〕
- ・ 根拠の要約を分析し、それを提示する。(内部評価)

評価目標 4：歴史学のスキルの活用

- ・ 関連性が高く、バランスのとれた、焦点を絞った議論を根拠に基づいて構築し、それを小論文形式の答案として組み立てる〔「試験問題2」(SL・HL)、および「試験問題3」(HL)〕。
- ・ リサーチスキルおよび学習における構成能力があることを示す。また、参考文献を適切に使用し、参考文献目録を正しく作成する能力があることを示す。(内部評価)

注： 上記について、カッコ内で特別に評価要素の指定〔内部評価、試験問題3(HL)など〕がない評価項目はすべての評価要素に適用されます。

評価目標の実践

評価目標	どの評価要素で測るのか	評価目標への到達度をどのように測るのか
1. 知識と理解	試験問題1 (SL・HL)	試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準)
	試験問題2 (SL・HL)	評価要素に対して設定されているマークバンド (採点基準表) と、試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準)
	試験問題3 (HL)	評価要素に対して設定されているマークバンド (採点基準表) と、試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準)
	内部評価 (SL・HL)	評価規準
2. 応用と解釈	試験問題1 (SL・HL)	試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準)
	試験問題2 (SL・HL)	評価要素に対して設定されているマークバンド (採点基準表) と、試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準)
	試験問題3 (HL)	評価要素に対して設定されているマークバンド (採点基準表) と、試験ごとに作成されるマークスキーム
	内部評価 (SL・HL)	評価規準

評価目標	どの評価要素で測るのか	評価目標への到達度をどのように測るのか
3. 知識の統合と評価	試験問題 1 (S L・HL) 試験問題 2 (S L・HL) 試験問題 3 (HL) 内部評価 (S L・HL)	試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準) 評価要素に対して設定されているマークバンド (採点基準表) と、試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準) 評価要素に対して設定されているマークバンド (採点基準表) と、試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準) 評価規準
4. 歴史学のスキルの活用	試験問題 2 (S L・HL) 試験問題 3 (HL) 内部評価 (S L・HL)	評価要素に対して設定されているマークバンド (採点基準表) と、試験ごとに作成されるマークスキーム (採点基準) 評価要素に対して設定されているマークバンド (採点基準表) と、試験ごとのマークスキーム (採点基準) 評価規準

シラバスの概要

ルート 1

シラバスの構成	授業時間の目安	
	標準レベル (S L)	上級レベル (H L)
ヨーロッパとイスラーム世界の歴史——「指定学習項目」 1. イスラーム教の起源と隆盛 500 頃～ 661 2. 両シチリア王国 1130 ～ 1302	40	40
ヨーロッパとイスラーム世界の歴史——トピック 1. 王朝と支配者たち 2. 社会と経済 3. 戦争と戦争行為 4. 知的・文化的・芸術的發展 5. 宗教と国家	90	90
H L 選択項目 1. 中世ヨーロッパとイスラーム世界の歴史		90
内部評価 (S L・H L) 歴史研究 (historical investigation)	20	20
総授業時間数	150	240

ルート 2

シラバスの構成	授業時間の目安	
	標準レベル (SL)	上級レベル (HL)
20世紀の世界史——「指定学習項目」 1. 平和創造・平和維持——国際関係 1918～36 2. アラブ—イスラエルの対立 1945～79 3. 共産主義の危機 1976～89	40	40
20世紀の世界史——トピック 1. 戦争の原因・手段・影響 2. 民主主義国家——試練と対応 3. 権威主義的国家ならびに一党独裁制国家の始まりとその発展 4. アフリカとアジアにおける民族運動・独立運動と1945年以後の中央・東ヨーロッパの国家 5. 冷戦	90	90
HL 選択項目 2. アフリカの歴史 3. 南北アメリカの歴史 4. アジアとオセアニアの歴史 5. ヨーロッパと中東の歴史		90
内部評価 (SL・HL) 歴史研究 (historical investigation)	20	20
総授業時間数	150	240

「歴史」の指導の方法

歴史学の実践

DPでの「歴史」の学習を通じて、生徒は歴史学が用いる方法論とその実践に対する理解を深めていきます。歴史学のスキルを指導することは、歴史に対する生徒の理解をより豊かにするほか、将来的に生徒がそのスキルを歴史学やその関連分野の研究で応用するきっかけとなります。なお、これらのスキルは単独で扱われるのではなく、文脈に応じた適切なやり方で、シラバス全体を通じて取り入れられることがきわめて重要です。

1. 歴史的証拠の収集と分類

この項目では、主に以下のスキルを身につけます。

- ・ 本、論文、ウェブサイト、視聴覚資料から、関連性のある適切な^{エビデンス}証拠を探し、選び出すスキル
- ・ 一次資料と二次資料、文書、視聴覚資料、口述資料、表や図式による資料など、さまざまな^{エビデンス}証拠の違いを認識するスキル

多様な歴史資料を探し出し、使用するための自信と主体性が向上することを、この項目における「生徒の進歩」と捉えます。

2. 歴史的証拠の評価

この項目では、主に以下のスキルを身につけます。

- ・ 歴史的^{エビデンス}証拠の主観的性質を認識すること
- ・ 情報および解釈の出所となる資料を吟味し、また、これらの資料が互いを補強し合うものなのか、補足するものなのか、あるいは互いに矛盾し合うものなのかを考察するスキル
- ・ 資料の価値および用途を認識し、また、なぜ歴史資料は慎重に使われなければならないかを理解するスキル
- ・ 歴史の見解や解釈には相違があることを認識し、そしてそれらの解釈や見解はどのように異なるのか、また、なぜ異なるのかを理解するスキル

歴史の見解や解釈に対する認識が向上することを、この項目における「生徒の進歩」と捉えます。

3. 人間の経験、活動、動機と歴史的過程との間にある関係の認識と理解

この項目では、主に以下のスキルを身につけます。

- ・ 歴史的過程における原因と結果を認識、説明、分析するスキル
- ・ 歴史的過程における連続性、変化、発展を認識、説明、分析するスキル
- ・ 歴史的過程における類似点および相違点を認識、説明、分析するスキル
- ・ 歴史的過程における人間の活動、経験、そして動機をさまざまな文化的・社会的側面に関連づけるスキル
- ・ 異なる時代、地域に関する歴史資料を統合的に扱うスキル

さまざまな文脈における人間の経験の本質を正しく理解し、またその理解を深めることを、この項目における「生徒の進歩」と捉えます。

4. 歴史に関する見解ならびに情報の体系づけと表現

この項目では、主に以下のスキルを身につけます。

- ・ 問いを立てそれに答えること、または仮説を立てそれを検証するスキル
- ・ 1つの問いを探究するにあたって複数の資料を使い、またそれらを統合的に扱うスキル
- ・ 問いに応じて情報や考えを適切に選び出し、またそれらを効果的に使うスキル
- ・ 見解、分析、また関連する実証に基づいて歴史的な「語り」を構築するスキル
- ・ 要約し、結論を導き出すスキル

口述と記述の両方において、洗練された形で効果的に伝える力が向上することをこの項目における「生徒の進歩」と捉えます。

「歴史」の構成

「歴史」の中核となるカリキュラムは、標準レベル（SL）と上級レベル（HL）ともに共通です。この「SL・HL共通項目」は、「指定学習項目」と「トピック」で構成されています。生徒はルート1「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」、または、ルート2「20世紀の世界史」のいずれかを選択します。また、HLの生徒はこれに加えて、**5項目**の「HL選択項目」の中から**1項目**を選択して学習します。

	ルート1「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」		ルート2「20世紀の世界史」
SL・HL 共通項目	2つの「指定学習項目」 ・ 生徒はこのうち1項目を「指定学習項目」として学習すること	または	3つの「指定学習項目」 ・ 生徒はこのうち1項目を「指定学習項目」として学習すること
	「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」に関する5つのトピック ・ 生徒はこのうち2つのトピックを学習すること		「20世紀の世界史」に関する5つのトピック ・ 生徒はこのうち2つのトピックを学習すること
HLのみ	HL選択項目 1. 中世ヨーロッパとイスラーム世界の歴史 ・ 生徒は3つのセクションを選んで学習すること	または	HL選択項目 2. アフリカの歴史 3. 南北アメリカの歴史 4. アジアとオセアニアの歴史 5. ヨーロッパと中東の歴史 ・ 生徒は1つの選択項目から3つのセクションを選んで学習すること

教師は、上記の幅広いシラバスから生徒に合わせた適切な選択を行うことで、一貫性のある刺激に満ちた授業計画を立てることができます。

指定学習項目

「指定学習項目」(prescribed subject)では、掘り下げた学習を行います。**1つの項目**を「指定学習項目」として選択し、項目を選んだら、その項目に関するすべてのポイント(シラバスに箇条書きで記載)を必ず網羅しなければなりません。また、学習にあたって、生徒はその項目に関する文脈を理解するため、ある程度の背景情報を学ぶことが求められます。シラバスの内容は、さまざまな一次資料と(適切な場合においては)二次資料を使いながら学習していきます。なお、試験準備としては、「資料問題」の練習問題を通じて試験で問われるスキルを生徒とともに見ていくことが有効です。

指定学習項目：学習目標

「指定学習項目」の**1項目**の学習を通じて、生徒は以下の学習成果を身につけることが期待されています。

- ・ 選択した「指定学習項目」におけるすべてのポイント(シラバスに箇条書きで記載)に関しての知識があり、また、それらを理解している。

- ・ 歴史学における主要な用語と概念に関する知識があり、またそれらについての理解を示すことができる。
- ・ 選択した「指定学習項目」の背景と前後関係の状況に関する知識があり、また、それらを理解している。
- ・ 選択した「指定学習項目」に関連する歴史上の出来事に対して、異なるアプローチや解釈が存在することを認識しており、また、それを示すことができる。
- ・ 選択した「指定学習項目」に関連するさまざまな歴史資料を歴史的文脈の中で理解、分析、評価するため、それらと批判的に向き合うことができる。

トピック

「トピック」(topic) は、シラバスの中でも柔軟性と幅広さを兼ね備えているため、教師は、必要であれば「指定学習項目」を補完するような授業計画を立てることができます。試験で求められる要件を満たすため、生徒は必ず**2つ**のトピックを学習しなければなりません。また、「詳細学習のための題材」(material for detailed study)の一覧から題材を選択して学習します。ただし、「詳細学習のための題材」の一覧にはない題材を例にとって「主要テーマ」(major theme)を学習することにより、各学校が自国の歴史やその他の特に関心のある分野を重点的に扱うことも可能です。選択された題材に関連のある「主要テーマ」はすべて考察されなければなりません。また、ルート2「20世紀の世界史」で詳細学習の対象として選択する題材は、ルート2のセクションに記載された世界地図の区分に準じた2つの地域を取り上げなければなりません。

教師は、希望や必要に応じて、シラバスに沿ってトピックごとに授業を進めることも、異なるトピックやテーマに触れながら年代順に授業を進めることも、どちらも可能です。ただし、いずれの場合も、生徒が選択したトピックにおいて正確な知識体系を築き、かつ時系列を正しく理解することがきわめて重要となります。どのトピックも、生徒の批判的思考や、異なる文脈や文化におけるさまざまな視点やものの見方の理解を促すよう、多様な歴史資料を使いながら学習していくことが必要です。なお、筆記試験における論述問題や小論文(レポート課題)の両方の練習をすることは、生徒にとって有益です。

トピック：学習目標

2つのトピックの学習を通じて、生徒は以下の学習成果を身につけることが期待されています。

- ・ 選択した**2つ**のトピックに関しての知識があり、またそれらを理解している。
- ・ 歴史学における主要な用語と概念に関する知識があり、またそれらについての理解を示すことができる。
- ・ 選択した地域における時系列の流れを理解している。
- ・ 歴史における過程(原因と結果、連続と変化)についての理解を示すことができる。
- ・ 歴史上の出来事や歴史の展開を比較・対比することができる。

- ・ 歴史問題や歴史上の出来事に対する異なるアプローチや解釈を理解し、評価することができる。
- ・ 試験に備えて、制限時間内で論理を組み立て、記述することができる。

HL 選択項目

「HL 選択項目」(HL option) では、ルート 1 「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」を選択した生徒は「HL 選択項目 1」を**必ず**学習します。一方、ルート 2 「20 世紀の世界史」を選択した生徒は「HL 選択項目 2～5」の中から 1 つを選んで学習します。項目を選択したら、生徒は**3 つ**のセクションを「詳細な学習」の対象として選択します。また、試験時に習得し、蓄積した知識を活用して取り組む試験問題の選択肢が十分にある状態にするため、選択されたセクションに記載された箇条書き項目を**すべて**学習することが重要です。

セクションの中には、「SL・HL 共通項目」で学習された範囲を補完し、かつその範囲の背景を提供するものがあります。例えば、ルート 2 「20 世紀の世界史」の SL・HL 共通項目では「トピック」がグローバルなアプローチをとるのに対し、「HL 選択項目 2～5」の焦点は地域史となります。「HL 選択項目」のシラバスでは歴史の諸側面を扱うため、教師は選択された 3 つのセクションの背景およびこれらセクションの間のつながりについても言及していく必要があります。それぞれのセクションでの主眼点に応じて、生徒は政治、軍事、経済、文化、宗教の各分野の歴史的展開、およびこれらの相互作用を学習することができます。

「HL 選択項目」では、多様な歴史資料を使って指導します。生徒は、文献を幅広く読んでいくことで、歴史学者の視点に対する認識と理解を深め、これらを小論文エッセイに取り入れることができるようにします。さらに、「HL 選択項目」では掘り下げた学習が要求されるため、異なるスキルや資料を統合的に扱えるよう生徒を指導することがきわめて重要です。なお、筆記試験における論述問題や小論文エッセイ（レポート課題）の両方の練習をすることは、生徒にとって有益です。

HL 選択項目：学習目標

選択した HL 選択項目から **3 つ**のセクションの学習を通じて、生徒は以下の学習成果を身につけることが期待されています。

- ・ 多様な資料を使いながら、歴史上の長期にわたる期間に関しての正確で詳細かつ掘り下げた知識を獲得し、理解している。
- ・ 「HL 選択項目」と「SL・HL 共通項目」で学んだ関連知識を統合し、多岐にわたる知識と証拠エビデンスを統合的に扱うことができる。
- ・ 歴史学における主要な用語と概念に関する知識があり、またそれらについての理解を示すことができる。
- ・ 選択した地域における時系列の流れを理解している。
- ・ 歴史における過程（原因と結果、連続と変化）についての理解を示すことができる。
- ・ 歴史上の出来事や歴史の展開を比較・対比することができる。

- ・ 歴史問題や歴史上の出来事に対する異なるアプローチや解釈を理解し、評価することができる。
- ・ 関連性した内容と批判的^{クリティカル}な論評の両方を統合した解答を作成することができる。
- ・ 試験に備え、制限時間内で、バランスのとれた、正確で十分に裏づけのある議論を組み立て、ある程度の長さに合わせて記述することができる。

ルート1「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」 ——指定学習項目

指定学習項目1：イスラーム教の起源と隆盛 500頃～661

この「指定学習項目」は、イスラーム教出現以前から「正統カリフ」(Al-Khulafa al-Rashidun)の終焉までのアラビア半島の歴史を扱います。預言者ムハンマドの出現した経済的、社会的、政治的、宗教的環境に焦点をあて、初期イスラーム国家を設立するにあたってムハンマドが直面した課題、継承問題、半島内のイスラーム支配、さらにアラブ軍によるビザンツとササン朝の征服などの主要な問題を考察します。

「試験問題1」の「資料問題」(source-based question)は、以下の領域に重点を置きます。

- ・イスラーム教出現以前のアラビア半島の社会構造と宗教的信仰：経済的背景；メッカの商業的重要性；部族社会の影響
- ・アラビア半島におけるビザンツ帝国とササン朝の直接および間接的影響
- ・メッカ期（570頃～622）：啓示とヒジュラ（聖遷）の影響
- ・メディナ期（622頃～32）：預言者ムハンマドが直面した課題、メディナ憲章の制定とその影響
- ・預言者ムハンマドの継承問題に関する解釈と意見の相違
- ・「正統カリフ」時代におけるイスラーム帝国の始まり
- ・カリフとイマームの概念の発展
- ・アブー・バクル（632～4）、ウマル・イブン・ハッターブ（634～44）、ウスマーン・イブン・アッファーン（644～56）、アリー・イブン・アビー・ターリブ（656～61）
- ・イスラーム教出現に関する解釈と観点

指定学習項目2：両シチリア王国 1130～1302

この「指定学習項目」は、ルッジェーロ2世の王国時代からシチリア晩禱事件終結までのシチリアと南イタリアにおける支配と文化を扱います。重点分野には、シチリア王の治世、支配機構の発展、ローマ教皇との関係、ルッジェーロ2世の後継者が王国の保全のために戦った戦争が含まれます。また、この項目では、多民族社会であったこの地域における宗教的、文化的側面、さらには、多様な民族間関係が王国の政治的、経済的発展に及ぼした影響についても考察します。

「資料問題」は、以下の領域に重点を置きます。

- ・ 両シチリア王国における以下の王朝による支配：ノルマン朝（1130～94）、ホーエンシュタウフェン朝（1194～1266）、アンジュー朝（1266～1302）による支配。特にルッジェーロ2世（1130～54）、ウィリアム1世（1154～66）、ウィリアム2世（1166～89）、タンクレード（1190～94）、コンスタンツェとハインリヒ6世（1194～98）、フリードリヒ2世（1198～1250）、シャルル1世（1266～82）に重点を置く。
- ・ 統治、行政、法
- ・ 内部および外部からの王権への挑戦と継承危機
- ・ 教皇を含む、外国勢力との関係
- ・ 多様な民族と信仰：ノルマン人、南北イタリア人、ギリシャ人、イスラーム教徒、ユダヤ人
- ・ 文化、学問、思想・知識の伝達
- ・ 農業、経済、海外貿易

ルート1「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」 ——トピック

はじめに

生徒は、600年から1450年までのヨーロッパとイスラーム世界の歴史を、以下のリストから**2つ**のトピックを選択して学習します。

- ・ トピック1：王朝と支配者たち
- ・ トピック2：社会と経済
- ・ トピック3：戦争と戦争行為
- ・ トピック4：知的・文化的・芸術的發展
- ・ トピック5：宗教と国家

この項目は幅広い時代区分を対象とするので、各学校は、「詳細学習のための題材」に応じて2世紀から3世紀ほどの期間に焦点をあてるなど、柔軟なアプローチをとることができます。

シラバスには、各トピックの「主要テーマ」と「詳細学習のための題材」が明記されています。生徒は「詳細学習のための題材」の一覧より選択した題材を、「主要テーマ」を指針としながら学習していきます。この構成要素を対象とする試験（SL・HLの「試験問題2」）では、「主要テーマ」に関する問いが出題されます。また、特定の人物や出来事に関する問題は、「主要テーマ」および「詳細学習のための題材」の一覧に記載のあるもののみが対象となります。ただし、自由形式の問題においては、生徒は一覧に記載のある例か、その他の例、もしくはその両方を使用して解答することができます。

注：西暦が一貫して使用されています。支配者の名前とともに記載のある年号は在位期間であり、存命期間ではありません。

トピック1：王朝と支配者たち

このトピックは、王朝、王、カリフ、皇帝と、その地位、権力、立場、さらには、どのようにして彼らは統治するまでに至り、またその支配を保持することになったのかに焦点をあてます。キリスト教国家およびイスラーム国家はどのようにして出現したのかという問いが、このトピックにおける焦点の中心となります。

支配者たちはそれぞれどのような権力を保持、主張したのでしょうか。彼らはどのように国家を統治し、その支配を正当化したのでしょうか。また、それに伴ってどのような機構が出現したのでしょうか。

主要テーマ

- | | |
|-------------------|--|
| 国家と国境 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 侵略と入植 ・ ウマイヤ朝、アッバース朝、ファーティマ朝 ・ カロリング朝と神聖ローマ帝国 ・ ヨーロッパの諸王国 |
| 法、統治機関、行政 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 宗教法と世俗法の起源 ・ カロリング朝、神聖ローマ帝国、ウマイヤ朝、アッバース朝、ファーティマ朝における法の解釈と行政 ・ 君主とカリフが保持した権力と支配の性質 ・ 役人の任務と役割、貴族やエリートの役割 |
| イスラーム政治、帝政、君主政の原型 | <ul style="list-style-type: none"> ・ イスラーム世界における統治の発展 ・ カロリング朝と神聖ローマ帝国 ・ イギリス（ノルマン朝、アンジュー朝）とフランス（カペー朝）における君主 ・ 国内外におけるカリフと君主の任務 |

詳細学習のための題材

- ・ ムアールウィヤ（661～80）、アブドゥル・マリク（685～705）、ハールーン・アッラシード（786～809）、ムイッズ（953～75）、アブド・アッラフマーン3世（912～61）
- ・ カール大帝（768～814）、オットー1世（962～73）、フリードリヒ1世（バルバロッサ）（1155～90）
- ・ フランス王ルイ6世（1108～37）
- ・ イングランド王ウィリアム1世（1066～87）、ヘンリー2世（1154～89）
- ・ 女性の支配者: マティルダ（1102～67）、アリエノール・ダキテーヌ（1137～1204）、ブランシュ・ド・カスティール（1226～34、フランスの摂政）

トピック2：社会と経済

このトピックでは、イスラーム教およびキリスト教の共同体における社会と経済が考察されます。両共同体における都市部と農村部での経済発展を扱い、特にイスラーム世界とヨーロッパにおける都市の発展と地方の生活様式に焦点をあてます。生徒は選択した時代

における連続性と変化を認識し、シラバスで指定された地域における多様な生活と労働のあり方を理解することが必要です。

主要テーマ

- | | |
|------------|--|
| 社会 | <ul style="list-style-type: none">・ 奴隷、農奴、小作農・ 社会と宗教における女性・ 都市民、商人、職人、専門職・ 役人、官僚、貴族、君主・ 聖職者、宗教的共同体（修道士、托鉢修道士、修道女）、ウラマー・ 家族、親族関係、共同体・ 宗教の重要性：礼拝所、祝祭、聖廟、巡礼 |
| 経済 | <ul style="list-style-type: none">・ 移動、輸送の手段・ 農業、製造業、手工業・ 商業：必需品、贅沢品、家畜、市場もしくはスーク（市）・ 課税、貨幣、通貨、為替・ 女性と経済・ 宗教組織と経済 |
| 町、村、遊牧民の集落 | <ul style="list-style-type: none">・ 遊牧民の集落（オアシス周辺、市場、港）・ 村：規模、住居、構造、場所・ 町と都市：規模、場所、建物 |

詳細学習のための題材

このトピックでは社会と経済の歴史のモデルについて考察するため、試験では、特定の人物や都市などの名称を含む問題は出題されません。以下の一覧においてカッコ内に記載された人物や都市などを具体例として用いることもできますが、その他の例や題材も、このトピックに適切であれば、使用して構いません。

- ・ 君主の地位のはじまりと性質、荘園制度：黒死病流行以前の農民の生活——ドゥームズデイ・ブック、ウェールズ国境地帯（1154～1307）、アンジュー伯（950～1154）
- ・ 中心と周縁：イスラーム世界における地方、町、農村生活（典型的なイスラーム都市）；軍営都市（クーファ）；イスラーム教出現以前の都市（ダマスカス）；地域の中心地；新たな都市の建設（バグダッド）
- ・ 宮廷や宮殿での生活
 - － ヨーロッパ：アリエノール・ダキテーヌ、ブルゴーニュ公支配下におけるフランス
 - － イスラーム世界：側室の女性たち、正妻と母

- ・ 女性の職業：女性の君主（イングランド王ウィリアム1世の娘アデラ、エリザベス・ドゥ・バラ）；農業、ワイン醸造業、ビール醸造業、酪農、織物、卸売商〔フワイリドの娘ハディージャ（619没）〕；魔術師〔マージェリー・ケンプ（1373頃～1440頃）〕
- ・ 家庭生活、結婚と相続
 - － イスラーム世界：アブー・バクルの娘アイーシャ（614頃～78）；ムハマンドの娘ファーティマ（632没）
 - － ヨーロッパ：クリスティーヌ・ド・ピザン（1363頃～1431）；マージェリー・ケンプ（1373頃～1440頃）
- ・ 都市の構成、職業、統治機構：ギルド、フトウツワ（カイロ、コルドバ、ロンドン、パリ、フランドル諸都市、ヴェネツィア）

トピック3：戦争と戦争行為

共同体間または共同体内での戦争と軍拡は、ヨーロッパとイスラーム世界を形づくるにあたって決定的な役割を果たしました。このトピックでは、戦争の種類、その原因、手段、および結果と影響を明らかにし、学習していきます。

主要テーマ

- | | |
|---------|---|
| 戦争の原因 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 王朝 ・ 領土 ・ 宗教 ・ 資源をめぐる争い ・ 人口構造の変化、人口の移動 |
| 戦争行為の発展 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 兵站術、戦術、地上戦と海戦における編成 ・ 軍隊の召集：騎士団、兵役、傭兵 ・ 騎兵、歩兵、武器、甲冑 ・ 城郭、包囲戦 ・ 戦利品、略奪品 ・ 戦争と女性 |
| 結果と影響 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 征服、境界線と王朝の変化 ・ 条約と休戦協定 ・ 徴税と賠償金 ・ 政治、経済、社会、宗教、文化における変化 |

詳細学習のための題材

- ・ リッダ戦争、もしくは「背教者の戦争」(632～3)
- ・ イスラームの初期の歴史における内乱(フィトナ)(656～61および683～5)
- ・ 十字軍(1096～1291)
- ・ ノルマン征服(1066)
- ・ フランスにおけるイギリス国王領の争い(1154～1204)
- ・ 英仏百年戦争(1337～96)
- ・ 戦争の指導者たち:ハーリド・イブン・アル=ワリード、ヌールッディーン、サラーフ・アッディーン、ウィリアム1世(イングランド王)、リチャード1世(イングランド王)、ジョン(イングランド王)、エドワード3世(イングランド王)、ルイ7世(フランス王)、フィリップ2世(フランス王)、シャルル5世(フランス王)
- ・ 以下の戦いの重要性:カーディシーヤの戦い(636/7)、ヘイスティングスの戦い(1066)、マラズギルトの戦い(1071)、アスカロンの戦い(1099)、ヒッティーン(1187)、ブーヴィーヌの戦い(1214)、ポワティエの戦い(1356)

トピック4:知的・文化的・芸術的發展

中世がイスラーム世界においての文化の黄金時代であることは疑いの余地がありませんが、同じ時期、西洋でも宗教思想、建築、彫刻などの分野の隆盛が見られました。また、中世はイスラーム世界とキリスト教世界の間、およびそれぞれの内部において、思想が芸術や学問を通じて伝達、共有された時代でもありました。

主要テーマ

知的發展

- ・ リテラシーと文書資料
- ・ 学問の中心の設立と發展
- ・ イスラーム教徒の古典古代遺産との関わり: 翻訳、論評、原作
- ・ イスラーム世界から西ヨーロッパへの古典古代思想の伝達とその影響
- ・ キリスト教と学問: 修道院や司教座聖堂付属学校が果たした役割
- ・ 12世紀ルネサンス
- ・ 広範囲における科学の發展: 医学、地図作成、哲学

芸術的、文化的發展

- ・ キリスト教文化、イスラーム文化が受けた影響およびもたらした影響、宗教建築
- ・ 文化活動: 祝祭、儀式、暦

- ・ 哲学、文学、詩
- ・ カリグラフィー、写本、本
- ・ 芸術と彫刻

詳細学習のための題材

- ・ 中世イスラームの大モスク：ウマイヤド・モスク（ダマスカス）；岩のドーム（エルサレム）；イブン＝トゥールーン・モスク（カイロ）；メスキータ（コルドバ）
- ・ 大聖堂、教会、巡礼地：ローマ、サンティアゴ・デ・コンポステーラ、カンタベリー大聖堂、ヴェズレー
- ・ 大学、学問の場としての修道院：ダマスカス、バグダッド、カイロ、パリ、ボローニャ、オックスフォード
- ・ イスラーム教の学者：イブン・スィナー（アウィケンナ）（980～1037）、ガザリー（1058～1111）、イブン・ルシュド（アヴェロエス）（1126～98）、イブン・アル＝アラビー（1165～1240）イブン・ハルドゥーン（1332～1406）、ラービア・アダウィーヤ（717頃～801）
- ・ キリスト教の学者：ピエール・アベラール（1079～1142）、ロジャー・ベーコン（1220～92）、オッカムのウィリアム（1285頃～1349）、トマス・アキナス（1225～74）、ヒルデガルト・フォン・ビンゲン（1178没）、バースのアデラード（1160没）、ロバート・グロステスト（1253没）
- ・ 文学者：アブール＝アラール・アル＝マアッリ（973～1057）、ウマル・ハイヤーム（1048～1131頃）
- ・ 俗語文学者：ダンテ・アリギエーリ（1265～1321）、ジェフリー・チョーサー（1340頃～1400頃）、クリスティーヌ・ド・ピザン（1363頃～1431）

トピック5：宗教と国家

ヨーロッパとイスラーム世界においては、比較的小規模のユダヤ教徒の共同体はあったものの、人口のほとんどはキリスト教徒かイスラーム教徒で占められていました。異教やその他の少数派の宗教も存在していましたが、それらはこの項目では扱われません。生徒は教義、信仰、儀式などといった宗教がもつ側面、また、それらが個々人と国家に与えた影響を理解することが求められます。なお、このトピックの主眼点は教義や神学ではなく、あくまで宗教を歴史的な観点から考察することです。

主要テーマ

組織、構成

- ・ キリスト教：ローマ教皇、教区、小教区；修道会
- ・ イスラーム教：カリフ、法学者（ウラマー）、スーフィーの教団

宗教、国家、人々

- ・ 世俗の権力としてのローマ教皇位
- ・ 宗教組織に対する支援・後援
- ・ 政治、行政における聖職者とウラマーの役割
- ・ 支配者と宗教指導者の対立
- ・ 異端信仰と宗教的迫害
- ・ 宗教的組織が社会の変化や政治的發展に及ぼした影響

詳細学習のための題材

- ・ スンナ派とシーア派の分裂：スンナ派「正統」の確立
- ・ ローマ教皇：グレゴリウス7世（1073～85）、ウルバヌス2世（1088～99）、インノケンティウス3世（1198～1216）、グレゴリウス9世（1227～41）
- ・ クレルヴォーのベルナルドゥス（1090～1153）、アッシジのフランチェスコ（1182頃～1226）、聖ドミニコ（1170～1221）
- ・ 修道院の生活、信仰生活：修道会と巡回布教師集団における生活の事例研究（修道会と巡回布教師集団をそれぞれ1つずつ選択すること）
- ・ スーフィーの教団とイスラーム教における法学派
 - － スンナ派：ハナフィー学派、マーリク学派、ハンバル学派、シャーフィイー学派
 - － シーア派：ザイド学派、ジャアファル法学派
- ・ 反対派運動の盛衰
 - － イスラーム教徒：ハワーリジュ派、カルマト派
 - － キリスト教徒：カタリ派（もしくはアルビジョア派）、ワルドー派
- ・ ヘンリー2世とトマス・ベケットの対立（1162～70）
- ・ イギリス、フランス、ドイツにおける反ユダヤ主義

ルート2 「20世紀の世界史」—— 指定学習項目

指定学習項目1：平和創造・平和維持—— 国際関係 1918～36

この「指定学習項目」は、パリ講和会議（およびその構成、影響、問題点）を中心に、1918年から1936年までの国際関係と、軍縮、非暴力による外交政策目標の追求、および国際連盟と多国間協定（連盟が関与しないものも含む）による集団安全保障と国際協調の促進のためにとられた試みを扱います。さらに、調停者や平和推進者の目標はどの程度達成されたのか、また、目標達成にあたってはどのような障害があったのかについても考察していきます。

「資料問題」は、以下の領域に重点を置きます。

- ・ 出席者と調停者のねらいと意図：ウィルソンと十四カ条の平和原則
- ・ 講和条約の条項（1919～20）：ヴェルサイユ条約、サン＝ジェルマン条約、トリアノン条約、ヌイイ条約、セーブル条約／ローザンヌ条約（1923）
- ・ 講和条約がヨーロッパにもたらした地政学および経済的影響；委任統治制度の確立とその影響
- ・ 条約の規定の施行：
 - － アメリカ合衆国の孤立主義：「英米の保障条約」（the Anglo-American Guarantee）からの撤退
 - － 武装解除：ワシントン会議、ロンドン会議、ジュネーブ会議
- ・ 国際連盟：大国不参加の影響；集団安全保障の原則と平和維持の初期の試み（1920～5）
- ・ ルール占領（1923）、ロカルノ条約と「ロカルノの春」（1925）
- ・ 恐慌、国際平和と集団安全保障への脅威：満州（1931～3）とアビシニア（1935～6）

指定学習項目2：アラブーイスラエルの対立 1945～79

この「指定学習項目」は1945年から1979年の間に発展、勃発した中東戦争に焦点をあて、その地域の緊迫状態の促進あるいは緩和の役割を担った諸外国の影響についても考察していきます。この項目では、対立の背景となった政治、経済、社会問題、さらには、1948～49年から1973年にかけて起こった軍事衝突の具体的な原因とその結果について学習することが重要です。加えて、生徒は紛争の対象となったパレスチナ・イスラエルの領土において、この期間における社会と経済の発展の性質とその規模、およびこれらが人々にもた

らした影響についても考察します。なお、この「指定学習項目」の終わりの時期は、エジプト・イスラエル平和条約が締結された1979年とします。

「資料問題」は以下の領域に重点を置きます。

- ・ イギリス委任統治の末期；パレスチナ特別委員会（UNSCOP）の分割案と内乱の勃発
- ・ イギリスの撤退；イスラエルの設立；アラブの反応と第一次中東戦争（1948～49）
- ・ 人口の移動：1947年以降のパレスチナ人の離散；ユダヤ人の移住とイスラエルにおける経済の発展
- ・ スエズ危機（1956）：イギリス、フランス、アメリカ合衆国、ソ連、イスラエル、国際連合の役割
- ・ アラブ民族主義とシオニズム；パレスチナ解放機構（PLO）の出現
- ・ 第三次中東戦争（1967）と第四次中東戦争（1973）：原因、過程および結果
- ・ アメリカ合衆国、ソ連、国際連合の役割
- ・ キャンプ・デービッドとエジプト・イスラエル平和条約

指定学習項目3：共産主義の危機 1976～89

この「指定学習項目」は、主要な社会主義（共産主義）政権が1976年から1989年の間に直面した社会的、政治的、経済的問題、およびこれら諸問題への取り組みを扱います。これらの試練は、その原因が国内的なものであるか対外的なものであるのかに関わりなく、ソ連および中央・東ヨーロッパにおける衛星国の政権崩壊を引き起こした改革へとつながった場合もありましたが、政府が抑圧的な措置によって問題を封じ込め、政権がその時期に権力を維持したケースもありました。

「資料問題」は以下の領域に重点を置きます。

- ・ 毛沢東の死後に起こった権力闘争、華国鋒、鄧小平の復活と「四人組」の敗北
- ・ 鄧小平指導下の中国：経済政策と「四つの現代化」
- ・ 鄧小平指導下の中国：政治的変革とその限界——天安門事件（1989）への発展
- ・ ブレジネフ時代の国内および国外問題：経済と政治の停滞；アフガニスタン
- ・ ゴルバチョフ：ねらいと政策（グラスノスチとペレストロイカ）およびそれらのソ連への影響
- ・ ゴルバチョフの政策がもたらした東ヨーロッパ改革運動への影響：ポーランドにおいて自主管理労働組合「連帯」が果たした役割；チェコスロバキアのビロード革命；ベルリンの壁の崩壊

ルート2 「20世紀の世界史」—— トピック

はじめに

生徒は、以下のリストから**2つ**のトピックを選択して学習します。

- ・ トピック1：戦争の原因・手段・影響
- ・ トピック2：民主主義国家—— 試練と対応
- ・ トピック3：権威主義的国家ならびに一党独裁制国家の始まりとその発展
- ・ トピック4：アフリカとアジアにおける民族運動・独立運動と1945年以後の中央・東ヨーロッパの諸国
- ・ トピック5：冷戦

どのトピックも、異なる地域から選択された事例研究を通して学習していきます。トピックに関する2000年以降の知識は要求されません。

シラバスには、各トピックの「主要テーマ」と「詳細学習のための題材」が明記されています。生徒は「詳細学習のための題材」一覧より選択した題材を、「主要テーマ」を指針としながら学習していきます。また、選択された題材は、次ページに記載の世界地図の中から**2つの地域**をカバーするものでなくてはなりません。この要素を対象とする試験問題（SL・HLの「試験問題2」）では、「主要テーマ」に関する問いが出題されます。また、特定の人物や出来事に関する問題は、主要テーマおよび詳細学習のための題材一覧に記載のあるもののみが対象となります。ただし、自由形式の問題においては、生徒は一覧に記載のある例か、その他の例、もしくはその両方を使用して解答することができます。

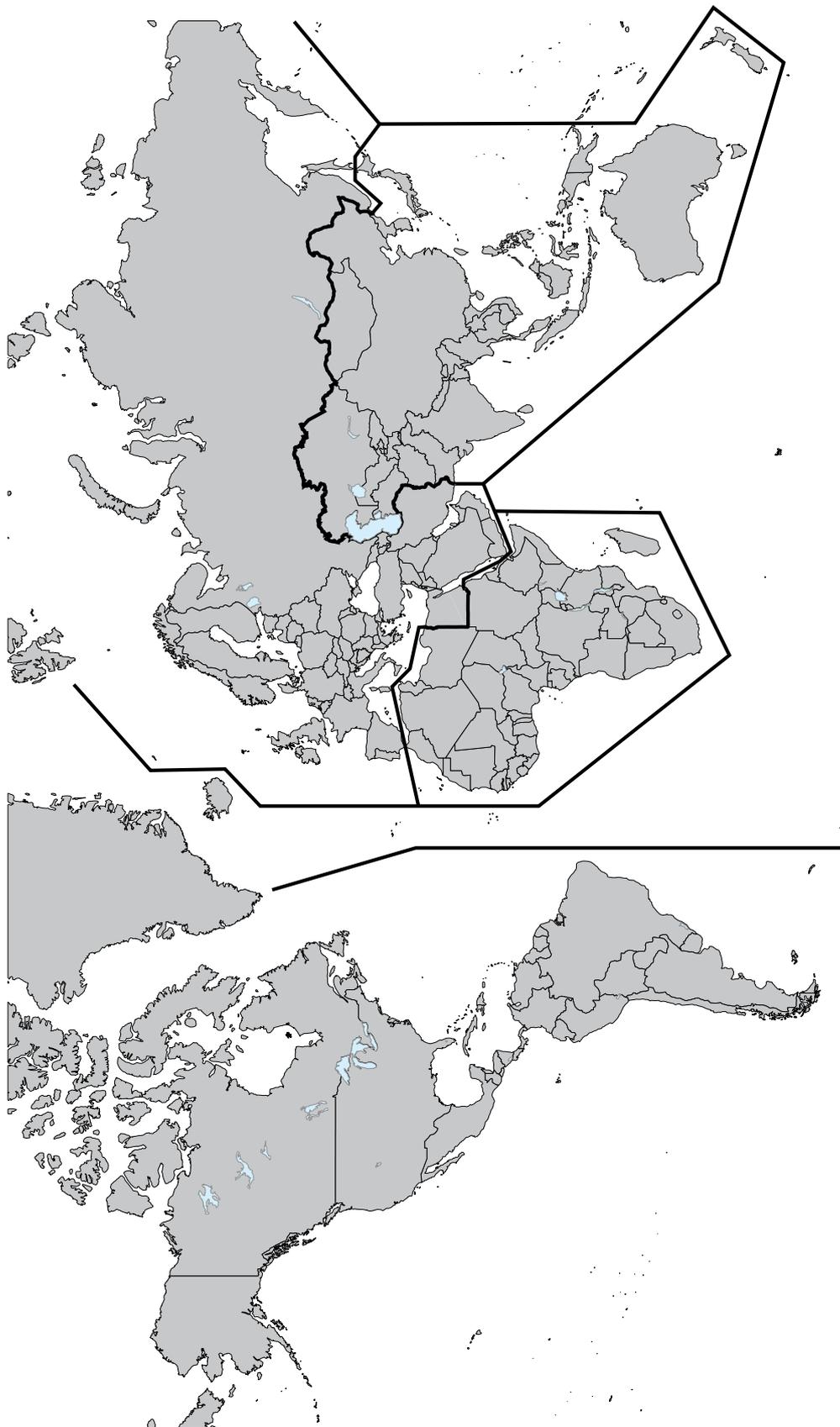


図1

IBの「歴史」で使用する地域区分を記載した世界地図（国境は2000年時点のものを使用）

トピック1：戦争の原因・手段・影響

戦争は、20世紀を特徴づける主要な要素です。このトピックでは、異なる種類の戦争を認識し、それらの原因、手段、結果と影響について学習していきます。

主要テーマ

- | | |
|-----------------------|--|
| 20世紀における戦争の異なる種類とその性質 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 内戦 ・ ゲリラ戦 ・ 限定戦争、総力戦 |
| 戦争の発端と原因 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 長期的要因、短期的要因、直接の原因 ・ 経済的、イデオロギー的、政治的、宗教的要因 |
| 20世紀における戦争の性質 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 技術開発、戦術と戦略、陸、海、空 ・ 戦争中の国内状況：経済的、社会的影響（女性の役割と地位の変化を含む） ・ 抵抗運動、革命運動 |
| 戦争の結果と影響 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 講和条約を伴わない戦争の終結 ・ 集団安全保障の試み——第二次世界大戦前と第二次世界大戦後 ・ 政治的影響と領土の変化 ・ 戦後の経済問題 |

詳細学習のための題材

- ・ 第一次世界大戦（1914～18）
- ・ 第二次世界大戦（1939～45）
- ・ アフリカ：アルジェリア戦争（1954～62）、ナイジェリア内戦（ビアフラ戦争）（1967～70）
- ・ 南北アメリカ：フォークランド（マルビナス）紛争（1982）、ニカラグア革命（サンディニスタ革命）（1976～9）
- ・ アジアとオセアニア：印パ戦争（1947～9、1965、1971）、国共内戦（1927～37、1946～9）
- ・ ヨーロッパと中東：スペイン内戦（1936～9）、イラン・イラク戦争（1980～88）、湾岸戦争（1991）

トピック2：民主主義国家——試練と対応

20世紀は、民主主義国家の樹立、存続、破壊、復興、そのすべてを目撃した時代でした。民主主義国家は国内にも国外にもその存在への脅威となる要素を抱え、圧力にうまく対処できたケースもあれば、もちこたえることができなかったケースもありました。このような経済的、政治的、社会的圧力に対しての民主主義国家の取り組みおよびその結果がこのトピックにおける基軸となります。

主要テーマ

- | | |
|---------------------------|---|
| 民主主義国家（もしくは複数政党制国家）の性質と構造 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 憲法（成文憲法と不文憲法の両方を含む） ・ 選挙制度、比例代表制、連立政権 ・ 政党の役割：反対派の役割 ・ 圧力団体（利益団体、ロビー）の役割 |
| 経済、社会政策 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 雇用 ・ ジェンダー ・ 医療、教育 ・ 社会福祉 |
| 政治的、社会的、経済的試練 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 政治的急進主義 ・ 民族、宗教、ジェンダー ・ 市民権獲得運動 ・ 富や資源の不平等な分配 |

詳細学習のための題材

- ・ アフリカ：南アフリカ（1991～2000）、マンデラ；ナイジェリア（1961～6）
- ・ 南北アメリカ：
 - アルゼンチン（1983～95）：アルフォンシンとメネム
 - カナダ（1968～84）：トルドー
 - アメリカ合衆国（1953～73）：アイゼンハワー、ケネディー、ジョンソン、ニクソン
- ・ アジアとオセアニア：
 - インド（1947～64）：ネルー
 - 日本（1945～52）：戦後復興
 - オーストラリア（1965～75）
- ・ ヨーロッパと中東：
 - フランス（1958～69）：ド・ゴール

- 大英帝国と北アイルランド（1967～90）
- ヴァイマル共和国（1919～33）

トピック3：権威主義的国家ならびに一党独裁制国家の始まりとその発展

20世紀は、多くの権威主義的国家と一党独裁制国家が生まれた時代でした。このトピックでは、これらの政権の起源、イデオロギー、政治形態、構成、性質、影響を学習していきます。

主要テーマ

- | | |
|-----------------------|---|
| 権威主義的国家と一党独裁制国家の起源と性質 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 権威主義的国家と一党独裁制国家を生み出した条件 ・ 指導者の出現：狙い、イデオロギー、支持 ・ 全体主義：ねらいと達成の度合い |
| 権威主義的国家と一党独裁制国家の確立 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 方法：暴力、法 ・ 政治形態、(左翼・右翼の) イデオロギー ・ 反対勢力の性質、規模およびそれらへの対処 |
| 国内政策とその影響 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 政治と行政の構造と構成 ・ 政治政策、経済政策、社会政策、宗教政策 ・ 教育の役割、芸術、メディア、プロパガンダ ・ 女性の地位、宗教グループや少数派の扱い |

詳細学習のための題材

- ・ アフリカ
 - ケニア：ケニヤッタ
 - ダンザニア：ニエレレ
- ・ 南北アメリカ
 - アルゼンチン：ペロン
 - キューバ：カストロ
- ・ アジアとオセアニア
 - 中国：毛沢東
 - インドネシア：スカルノ
- ・ ヨーロッパと中東
 - ドイツ：ヒトラー
 - ソ連：スターリン
 - エジプト：ナーセル

トピック4：アフリカとアジアにおける民族運動・独立運動と1945年以後の中央・東ヨーロッパの国家

帝国支配の衰退と新たな国家の出現は、20世紀、特に第二次世界大戦後における重要な発展となりました。このトピックは、アフリカとアジアにおける脱植民地化と、東ヨーロッパにおけるソ連支配の崩壊およびヨーロッパのその他の地域における新たな国家の出現を扱います。民族運動および独立運動のはじまりと発展、植民地独立後の政府（もしくは新たな国家）の形成、新政府が直面した国内外の問題、またそれらの解決に向けての取り組みに重点が置かれます。

なお、アフリカとアジアにおける民族運動および独立運動と1945年以後のヨーロッパにおける新たな国家の出現を比較・対比することはこのトピックにおいて**求められていません**ので、留意して下さい。

主要テーマ

- | | |
|---|---|
| アフリカとアジアにおける
民族運動および独立
運動のはじまりと発展 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 反植民地主義（イギリス、オランダ、フランス、ベルギー、ポルトガルによる植民地支配に対する抵抗） ・ ナショナリズム、政治的イデオロギー、宗教 ・ 2つの世界大戦と冷戦の影響 ・ 民族運動・独立運動の発展を助長したその他の要因 |
| アフリカとアジアにおける
独立達成のためにとられた
手段 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 武装闘争 ・ 非暴力による独立運動、エリート、大衆による運動 ・ 民族運動・独立運動における指導者の役割と重要性 ・ 政治組織 |
| ソヴィエトまたは中央・東
ヨーロッパ、バルカン半島
における中央集権的支配へ
の挑戦 | <ul style="list-style-type: none"> ・ ソヴィエトまたは中央集権的支配に挑んだ運動のはじまりと発展 ・ 指導者と組織の役割と重要性 ・ ソヴィエトまたは中央集権的支配からの独立達成のためにとられた手段 |
| 植民地独立後の新政府およ
び新国家の形成と試練 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 植民地の遺産、新植民地主義と冷戦 ・ 近隣諸国との対立 ・ 政治経験の不足 ・ 経済問題 ・ 社会的、宗教的、文化的問題 ・ 民族運動、分離運動 |

詳細学習のための題材

アフリカとアジアにおける民族運動・独立運動

- ・ 運動
 - アフリカ：アルジェリア、アンゴラ、ベルギー領コンゴ（ザイール）、ガーナ、ローデシア（ジンバブエ）
 - アジア：インド、パキスタン、インドシナ半島
- ・ 指導者：ベン・ベラ（アルジェリア）、ホー・チ・ミン（ベトナム）、ジンナー（パキスタン）、ガンディー（インド）、ムガベ（ジンバブエ）、エンクルマ（ガーナ）

1945年以後の中央・東ヨーロッパにおける民族運動・独立運動

- ・ 運動：チェコスロバキア、ハンガリー、ポーランド、ユーゴスラビア（およびその崩壊と崩壊後の継承国）
- ・ 指導者：ワレサ（ポーランド）、ハヴェル（チェコスロバキア）

トピック5：冷戦

このトピックでは1945年以降の東西関係を扱います。学習を通じて、第二次世界大戦終了から1990年代前半にかけての世界情勢に著しい影響を与えた冷戦の起源、過程、影響に対する国際的な視点と理解を促すことを目標とします。超大国の対立のみならず、勢力範囲、代理戦争、同盟、発展途上国への干渉などといった冷戦期における政治の影響を受けたすべての領域における出来事が、学習の対象となります。

主要テーマ

- | | |
|------------|--|
| 冷戦の起源 | <ul style="list-style-type: none"> ・ イデオロギーの違い ・ 相互不信と相互不安 ・ 戦時の連合国から戦後の敵へ |
| 冷戦の性質 | <ul style="list-style-type: none"> ・ イデオロギー的対立 ・ 超大国と勢力範囲 ・ 冷戦における同盟と外交 |
| 冷戦の発展とその影響 | <ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパから始まった冷戦の世界的な広がり ・ 冷戦時の政策：封じ込め、瀬戸際政策、平和共存、デタント ・ 国連と非同盟運動の役割 ・ 指導者の役割と重要性 ・ 軍備拡張競争、兵器拡散とその制限 ・ 社会的、文化的、経済的影響 |

冷戦の終結

- ・ ソ連の崩壊：国内問題と国外からの圧力
- ・ 中央・東ヨーロッパにおけるソヴィエト支配の崩壊

詳細学習のための題材

- ・ 戦時中の会議・会談：ヤルタ会談とポツダム会談
- ・ アメリカ合衆国の政策とヨーロッパにおける展開：トルーマン・ドクトリン、マーシャル・プラン、北大西洋条約機構（NATO）
- ・ 中央・東ヨーロッパにおけるソヴィエトの政策とソ連化、経済相互援助会議（COMECON）、ワルシャワ条約機構
- ・ 中ソ関係
- ・ 米中関係
- ・ ドイツ（特にベルリン、1945～61）、コンゴ（1960～64）、アフガニスタン（1979～88）、朝鮮、キューバ、ベトナム、中東
- ・ カストロ、ゴルバチョフ、ケネディー、毛沢東、レーガン、スターリン、トルーマン

HL 選択項目

HL 選択項目 1：中世ヨーロッパとイスラーム世界の歴史

この選択項目では、キリスト教の普及とイスラーム教の隆盛が始まった500年ごろから1570年までのヨーロッパとイスラーム世界の歴史に焦点をあて、異なる時代と地域における連続性および変化について考察していきます。また、学習における主要分野は、イスラームとヨーロッパの歴史における重要な側面を含むものとなっています。

なお、試験問題は、この「指導の手引き」に記載のある人物と出来事以外からは出題されません。

生徒は**3つ**のセクションを詳細な学習の対象として選択します。

注： この選択項目は、ルート1の「SL・HL共通項目」（「指定学習項目」と「トピック」）を学習した生徒**のみ**が選択できます。

1. キリスト教 500 頃～1300

キリスト教会の成長と発展に焦点をあてるこのセクションでは、生徒はキリスト教会の隆盛を改宗のプロセス、教育への影響、政治、財政、文化との関連から学習していきます。なお、このトピックでの焦点はキリスト教という「宗教」の発展であり、「教義」の発展ではありませんので、留意して下さい。

- ・ 初期の修道院制度：ヌルシアのベネディクトゥス（480 頃～550）；聖ベネディクトゥスの戒律
- ・ 900年ごろからの修道会改革
 - ベネディクトゥス修道院の発展とその影響、新しい修道会設立の理由：クリューニー会（910）、カルトジオ修道会（1084）、シトー修道会（1098）
 - 修道会間の類似点と相違点
- ・ 巡回布教師団（托鉢修道士）の設立、任務、および影響：アッシジのフランチェスコ（1182 頃～1226）、聖ドミニコ（1170～1221）
- ・ 修道士（monk）と托鉢修道士（friar）の生活と任務の比較と対比
- ・ 女性の修道院制度：ギルバート修道会とビルギッタ会；マーキエートのクリスティーナ（12 世紀）、スウェーデンのビルギッタ（14 世紀）

- ・ローマ教皇の権力拡大がもたらした教会、世俗における影響：グレゴリウス7世（1073～85）、ウルバヌス2世（1088～99）、インノケンティウス3世（1198～1216）
- ・叙任権闘争（1075～1122）

2. ファーティマ朝 909～1171

このセクションは、シーア派の一派であり、独自のイデオロギーをもったイスマール派に焦点をあてます。北アフリカにおいて急進的に権力を拡大した909年以降、イスマール派はエジプトを征服し、969年にはイスラームの新たな都をカイロに建設しました。アッバース朝の分裂とともに、彼らはイスラーム世界に多大な影響を及ぼすようになり、それと同時に地中海と紅海エリアにおいての経済と商業の発展を促進する役目も果たすようになりました。

- ・ファーティマ朝の出現とその背景：マグリブ（北アフリカ）段階
- ・エジプトの征服とカイロの建設
- ・ファーティマ朝によるカリフの位の主張：アッバース朝とスペインの後ウマイヤ朝
- ・ファーティマ朝のイデオロギーとその歴史的影響；宗教における関係性（イスラーム教徒、コプト教徒、ユダヤ教徒）
- ・ファーティマ朝の影響下における貿易を含む、経済の発展
- ・ファーティマ朝の絶頂期：行政機関；教育機関
- ・ファーティマ朝の衰退：内部分裂；外部からの圧力
- ・事例研究を**2つ**（以下の項目より選択）：ムイッズ（953～75）、ハーキム（996～1021）、ムスタンスィル（1036～94）

3. イギリスとフランスにおける君主政 1066～1223

このセクションではイギリスとフランスにおける王国政治体制の確立、特色、そしてその変化を学習していきます。イギリスにおけるノルマン征服は政治と行政に数多くの変化をもたらしました。貴族の権力は依然として重要な要素だったものの、イギリスとフランスにおける君主制は11世紀の後半と12世紀を通してその権限を拡大し、より強力かつ洗練されたものとなりました。

- ・ノルマン朝：ノルマンディー公ウィリアム1世（イングランド王1066～87）；権威の確立、国内および国外政策；ドゥームズデイ・ブック；ヘンリー1世（1100～35）
- ・アンジュー朝（プランタジネット朝）：ヘンリー2世（1154～89）；イングランド、アイルランド、ガスコーニュにおける政策
- ・ノルマンディー公国：その発展とフランスとの関係およびフランスにもたらした影響
- ・イングランド王としてのノルマンディー公とフランス王の間における対立と戦争
- ・カペー朝支配下のフランスにおける王室の領土と権力の拡大：ルイ6世（1108～37）、ルイ7世（1137～80）、フィリップ2世（1180～1223）
- ・イギリスとフランスにおける王国政治体制の性質の比較

4. 十字軍 1095～1291

このセクションは、第1回十字軍招集から十字軍国家の崩壊までの十字軍運動とそれに対するイスラーム側の反応を扱い、特に、十字軍時代の最初の世紀における出来事に焦点をあてていきます。十字軍がもたらした結果、および西洋とイスラーム世界に与えた影響を説明するため、十字軍側、イスラーム側双方における指揮、戦術、戦略を考察することが求められます。

- ・ 十字軍の起源と動機：宗教的理由と世俗的理由；聖地；巡礼と伝道；ジハードの理論と実践
- ・ 第1回十字軍（1095～9）：成功の理由；結果
- ・ 十字軍国家の建設：エルサレム王国、アンティオキア公国、エデッサ伯国、トリポリ伯国
- ・ 第2回十字軍（1145～9）と第3回十字軍（1189～92）：原因と結果
- ・ 以下の人物の十字軍への関与：アデマール・ド・モンテユ、ゴドフロワ・ド・ブイヨン、ロベール2世（ノルマンディー公）、ボードゥアン1世（フランドル伯）、ボエモン1世（アンティオキア公）、リチャード1世（イングランド王）、ザンギー、ヌール・アッディーン、サラーフ・アッディーン（サラディン）、バイバルス
- ・ 十字軍の軍事的側面：戦術、主要な戦いと武器；テンプル騎士団員、聖ヨハネ騎士団、イスマイル（シーア派）
- ・ 十字軍とイスラームの両サイドにおける、十字軍時代を通じての成功と失敗の理由
- ・ 中世ヨーロッパにおける十字軍の影響と重要性、ビザンツ帝国とイスラーム世界

5. モンゴル帝国 1200～1405

このセクションは、低迷していたアッバース朝においてのモンゴルによる東部の侵略と首都バグダッドの略奪（1258年）、およびその後の、さらに西方のイスラーム王朝に対するモンゴルの脅威に焦点をあてます。モンゴル人は最終的にはイスラーム教を受容したため、イスラーム教はモンゴルの独自の支配のもとではありますが、その領域を大幅に広げることになりました。

- ・ モンゴル帝国の出現と初期のチンギス・ハン
- ・ モンゴル侵攻直前におけるイスラーム世界の様子；アッバース朝の状態、十字軍がイスラーム世界に与えた影響
- ・ モンゴル帝国によるイスラーム世界の侵略；中央アジアとイランの荒廃
- ・ フラグ指導下でのモンゴル侵攻の第二波：アラムートの破壊およびバグダッドとシリアの陥落
- ・ マムルークの反撃：アイン・ジャールートとの戦いとその結果
- ・ モンゴル侵攻の軍事的およびイデオロギー的影響
- ・ チンギス・ハン（1206～27）、フラグ（1256～65）、ティムール（1370～1405）

6. スペインにおけるイスラーム教徒・キリスト教徒・ユダヤ教徒の相互作用 711～1492

このセクションでは8世紀におけるイスラーム勢力のイベリア侵攻から1492年のグラナダ陥落までの歴史を学習していきます。756年にイスラーム世界における他勢力と決別したのち、アンダルスはイスラーム世界東部と競合しながら独自の政治的宿命をたどり、魅惑的なスペイン・アラブ社会を築くこととなりました。

- ・イスラーム勢力による支配の背景：コルドバにおける後ウマイヤ朝支配（756～1031）、政治と社会
- ・イスラーム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒の生活における文化的、経済的側面と、その相互作用および相互影響
- ・アラブ支配の崩壊；タイファ（分立する諸王）時代；キリスト教王国の拡大（カスティーリャ王国、アラゴン王国、ナバラ王国）
- ・ベルベル人王朝の隆盛：ムラービト朝（1061～1147）、ムワッヒド朝（1147～1269）
- ・レコンキスタ；キリスト教側の成功の理由；グラナダ陥落
- ・アンダルスとイスラーム世界東部の関係；アンダルスのイスラーム世界における貢献
- ・アブド・アッラフマーン1世（756～88）、アブド・アッラフマーン3世（912～61）、アル＝ムウタミド（1069～91）、フェルナンドとイザベル（1452～1516）

7. 皇帝と国王たち 1150～1300

このセクションは、中世の歴史における重要な特色である、中央政府の衰退と再建に焦点をあてます。中央権力の回復とその手段は、現代の国民国家の原理と構造の土台を築くにあたってきわめて重要な役割を果たしました。主要な指導者について学習していくことにより、中央権力の回復に伴った過程や方策の理解が促されます。

- ・神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世（1155～90）とフリードリヒ2世（1220～50）：宗教、政治、軍事、外交における政策とその影響
- ・フランスにおける王権の拡大、行政および外交：ルイ9世（1226～70）、フィリップ4世（1285～1314）
- ・イングランドにおける王権の拡大と保持、および行政：ジョン（1199～1216）、ヘンリー3世（1216～72）
- ・エドワード1世（1272～1307）：立法、行政、征服と撤退（ウェールズ、スコットランド、フランス）
- ・イングランドにおける議会の起源：シモン・ド・モンフォール（1208頃～65）、エドワード1世

8. 中世後期の政治危機 1300～1485

中世後期は、王室の権威の危機を目撃した時代でした。このような危機は、継承と支配を正当化するにあたっての問題となり、また、増税と政治不信を招いた王国間の対立は、

国内における政治の不安定さを生み出すことになりました。これらの対立の原因と結果を理解するため、対立の根源および当事者について詳しく学習していくことが求められます。

- ・ イギリスにおける継承危機：エドワード2世（1307～27）、リチャード2世（1377～99）
- ・ イギリスとフランスの戦争（1415～53）：アキテーヌ地域圏の重要性、勝利と敗北およびその影響
- ・ 15世紀のイギリスとフランスにおける君主制の危機と王室権威への挑戦：バラ戦争と「マッド・ウォー」（the Mad War もしくは the War of the Public Weal）
- ・ 王権の性質と試練：ヘンリー6世（1422～61）、エドワード4世（1461～83）、ルイ11世（1461～83）
- ・ ブルゴーニュ公の繁栄と衰退がもたらした影響：「豪胆公」フィリップ2世（1363～1404）、「無怖公」ジャン1世（1404～19）、「善良公」フィリップ3世（1419～67）、「無鉄砲公」シャルル（1467～77）

9. 14世紀における飢饉・伝染病と社会の変化

このセクションは、西ヨーロッパに特に焦点をあて、飢饉と疫病が人々や社会に与えた影響を考察します。環境災害と人口崩壊は、町と農村部における統治と労働力に多大な政治的、社会経済的影響を与えました。

- ・ 14世紀前半の飢饉（例：北ヨーロッパ 1315～17）
- ・ 黒死病の発生と流行（1348～9）
- ・ 都市、町、農村部、ならびに貿易に与えたさまざまな影響を示す根拠；長期的な人口変化
- ・ 農村部における社会的変化：賃金のインフレ、荒廃地域、農村部の放棄；経済生活の収縮；農奴制の衰退、「困い込み」のはじまり
- ・ 黒死病に対しての宗教的反応：ドイツにおけるユダヤ人の虐殺；宗教復興；鞭打苦行者
- ・ 民衆による暴動：14世紀のフランドル地方；1381年のイギリスの農民反乱（ワット・タイラーの乱）

10. オスマン帝国 1281～1566

このセクションでは、西洋とイスラーム世界の歴史の分岐点である、オスマン帝国によるコンスタンティノープル征服に焦点をあてます。オスマン帝国のイスラーム世界における部分的な征服と、バルカン半島への勢力の拡大がこのトピックにおいての主眼点となります。イスラームの政治、行政、法律の発展を理解するにあたって、オスマン帝国の指導者について学習することはきわめて重要となります。

- ・ オスマン帝国の出現：アナトリア半島とバルカン半島

- ・ オスマン帝国によるビザンツ帝国の侵略と占領；コンスタンティノーブル陥落（1453）およびその影響；オスマン帝国建設がヨーロッパとイスラーム世界にもたらした影響
- ・ オスマン帝国の成功の理由
- ・ サファヴィー朝の出現とオスマン帝国との対立
- ・ オスマン勢力の拡大：エジプトとシリアの征服；マムルーク朝陥落；影響と重要性
- ・ オスマン帝国の軍事と行政の性質；イスラーム世界にもたらした変化
- ・ イスラーム文化とヨーロッパ文化へのオスマン帝国の貢献
- ・ 事例研究を**2つ**（以下の項目より選択）：メフメト2世（1451～81）、セリム1世（1512～20）、「壮麗帝」スレイマン1世（1520～66）

11. イタリアにおけるルネサンス期の政治体制と社会 1300～1500

このセクションでは、ルネサンス期における政治体制と社会の起源とその特色について考察します。イタリアの都市における富と文化の活力はルネサンスにおいてきわめて重要な役割を果たしました。強い影響力をもった王侯や教会のパトロンたちは経済、政治、王権などさまざまな理由から芸術を促進しました。また、ルネサンス期は権力や国家の性質についての新たな思想が生まれた時代でもありました。

- ・ イタリアの都市国家における政治形態：ミラノ、フィレンツェ、ヴェネツィアの事例研究
- ・ イタリアにおけるルネサンスの起源、要因、発展
- ・ イタリアの都市：富、教育、対立（フィレンツェ、ローマ、ヴェネツィア）
- ・ ルドヴィーコ・スフォルツァ（1452頃～1508）、ロレンツォ・デ・メディチ（1449～92）チェーザレ・ボルジア（1457頃～1507）、ルクレツィア・ボルジア（1480～1519）
- ・ 支援・後援
 - － メディチ、スフォルツァ、ヴェネツィア共和国
 - － ローマ教皇：アレクサンデル6世（1492～1503）、ユリウス2世（1503～13）、レオ10世（1513～21）
- ・ ルネサンス芸術の政治的、社会的役割、文学と建築
- ・ カスティリオーネとマキャヴェッリの政治学の著作

12. 新たな地平線：大航海時代 1400～1550

西洋社会における富の増加と世俗化は、科学と技術の進歩とあいまって長距離航海の実現に大きく貢献しました。一方で、それとは対照的に、同時期のイスラーム世界では東部の陸上ルートおよび地中海を経由する海上ルートの衰退と迂回が目立ちました。この時代には西洋の探検家がイスラーム世界で開発された技術を採用しさらに進化させることにより、西はアメリカ大陸、東はインド亜大陸とモルッカ諸島（「香料諸島」）への探検および領土拡張が可能となりました。

- ・ 探検と14世紀と15世紀におけるその増加の理由； 宗教と探検、知の探求；高級品のための新たな貿易ルートの開拓
- ・ イスラーム世界：イスラーム世界内における人々の移動の理由、動機；内部における地政学的変化と外部からの影響；従来の貿易ルートの乱れ、東地中海の重要性の低下
- ・ 造船、地図作成、航海技術の探検における重要性と、探検に与えた影響
- ・ 支援・後援：エンリケ航海王子（ポルトガル）、コロンブス（スペイン）
- ・ 目的地：「新世界」、インド亜大陸
- ・ 以下の事例研究：イブン・バトゥータ（1350 頃を中心に活動）、フェルディナンド・マゼラン（1521 没）、ヴァスコ・ダ・ガマ（1524 没）、イブン・マージド（1500 頃没）、ピーリー・レイース（1554 没）

HL 選択項目 2：アフリカの歴史

この選択項目は、1800年から2000年までの、200年にわたるアフリカの歴史を扱います。ただし、対象となる年代と地域のどちらも非常に広範囲であるため、これらをすべて網羅するような学習を行うことは不可能です。そこで、アフリカ大陸においての異なる植民地大国の影響を考慮した上で、学習を深めるための主要分野をあらかじめ選出しました。アフリカにおける植民地独立前と独立後の、政治、経済、社会の歴史と変化を学習していきます。

なお、試験問題は、この「指導の手引き」に記載のある人物と出来事以外からは出題されません。

生徒は**3つ**のセクションを詳細な学習の対象として選択します。

注： この選択項目は、ルート2の「SL・HL共通項目」（「指定学習項目」と「トピック」）を学習した生徒**のみ**が選択できます。



図 2

アフリカの地図（国境は 2000年時点のものを使用）

1. 植民地時代以前のアフリカ諸国（中央・東アフリカ） 1840～1900

このセクションは、植民地時代到来前の中央・東アフリカ諸国（もしくは王国）とその建設に焦点をあて、これらの国家の政治的、社会的、経済的構造と、国家誕生に貢献した要因を探っていきます。アフリカにおいての国家建設がいかに困難であったかを理解するにあたって、さまざまな指導者たちの貢献と、外国人の侵入に対しての彼らの反応を学習することがきわめて重要です。

- ・ スーナ王とムテサ王の統治下におけるブガンダ王国の隆盛（1884年まで）
- ・ ミランボ指導下のニャムウェジ族およびムクワワ指導下のへへ族の隆盛
- ・ テオドロス 2 世（1855～1868）、ヨハンネス 4 世、メネリク 2 世の指導下におけるエチオピアの再統一と拡大

- ・ スーダンにおけるマフディー国家の出現（1881～98）：政治、社会、経済の構造
- ・ レワニカ指導下におけるロジ王国の出現：政治、社会、経済の構造
- ・ ムジリカジとロベングラ指導下におけるンデベレ王国の出現：政治、社会、経済の構造

2. 植民地時代以前の 아프리카諸国（南部・西アフリカ） 1800～1900

植民地時代到来前の南部・西アフリカの国家に焦点をあてるこのセクションでは、国家建設にあたっての尽力と、存続可能な国家の成長に貢献した政治的、社会的、経済的要因、およびこれらの国家における政治的指導力の役割を探っていきます。西アフリカに関しては、ソコト・ジハードを成功へと導いた宗教的、社会的、政治的理由を分析し、また、このジハードがもたらした複雑な結果を考察します。ニジェールデルタでは、ヤシ油貿易の成長により、この貿易の技術に長けた、新たな指導者が生まれました。南部アフリカに関しては、ズールー王国とソト王国の学習に加え、これまでも盛んに議論されてきた、ムフェチャネ（Mfecane）と呼ばれる、長期にわたる民族移動と対立の理由を考察します。

- ・ シャカ・ズールーの指導下におけるズールー王国の出現：政治、社会、経済の構造
- ・ ムフェチャネ：政治的、社会的、経済的要因と結果
- ・ モシェシェ指導下のソト王国：政治、社会、経済の構造
- ・ サモリ・トゥーレ指導下におけるマンディンカ帝国の出現：政治、社会、経済の構造
- ・ ウスマン・ダン・フォディオ指導下のソコト帝国：帝国出現の要因とその影響
- ・ オセイ・トゥトゥ指導下でのアシャンティ王国の繁栄と衰退：衰退の原因とその結果
- ・ ニジェールデルタでの貿易事情：ナナ王とジャジャ王の隆盛と統治

3. ヨーロッパ帝国主義とアフリカ併合 1850～1900

このセクションでは、貿易商人、探検家、宣教師の活動を皮切りに始まった、19世紀におけるヨーロッパ諸国のアフリカへの関心の高まりの理由を探っていきます。生徒はアフリカ分割におけるヨーロッパ側とアフリカ側両方の背景を考察し、アフリカ国家の軍事と政治のもろさがどのようにしてアフリカ併合を促進したのかを分析します。さらには、アフリカでのヨーロッパ帝国主義における経済要因と政治要因の相対的重要性を評価し、コンゴにおけるベルギー王レオポルド2世の活動、エジプトにおけるイギリス人の活動、そしてベルリン西アフリカ会議の結果がアフリカ分割を促進する上でどのような役割を果たしたのかという歴史学的議論を詳しく考察していきます。

- ・ アフリカにおけるヨーロッパ人の活動の拡大：貿易商人と探検家
- ・ アフリカ分割におけるヨーロッパ側の背景：国家間競争；戦略的要因；経済的要因、人道的要因
- ・ アフリカ分割におけるアフリカ側の背景：軍事、技術、行政の脆弱さ；政治と文化における不調和
- ・ コンゴにおけるベルギー王レオポルド2世とピエール・ブラザの活動

- ・ エジプト問題：フランス・イギリス間の競争とイギリスによる占領
- ・ ドイツによる併合、ベルリン西アフリカ会議とその影響

4. ヨーロッパ帝国主義への反応（中央・東アフリカ） 1880～1915

このセクションは、中央・東アフリカにおける共同体および国家の、その独立性の喪失に対する対応を扱います。経済的、政治的、社会的、宗教的要因は、さまざまな地域における対応のあり方に大きな影響を与えました。生徒は、ヨーロッパ帝国主義への抵抗と協調それぞれの理由と結果を比較し対比して、そのさまざまな反応を詳しく学習していくことが求められます。

- ・ 抵抗と協調：ムワンガ王とアポロ・カグワ指導下のブガンダ王国（1884～1900）
- ・ メネリク2世指導下でのエチオピア抵抗運動：成功の理由
- ・ サモエイ指導下でのナンディ抵抗運動（1895～1906）：原因、性質、結果
- ・ ドイツ統治に対する抵抗：マジ・マジ反乱（1905）の原因、過程、結果
- ・ レワニカとロベンガラ：イギリスとの関係
- ・ ンデベレ・ショナ反乱：第一次チムレンガ戦争（1896～7）の原因、過程、結果
- ・ マラウイにおけるジョン・チレンブウェの反乱（1915）：原因、過程、結果

5. ヨーロッパ帝国主義への反応（南部・西アフリカ） 1870～1920

このセクションは、南部・西アフリカにおける共同体および国家の、その独立性の喪失に対する対応を扱います。経済的、政治的、社会的、宗教的要因は、さまざまな地域における対応のあり方に大きな影響を与えました。生徒は、ヨーロッパ帝国主義への抵抗と協調それぞれの理由と結果を比較し対比して、そのさまざまな反応を詳しく学習していくことが求められます。

- ・ ナミビアにおける征服と抵抗；ヘレロ族、ナマ族、ドイツ人；抵抗の原因と結果
- ・ ボツワナにおけるカーマによる統治とイギリスとの関係（1923年まで）：協調関係の事例研究
- ・ ズールー王国の征服と破壊、セテワヨ・カムパンデの退位
- ・ アシャンティ王国：イギリスによる併合（1901）；アングロ・アシャンティ戦争の原因と結果
- ・ フランス統治に対するマンディンカの抵抗：フランスによるマンディンカ帝国への介入と破壊（1880～98）

6. 南アフリカにおける発展 1880～1994

このセクションは、イギリスに征服されたのちの南アフリカ、鉱物資源の発見がもたらした政治的、経済的、社会的影響、そしてボーア人による政治権力保持のための奮闘に焦点をあてます。生徒は、ボーア戦争（もしくは南アフリカ戦争）の原因と、南アフリカ連

邦の設立を含むその短期的影響と長期的影響を考察します。また、スマッツとヘルツォークによる人種差別からマランとフルウールトによるアパルトヘイト政策の確立までの、「黒色人種」に対する政策の変化を掘り下げて学習していきます。

- ・ ダイヤモンドと金の発見：政治的、社会的、経済的影響
- ・ 第二次ボーア戦争（1899～1902）：原因、結果、連合法
- ・ スマッツとヘルツォークの政策（1910～48）；人種差別、人種隔離、抗議運動
- ・ 国民党：マランの政策（1948）；フルウールトのアパルトヘイト政策とその影響；バントゥースタンの創設とその影響（1948～60）
- ・ アパルトヘイトへの抵抗：アフリカ民族会議、シャープビル虐殺事件、ステイーヴ・ビコと黒人意識運動；ソウェト蜂起
- ・ 政治、社会、経済の発展；アパルトヘイトに対する国際社会の反対
- ・ デクラークによるアフリカ民族会議の非合法化の解除；マンデラの解放；民主南アフリカ会議（CODESA）；憲法協定；1994年の選挙

7. 植民地統治下のアフリカ 1890～1980

このセクションでは、1890年から独立獲得までの中央・東・西アフリカにおける植民地統治体制の確立に焦点をあて、植民地時代におけるイギリス、フランス、ドイツ、ポルトガルの統治体制とその影響、および経済と社会の発展を綿密に比較研究していきます。また、生徒はケニア、アンゴラ、モザンビークにおいて入植者の存在が政治の発展にどのような影響を与えたのかを学習することが求められます。

- ・ ケニアにおけるイギリスの統治：植民地行政、入植者の圧力；経済、社会の発展（1963年まで）
- ・ ドイツおよびイギリス統治下のタンガーニカ（1961年まで）
- ・ イギリス統治下のニヤサランドと北ローデシア：経済、社会の発展（1964年まで）
- ・ ポルトガル統治下のアンゴラとモザンビーク：経済、社会の発展（1975年まで）
- ・ ナイジェリアにおける間接統治と直接統治：統治体制の選択に影響を与えた要因、メリットとデメリット、影響（1960年まで）
- ・ ゴールド・コースト：植民地統治；経済、社会、政治の発展（1957年まで）
- ・ セネガル：フランスによる植民地統治；経済、社会、政治の発展（1960年まで）

8. 19・20世紀における社会と経済の発展 1800～1960

このセクションでは、中央・東アフリカ、南アフリカ、西アフリカ、北アフリカのいずれか**1地域**における社会と経済の発展に関しての深い知識を得ることが要求されます。植民地統治以前と植民地統治期間における女性の地位における変化の考察と、イスラーム教およびキリスト教の普及とアフリカ独立教会の発展の理由および影響の比較分析が、このセクションにおける重要な要素となります。また、これに加えて、教育、文化、芸術の分野における連続と変化の度合いも考察していきます。なお、学習の対象として選択された地域は、試験答案の冒頭部分に明記することとします。

- ・ 奴隷制の経済；奴隷貿易の廃止と正当な通商の拡大
- ・ イスラーム普及がもたらした政治的、宗教的影響
- ・ 女性の役割における変化
- ・ キリスト教の普及：普及の要因；社会、文化に与えた影響
- ・ アフリカ独立教会運動
- ・ 教育、芸術、文化における伝統と変化

9. 民族運動・独立運動（中央・東アフリカ）

このセクションでは、中央・東アフリカにおける脱植民地化への取り組みを扱います。植民地主義に対する1920年頃までの反応を扱ったセクション4、5とは異なり、このセクションでは、より後期の、政治的自由の奪還を目指した取り組みに焦点をあてます。生徒は、独立達成の時期を左右した要因、内部要因と外部要因の相関的寄与、民族運動や政党および指導力の役割、そして植民地大国の反応を比較分析することが求められます。また、これに加えて、独立はなぜ時には平和的な交渉で達成され、時には武装闘争を伴ったのか、その理由をしっかりと理解することが重要です。

- ・ タンガニーカ：タンガニーカ・アフリカ民族同盟；ジュリウス・ニエレレ（1961年まで）
- ・ ウガンダ：政党、民族・宗教間対立；1962年の独立
- ・ ケニア：労働組合；マウマウ団の乱；ジョモ・ケニヤッタとケニア・アフリカ民族同盟（KANU）（1963年まで）
- ・ ロードシアからジンバブエへ：イアン・スミス；一方的独立宣言（UDI）；ロードシア紛争；ロバート・ムガベ（1963～80）
- ・ 中央アフリカ連邦の崩壊；マラウイのヘイスティングズ・カムズ・バンダ；ザンビアのケネス・カウンダ（1964年まで）
- ・ モザンビーク、モザンビーク解放戦線、モザンビーク独立戦争（1975年まで）

10. 民族運動・独立運動（南部・西アフリカ）

このセクションでは、南部・西アフリカにおける脱植民地化への取り組みを扱います。植民地主義に対する1920年頃までの反応を扱ったセクション4とセクション5とは異なり、このセクションでは、より後期の、政治的自由の奪還を目指した取り組みに焦点をあてます。生徒は、独立達成の時期を左右した要因、内部要因と外部要因の相関的寄与、民族運動や政党および指導力の役割、そして植民地大国の反応を比較分析することが求められます。また、これに加えて、独立はなぜ時には平和的な交渉で達成され、時には武装闘争を伴ったのか、その理由をしっかりと理解することが重要です。

- ・ アンゴラ：アンゴラ独立戦争；1975年の独立までのアンゴラ解放人民運動（MPLA）とアンゴラ全面独立民族同盟（UNITA）
- ・ 南西アフリカ：南西アフリカ人民機構（SWAPO）から1990年のナミビア独立まで
- ・ フランス領西アフリカ：ギニアのセク・トゥーレから1958年の独立まで

- ・ フランス領西アフリカ：ナショナリズム、政党、セネガル独立（1960）
- ・ ゴールドコーストからガーナへ：エンクルマと会議人民党（C P P）から1957年の独立まで
- ・ ナイジェリア：政党；民族・宗教間の対立；1960年の独立

11. 植民地独立後の政治（2000年まで）

このセクションでは、アフリカにおける独立とともに生じた新たな課題と問題に焦点をあて、アフリカの国々はどのようにして病気、非識字、貧困、経済開発などの問題を解決しようと試みたのか、およびその背景にある理由を探っていきます。また、このセクションでは民族紛争、内乱、アフリカの政治への軍事介入の原因とその影響を、事例研究を通じて学習していきます。

生徒は、アフリカ大陸から**2つ**の国を任意で選択し、以下の6つの項目をすべて考慮した事例研究を行います。なお、事例研究の対象として選択された国は、試験答案の冒頭部分に明記することとします。

- ・ 民族紛争と内乱
- ・ 軍事介入と支配
- ・ 社会および経済の課題：病気、非識字、貧困、飢餓、経済開発、社会的文化的価値観の変化
- ・ 腐敗と新植民地主義：起源、原因と影響
- ・ 一党独裁制国家の建設の理由
- ・ 1980年代と1990年代における複数政党制民主主義への回帰

12. アフリカ・国際機関・国際社会

このセクションでは、アフリカは20世紀の国際機関にどのような影響を受けたのか、またどのような影響を与えたのかを学習していきます。対象となる国際機関には、国際連盟、国際連合、またこれらの専門機関もしくは地域的機関である東アフリカ共同体などが含まれます。国際連盟はアビシニア危機によって大きく揺れることとなりましたが、国際連合はモザンビークの安定化に著しく貢献しました。また、アフリカも冷戦の影響を避けて通ることはできませんでした。いくつかの国家が中立的立場にとどまった一方で、他の諸国はアメリカ合衆国側かソヴィエト側につき、このことはこれらの国々の歴史に大きな影響をもたらすこととなりました。

- ・ 国際連盟：アビシニア危機（1935～6）
- ・ アフリカ統一機構：目的、成功と失敗
- ・ アフリカ統一機構（OAU）からアフリカ連合（AU）へ：目的、構成、成功と失敗
- ・ 地域的機関：東アフリカ共同体 から東アフリカ協力機構へ；西アフリカ諸国経済共同体（ECOWAS）；南部アフリカ開発調整会議（SADCC）

- ・ アフリカと国際連合の動き：コンゴ、モザンビーク、ルワンダ、ソマリア
- ・ 国連の専門機関：2つの機関の影響に関する事例研究
- ・ 冷戦とアフリカへの影響：2つの国の事例研究

HL 選択項目 3：南北アメリカの歴史

この選択項目は、南北アメリカにおける1760年から2000年までの以下の主要な発展について学習します。

- ・ 独立運動
- ・ 国家建設における試練
- ・ 世界情勢における南北アメリカの出現
- ・ 世界恐慌
- ・ 第二次世界大戦と冷戦、およびその影響と21世紀への移行

南北アメリカにおける国々は非常に多様性のある地域を構成しますが、歴史的には密接なつながりをもっています。生徒はそれぞれのセクション内で政治的、経済的、社会的な問題を考察し、関連がある場合には文化的側面も視野に入れます。

また、適切であれば、セクションによっては、生徒が自国もしくはその地域の他国の歴史を事例研究の方法で学習することが可能です。

なお、試験問題は、この「指導の手引き」に記載のある人物と出来事以外からは出題されません。

また、箇条書き項目の中にはカッコ内に例として人物などが記載されている場合がありますが、試験において、これらのカッコ内の人物、場所、出来事などを指定した問題が出題されることは**ありません**（つまり、適切であればどのような例を使っても構いません）。

生徒は**3つ**のセクションを詳細な学習の対象として選択します。

注：この選択項目は、ルート2の「SL・HL共通項目」（「指定学習項目」と「トピック」）を学習した生徒**のみ**が選択できます。



図3

南北アメリカの地図（国境は2000年時点のものを使用）

1. 独立運動

このセクションは、独立運動の台頭を促したさまざまな力、それぞれの独立運動がたどった道における類似点と相違点、独立が南北アメリカにもたらした直接的影響に焦点をあてます。また、指導者たちの政治的、思想的、軍事的貢献と、新国家の出現を方向づけた、時として矛盾を孕んだ思想や見解を探っていきます。

- ・ 南北アメリカにおける独立運動：政治的、経済的、社会的、思想的、宗教的要因；外国からの干渉の役割；戦争へとつながった対立と問題
- ・ 独立への過程においての、指導者たちの政治的および思想的貢献：ワシントン、ボリバル（その他の例：サミュエル・アダムズ、トーマス・ジェファソン、サン・マルティン、ベルナルド・オイギンスなど）
- ・ アメリカ合衆国の独立宣言；独立宣言までの過程；思想的影響；独立宣言の性質；軍事作戦と最終的な結果に及ぼした影響（例：サラトガの戦い、ヨークタウンの戦いなど）
- ・ ラテンアメリカにおける独立運動：独立の過程における特徴；任意の2国間における類似点と相違点が現れる要因；軍事作戦と最終的な結果に及ぼした影響（例：チャカブコの戦い、マイプの戦い、アヤクーチョの戦い、ボヤカの戦い、カラボボの戦いなど）
- ・ ラテンアメリカにおける独立に対するアメリカ合衆国の立ち位置；モンロー教書を生んだ歴史的背景および理由
- ・ 独立が南北アメリカの社会と経済に及ぼした影響；経済的、社会的問題；経済発展における新たな視点；異なる社会集団への影響——ネイティブ・アメリカン、アフリカ系アメリカ人、クレオール

2. 国家建設と試練

このセクションは、独立とともに生じた新たな試練と問題に焦点をあて、南北アメリカにおける国々が、なぜ、そしてどのように国家の建設を試みたのかを探っていきます。新たな独立国家の出現とともに、数少ない例外を除いて植民地帝国は南北アメリカから撤退しました。それは新たな世界のつながりへの第一歩となったものの、植民地時代の遺産は南北アメリカに依然として残ることとなりました。新たな国家が直面した数多くの問題のうち2つは、この植民地時代の遺産にどう立ち向かうのか、あるいは、これを基礎にどう国家を建設していくのかということでした。新たな国家を建設するという課題は、新たな政治的、社会的、経済的考え方、そして「国民」や「国家」などの概念の再定義への扉を開けました。

- ・ アメリカ合衆国：連合規約；1787年の憲法とその基礎となった哲学；アメリカ合衆国の政治システムにおける歩み寄りと変化

- ・ ラテンアメリカ：政治システム確立における課題；任意の2国におけるカウディーリョ（軍事独裁者）出現の条件と影響（例：フアン・マヌエル・デ・ロサス、フアン・ビセンテ・ゴメス、ホセ・ヘルバシオ・アルティーガスなど）
- ・ アメリカ＝イギリス戦争（米英戦争）（1812）：原因と英領北アメリカとアメリカ合衆国における影響
- ・ アメリカ＝メキシコ戦争（1846～8）：原因と結果
- ・ カナダ：1837年の反乱の原因と結果；ダラム報告書とその意味；イギリス自治領カナダ連邦に対する挑戦；英領北アメリカ法（1867）——妥協、未解決の問題、地域主義、結果
- ・ ネイティブ・アメリカン、メスティーソ、新たな国家における移民などの社会集団を取り巻く環境の変化

3. 南北戦争：原因、過程、影響（1840～77）

このセクションは、南北戦争（1861～5）に焦点をあてます。南北戦争は、アメリカ合衆国史における大きな分岐点として捉えられており、アメリカ合衆国の運命を大きく変えることになりました。リンカンの奴隷解放宣言に伴って奴隷制は消滅し、北部の勝利は、州権主義擁護者に対する、強い中央政府の擁護者の勝利を意味しました。また、北部の勝利に終わった南北戦争は、北部での工業化と近代化、および南部でのプランテーション制度の破壊を加速し、これはアメリカ合衆国のさらなる西方への拡張につながりました。そして、この戦争は、南部再建や、解放された400万人ものアフリカ系アメリカ人の社会における居場所の問題など、新たな課題を残しました。これらの変化は抜本的な性質をもっていたため、一部の歴史学者は南北戦争（およびその結果）を「第二次アメリカ革命」とも捉えています。

- ・ 綿経済と奴隷；奴隷を取り巻いた環境；「地下鉄道」（奴隷解放のための秘密結社）などの整備と抵抗
- ・ 南北戦争の起源：政治的問題、州の権限、近代化、セクショナリズム、連邦法無用論の危機、北部と南部の経済における相違
- ・ 奴隷制度廃止論争：奴隷制賛成派と反対派のイデオロギーと主張、またその影響
- ・ 西方への拡張の理由と影響、セクショナリズム論争；1850年代における危機；カンザス・ネブラスカ問題；オステンド・マニフェスト；リンカン・ダグラス論争；エイブラハム・リンカンの大統領当選がもたらした影響と奴隷解放宣言；ジェファソン・デイヴィスとアメリカ連合
- ・ 北軍対南軍：強みと弱点；経済的資源；南北戦争における指導者の重要性（例：ユリシーズ・グラントとロバート・リー、ウィリアム・チャーマンとストーンウォール・ジャクソンなど）
- ・ 南北戦争における主要な戦いとそれらの影響：アンティータムの戦いとゲティスバーグの戦い；外国勢力の役割
- ・ 再建：経済・社会・政治における成功と失敗；経済の拡大

- ・ 南北戦争と「新しい南部」におけるアフリカ系アメリカ人：法律上の問題；ブラック・コード（黒人規制法）；ジム・クロー法

4. 現代国家の発展 1865～1929

19世紀後半から20世紀前半までの時代を扱うこのセクションは、南北アメリカ諸国の形を変えたさまざまな原動力を考察します。これらの力は一般的に、経済、政治、社会の構造を漸進的に変化させたプロセスである「近代化」の一部を成すと捉えられています。

以下の一覧における最初の4項目では、南北アメリカから任意の2つの国を選択して事例研究のアプローチをとった学習を行います。なお、事例研究の対象として選択された地域は、試験答案の冒頭部分に明記することとします。

- ・ 鉄道建設の理由と結果；工業の成長と経済の近代化；国際貿易と南北アメリカ間貿易の発展；新植民地主義と旧宗主国への依存
- ・ 移住の原因と結果；海外移住と国内移住、および先住民の生活への影響
- ・ 進歩主義、マニフェスト・デスティニー、自由主義、ナショナリズム、実証主義、社会ダーウィニズム論、インディヘニスム、土着主義などのイデオロギーの発展とその影響
- ・ 社会と文化における変化：芸術；女性の役割
- ・ 近代への移行における指導者の影響：政治的、経済的目標；セオドア・ローズヴェルト、ウィルフリッド・ローリエ、ラテンアメリカの指導者（生徒が自由に選択）の成功と失敗の評価
- ・ 1865年から1929年の間においてアフリカ系アメリカ人たちを取り巻いた社会的、経済的、法的環境；アフリカ系アメリカ人の大移動とハーレム・ルネサンス；市民権の追求およびブッカー・T・ワシントン、W・E・B・デュボイスとマーカス・ガーベイの思想、ねらいと戦術

5. 世界情勢における南北アメリカの出現 1880～1929

このセクションは、南北アメリカにおける近代化とその外交政策への影響に焦点をあて、この地域の国々の第一次世界大戦への関与を考察していきます。近代化は新たな国家の形づくりに大きな影響を与え、それは南北アメリカの外交政策における主要な変化の基盤ともなりました。例えば、19世紀の終わりにはアメリカ合衆国は世界情勢、特にラテンアメリカ情勢においてより積極的な役割を果たし、それは、南北アメリカ関係の形の変化へとつながりました。また、南北アメリカにおけるいくつかの国々はヨーロッパにおいて勃発した第一次世界大戦に関与し、戦争が終結した際にはこれら参戦国における経済、社会、外交政策への影響が見られました。

- ・ アメリカ合衆国の拡張論者による外交政策：政治的、経済的、社会的、イデオロギー的理由
- ・ アメリカ＝スペイン戦争（米西戦争）：原因と結果（1898）

- ・ アメリカ合衆国の外交政策：棍棒外交；ドル外交；モラル外交；南北アメリカでの適用と影響
- ・ アメリカ合衆国と第一次世界大戦：中立から関与へ、アメリカ合衆国の第一次世界大戦参戦の理由；ウィルソンの平和の理想とヴェルサイユ条約批准にあたっての奮闘；第一次世界大戦が北半球におけるアメリカ合衆国の地位にもたらしたもの
- ・ カナダもしくはラテンアメリカの任意の1国の第一次世界大戦への関与および参戦：参戦賛成派・反対派の理由；参戦形態の性質
- ・ 第一次世界大戦が南北アメリカにおける任意の**2つ**の国に及ぼした影響：経済、政治、社会、外交政策

6. メキシコ革命 1910～40

このセクションは、長期的に経済成長を実現し、政治的にも安定していたメキシコで起きた革命の原因、過程、影響に焦点をあてます。目的も指導者層の社会経済的構成も多様であったこの革命は長引き、払った犠牲も大きなものとなりました。当時の南北アメリカにおいては最も進歩的なものだと考えられている1917年に制定された憲法は、メキシコおよび周辺地域における政治の発展に大きな影響を与えました。また、この時期のメキシコにおける芸術は、民族間の分裂を克服し、先住民族の遺産をナショナルアイデンティティーとして取り入れようとした試みを象徴しており、革命に強い影響を受けたと考えられます。

- ・ メキシコ革命の起きた要因：社会的、経済的、政治的要因；ポルフィリオ政権が果たした役割
- ・ 革命と指導者たち（1910～17）：フランシスコ・マデロ、パンチョ・ビリャ、エミリアーノ・サパタ、ベヌスティアーノ・カランサのイデオロギー、ねらい、手段；達成と失敗；1917年憲法——本質と適用
- ・ 革命後国家の建設（1920～38）：オブレゴン、カリェス、「マキシマト」(the Maximato: メキシコの歴史的、政治的発展の期間)、試練、彼らが革命後の国家に与えた影響の評価
- ・ ラサロ・カルデナスと革命の復活（1939～40）：ねらい、手段、達成
- ・ メキシコ革命の勃発とその展開における外国勢力（特にアメリカ合衆国）の役割：動機、介入手段と貢献
- ・ 革命がもたらした芸術、教育、音楽への影響（例：シケイロス、リベラ、オロスコなど）；ヴァスコンセロスの教育改革の影響；ポピュラー音楽の発展；革命を題材にした文学

7. 世界恐慌と南北アメリカ 1929～39

このセクションは、世界恐慌の本質、南北アメリカの各政府がとったさまざまな解決策および世界恐慌が社会に与えた影響に焦点をあてます。世界恐慌は南北アメリカの歴史においてもっとも深刻な経済崩壊をもたらしました。恐慌はこの地域におけるすべての国に

影響を及ぼし、経済と政治のシステムの再考の必要性が明らかになりました。世界恐慌への対策は、南北アメリカの多くの国における政治と経済発展の大きな転機となりました。

以下の一覧における最後の2項目では、南北アメリカから任意の国を**1つ**選択して事例研究のアプローチをとった学習を行います。なお、事例研究の対象として選択された地域は、試験答案の冒頭部分に明記することとします。

- ・ 世界恐慌：南北アメリカにおける政治的、経済的要因
- ・ アメリカ合衆国がとった解決策の性質と有効性：フーヴァー；フランクリン・ローズヴェルトとニューディール政策；ニューディール政策を批判した人々
- ・ カナダ：マッケンジー・キングとリチャード・ベッドフォード・ベネット
- ・ ラテンアメリカの世界恐慌に対する反応：ジェットウリオ・ドルネレス・ヴァルガスまたはアルゼンチンの「コンコルダンシア」(Concordancia)；輸入代替工業化(I S I)またはラテンアメリカにおける任意の1つの国の事例研究
- ・ 世界恐慌が社会に与えた影響：アフリカ系アメリカ人、女性、社会的少数者
- ・ 世界恐慌と芸術：写真、映画産業、ラジオ、文学潮流

8. 第二次世界大戦と南北アメリカ 1933～45

ヨーロッパにおける戦争の発端となった1930年代後半の世界秩序の乱れに伴い、南北アメリカにおける国々は、直面した問題や試練に対して異なる対応をとるようになりました。このセクションは、政治、外交における緊張の高まりから生じた、南北アメリカ諸国の第二次世界大戦前と大戦中における政策の変化に焦点をあて、この戦争が南北アメリカに与えた影響を考察していきます。

- ・ ヨーロッパでの出来事に対しての南北アメリカの反応：南北アメリカ外交；協調と中立；フランクリン・ローズヴェルトの善隣外交およびその適用と効果
- ・ 第二次世界大戦における任意の2つの国の外交面および軍事面での役割（あるいはそのいずれか）
- ・ アフリカ系アメリカ人、ネイティブ・アメリカン、女性、社会的少数者に第二次世界大戦が及ぼした社会的影響、徴兵
- ・ 日系アメリカ人と日系カナダ人の待遇
- ・ ホロコーストに対する南北アメリカでの反応
- ・ 技術開発の影響と原子力時代の始まり
- ・ 南北アメリカの任意の**1つ**の国における、第二次世界大戦の経済的・外交的影響

9. 南北アメリカにおける第二次世界大戦後の政治的発展 1945～79

このセクションは、1945年以降の国内の関心事と政治的発展に焦点をあてます。1945年以降、南北アメリカにおける多くの国家が社会的、経済的、政治的变化と試練を経験しました。そして、これらに対する反応は、民主主義の継続、さまざまな階層を包括したポピュ

リズム（大衆迎合的な政治勢力）の提携、徹底的な闘争、革命、1960年代と70年代における権威主義体制の確立など、国によって異なりました。以下が主要な学習分野となります。

- ・ 新たな指導者を生み出した条件
- ・ 経済政策、社会政策
- ・ 社会的少数者の待遇

注： ジェトゥリオ・ドルネレス・ヴァルガス（ブラジル）とラサロ・カルデナス（メキシコ）は1945年以前に政権につきましたが、それぞれの国家における彼らの支配と影響は1945年以降も継続しました。

- ・ アメリカ合衆国：トルーマン、アイゼンハワー、ケネディーの国内政策
- ・ リンドン・ジョンソンと「偉大なる社会」；ニクソンの国内改革
- ・ カナダの国内政策：ディーフェンベーカーからクラークとトルドーへ（クラークとトルドーは1979年の総理大臣）
- ・ 「静かなる革命」の起こった要因とその結果
- ・ ラテンアメリカにおける大衆主義指導者：政権の掌握；大衆主義政権の特色；社会政策、経済政策、政治的方針；反対派の扱い；成功と失敗（例：ペロン、ヴァルガスなど）
- ・ キューバ革命：政治的、経済的、社会的要因；革命の影響
- ・ フィデル・カストロの支配：政治的方針、経済政策、社会政策、文化政策；社会的少数者の待遇；成功と失敗
- ・ ラテンアメリカにおける軍事政権：介入の正当性；試練；政策；成功と失敗

10. 冷戦と南北アメリカ 1945～1981

このセクションは、冷戦の発展と南北アメリカへの影響に焦点をあてます。20世紀の後半は、冷戦による世界的な対立に著しく影響を受けた時代でした。南北アメリカにおいては、いくつかの国はアメリカ合衆国の密接な同盟国になるか、しぶしぶではあるものの西側陣営につくことを選択しましたが、多くの国は中立的立場にとどまるか、冷戦による紛争への関与を避けようとしていました。また、キューバ革命に影響を受けた数カ国は社会主義政府を樹立するに至りました。いずれにしても、南北アメリカではどの国も冷戦が生み出した圧力を避けて通ることはできず、国内政策および外交政策において大きな影響を受けることとなりました。

- ・ トルーマン：封じ込め政策とその政策の南北アメリカへの影響；マッカーシズムの発生とアメリカ合衆国の国内政策および外交政策への影響；冷戦および冷戦が社会と文化にもたらした影響
- ・ 朝鮮戦争、アメリカ合衆国と南北アメリカ：参戦の理由；軍事開発；外交と政治の結果

- ・ アイゼンハワーとダレス：ニュールック戦略とその適用；政策の特色とその理由；南北アメリカへの影響
- ・ ベトナムにおけるアメリカ合衆国の関与：各段階における関与の性質とその理由；国内における影響と戦争の終結
- ・ ケネディからカーターまでのアメリカ合衆国の外交政策：政策の特色とその理由；南北アメリカへの影響；ケネディの「進歩のための同盟」；ニクソンの秘密作戦とチリ；カーターの人権外交とパナマ運河条約
- ・ カナダ**または**ラテンアメリカの任意の**1つ**の国における冷戦：国内政策と外交政策の実施およびその政策の理由づけ

11. 南北アメリカにおける公民権運動と社会運動

このセクションは、1945年以降の公民権運動の起源と性質、そしてこの運動における挑戦と業績に焦点をあてます。これらの運動は、社会において「正式な一員」として認められていなかった人々の平等獲得を目指した試みを代表するものでした。この運動に参加した人々は既存の権威と、社会にしみついた価値観や考えに果敢に挑戦していきました。

- ・ ネイティブ・アメリカンと公民権：ラテンアメリカ、アメリカ合衆国、カナダ
- ・ アフリカ系アメリカ人と公民権運動：起源、戦術、組織；教育における人種差別に対する訴訟と合衆国最高裁判所；南部における人種差別の終焉（1955～65）
- ・ マーティン・ルーサー・キング・ジュニアが公民権運動で果たした役割；公民権運動における過激派の台頭（1965～8）：ブラックパンサー党；ブラックムスリム；ブラックパワーとマルコムX
- ・ 南北アメリカの公民権運動における政府の役割
- ・ 若者文化と1960年代と70年代の抗議運動：その特色と対抗文化の出現
- ・ 南北アメリカにおけるフェミニスト運動

12. 21世紀へ——1980年代から2000年まで

このセクションは、21世紀への移行期における南北アメリカでの外交政策と国内政策の潮流の変化に焦点をあてます。20世紀の後半におけるこの地域では、政治、社会、文化、経済、技術の分野において大きな変化が見られました。

以下の一覧における最後の4項目では、南北アメリカから任意の国を**1つ**選択して事例研究のアプローチをとった学習を行います。なお、事例研究の対象として選択された地域は、試験答案の冒頭部分に明記することとします。

- ・ アメリカ合衆国——二極支配から一極支配へ：レーガン、ブッシュ、クリントンなどの大統領の国内政策および外交政策；課題；合衆国への影響；南北アメリカへの影響
- ・ ラテンアメリカにおける民主主義の再建：政治的、社会的、経済的試練（例：ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイなど）
- ・ グローバル化とその影響：社会、政治、経済

- ・ 技術革命：メディアやインターネットがもたらした社会的、政治的、経済的影響
- ・ 大衆文化：文学、映画、音楽、娯楽における新たな表現と潮流
- ・ 新たな問題：環境問題；健康問題

HL 選択項目 4：アジアとオセアニアの歴史

この選択項目では、以下の4つの地理的および文化的地域における1770年から2000年までの歴史を学習対象とします。

- ・ 東アジア
- ・ 大陸部東南アジアと島嶼部東南アジア
- ・ インド亜大陸
- ・ オセアニア

アジア・オセアニアは、多様な伝統文化と歴史的背景に影響を受けてきた広範囲に及ぶ地域です。この地域における主要な歴史的展開としては、ヨーロッパ諸国による数々の国の植民地化、ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国による貿易の発展と独占、そしてナショナリズムの台頭とそれに伴う帝国主義諸国からの独立および自らの政府の実現への欲求が挙げられます。独立を実現するために、武装闘争が唯一の手段となる場合もありましたが、平和的に脱植民地化が行われる場合もありました。

欧米からの経済的圧力と国内における政治的、社会的情勢が絡み合うことによって、この地域における国々は中国や日本のケースに代表されるように、その発展において非常に異なる進路をとることとなりました。また、第一次世界大戦と第二次世界大戦はアジア・オセアニアにおけるどの国にも大きな影響をもたらし、冷戦はこの地域の国々を二分しました。しかしながら冷戦後は、技術革新、大衆文化の普及、スポーツ、グローバル化が圧倒的な影響力となり、アジア・オセアニア諸国の政治、経済、社会、文化を形づくるようになりました。

適切であれば、セクションによっては、生徒が自国もしくはその地域の他国の歴史を事例研究の方法で学習することが可能です。

なお、試験問題は、この「指導の手引き」に記載のある人物と出来事以外からは出題されません。

生徒は**3つ**のセクションを詳細な学習の対象として選択します。

注：この選択項目は、ルート2の「SL・HL共通項目」（「指定学習項目」と「トピック」）を学習した生徒**のみ**が選択できます。

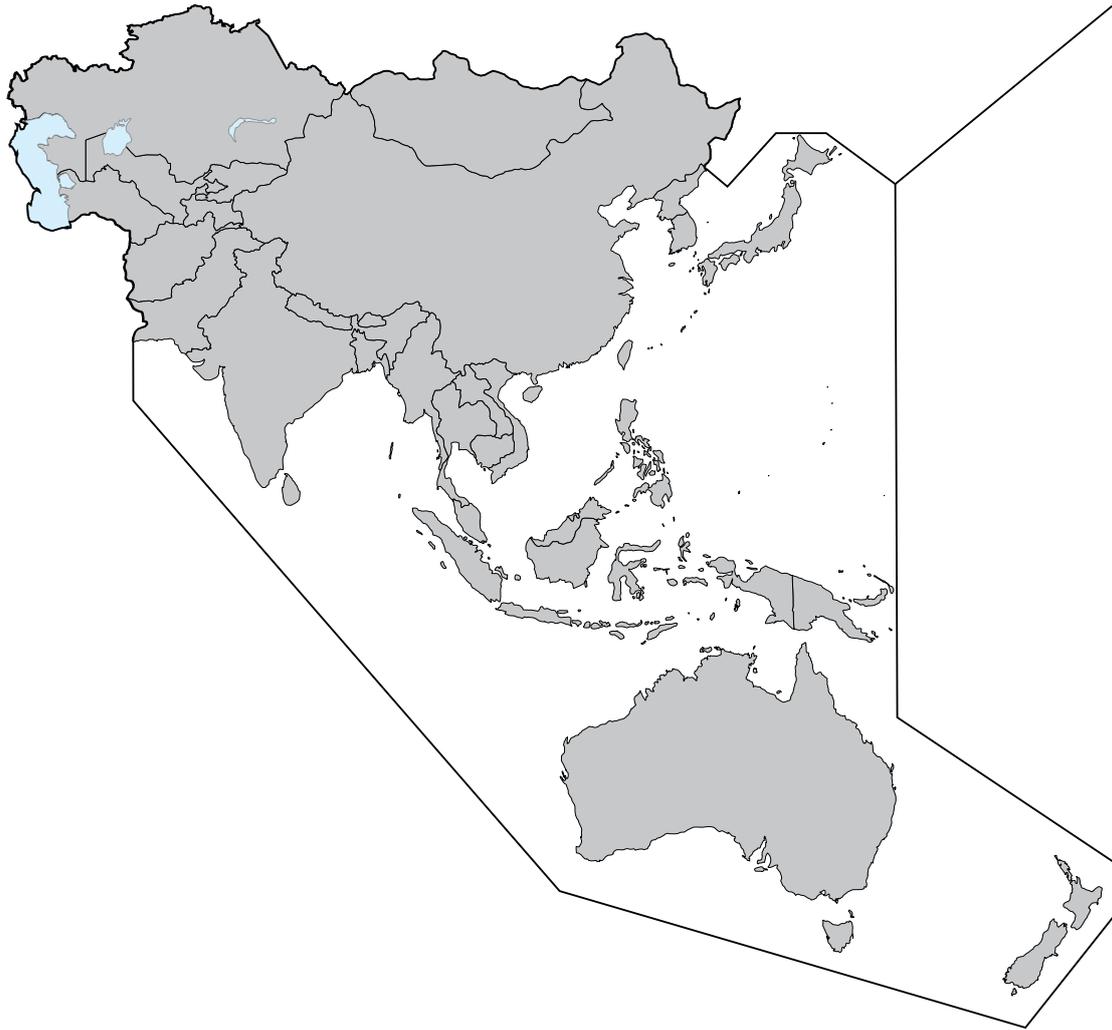


図4

アジアとオセアニアの地図（国境は2000年時点のものを使用）

1. 南アジア、東南アジア、オセアニアにおける植民地主義 —— 18世紀後半から19世紀半ばまで

このセクションは、1857年のインド大反乱までに焦点をあて、ヨーロッパとアメリカ合衆国の帝国主義および植民地主義がこの地域における先住民社会と政治システムにどのような影響を与えたのかを考察します。生徒は、異なる植民地制度の相違点と類似点の両方を考察しながらこれらの制度の性質、背後にある理由、影響を分析し、さらには、植民地化された人々の入植者たちに対する反応を比較し対比していきます。また、このセクションは、オーストラリアとニュージーランドに設立された移住植民地にも焦点をあてます。

- ・ オーストラリア、ニュージーランド、太平洋におけるイギリス植民地制度の政治構造と影響

- ・ 南アジアにおけるイギリス植民地制度の政治構造と影響；イギリス東インド会社の支配
- ・ インドネシアにおけるオランダ植民地制度の政治構造と経済的、社会的、文化的影響
- ・ インドシナにおけるフランス植民地制度の政治構造と経済的、社会的、文化的影響
- ・ フィリピンにおけるスペイン植民地制度の政治構造と経済的、社会的、文化的影響
- ・ インド大反乱（1857）：原因、過程、結果
- ・ 東南アジアにおける植民地支配に対する反乱と抵抗

2. 伝統的な東アジア社会 —— 18世紀後半から19世紀半ばまで

このセクションは、「帝国」としての中国と日本に焦点をあて、これらの国が、欧米列強の到来と、それに伴った貿易、外交代表、市民権の要求などの問題にどのように対処したのかを考察していきます。欧米列強の到来と同時期に起こった国内での社会と経済の変化は中国と日本の既存政権の権力維持に圧力をかけることとなりました。

- ・ 皇帝による支配；清朝における伝統的社会への挑戦と儒教
- ・ 中国の朝貢制度と西洋の貿易使節団
- ・ 砲艦外交：第一次・第二次アヘン戦争；不平等な条約
- ・ 太平天国の乱：原因と結果
- ・ 江戸幕府：支配と試練
- ・ 江戸時代の経済と社会の構造；社会の変化と不満
- ・ ペリー来航と幕末日本の危機（1853～1868）

3. アイデンティティーの形成 —— 19世紀半ばから20世紀前半まで

このセクションでは、植民地とそこにおける人々の植民地支配に対する反応、民族運動の出現、そして独立獲得のための闘争について考察していきます。植民地社会の性質や宗主国の政策における違いはタイプの異なるナショナルアイデンティティーを生みだしましたが、その一方で、これらのアイデンティティーの根底には類似点が見られます。例えば、（その起源に違いはあれど）移住植民地と定義されるオーストラリアとニュージーランドも、独立が進み独自のアイデンティティーを獲得するにつれ、より直接的な統治があった南アジアおよび東南アジアにおける植民地との類似点を示すようになりました。

- ・ インド統治法（1858）、ベンガル分割令（1905）、モーリー＝ミンツ改革（1909）と英領インドにおける政治組織への影響
- ・ 合憲団体の発展：インド国民会議と全インド・ムスリム連盟
- ・ 近代的ナショナリズムの発展：インドネシア（オランダ領東インド）、ベトナム、カンボジア、ラオス（フランス領インドシナ）
- ・ シャム王国：ラーマ4世（モンクット）、ラーマ5世（チュラロンコン）；独立とナショナリズム
- ・ ビルマ：ミンドン王、ティーボー王；独立性の喪失と近代的ナショナリズムの出現

- ・ フィリピンとアメリカ合衆国：リサール、ボニファシオ、アギナルド
- ・ ナショナルアイデンティティーの形成：オーストラリア、またはニュージーランド

4. 東アジアにおける初期の近代化と帝国の衰退 —— 19世紀半ばから20世紀初頭まで

このセクションは、20世紀初頭までの中国と日本における歴史的展開に焦点をあて、まずは、中国においてほとんど不成功に終わった近代化と改革を考察します。保守派と大衆による変化への抵抗は、洋務運動や戊戌の変法の頓挫、義和団事件の発生からも見てとれます。一方で、中国とは対照的に、日本はこの時期に急速な近代化に成功し、アジアにおける欧米列強の権力に対抗する国家へと成長しました。

- ・ 同治中興と洋務運動（1861～94）
- ・ 日清戦争（1894～5）の敗北による影響；光緒帝と戊戌の変法（1898）
- ・ 義和団事件（1900～01）；清朝末期の改革
- ・ 孫文と1911年の辛亥革命
- ・ 明治維新（1868）；大日本帝国憲法（1889）
- ・ 明治時代の日本における社会、文化、経済の発展
- ・ 軍事力への傾倒；日清戦争（1894～5）と日露戦争（1904～5）における勝利
- ・ 韓国の鎖国：開国（1876）；抵抗；併合（1910）

5. 南アジアと東南アジアにおける世界大戦の影響 —— 20世紀半ばまで

このセクションは、南アジアと東南アジアにおいて二度の世界大戦がもたらした変化に焦点をあてます。ヨーロッパの支配下にあった両地域の人々は、戦争で戦ったり「非戦闘員」として雇われたりと、宗主国の世界大戦への関与に大きな影響を受けました。何千何万という人々が1914年から1918年にかけてのヨーロッパにおける戦争を目撃し、それはヨーロッパ文明に対する幻滅と、ヨーロッパ諸国が主張する道徳的卓越性の否定につながりました。また、多くの人々が政治に興味をもち始め、ロシア革命の成功に影響されて共産主義に惹かれる人々も現れました。ウィルソン大統領の十四カ条の平和原則、とくに民族自決に関する項目はこの地域における植民地の人々にも利用され、戦間期には宗主国側によるある程度の譲歩が見られました。また、第二次世界大戦は南アジアおよび東南アジアに直接的な影響を及ぼしました。日本に対する宗主国の敗北は彼らの威信をさらに失墜させ、独立主義者たちに主張の機会を与えることとなりました。

- ・ 1919年と1935年のインド統治法および独立主義者たちの反応
- ・ ガンディー、ネルーとインドのナショナリズム：非協力運動、不服従運動、「クイット・インド（インドを出て行け）」（反イギリス大衆運動）
- ・ ジンナー：イスラーム分離主義の発展
- ・ インド亜大陸における独立および分離につながった要因：1947年インド独立法とインド・パキスタンにおける影響；1948年のスリランカ

- ・ 日本による東南アジア占領の遺産
- ・ 近代的ナショナリズムの発展:インドネシア (オランダ領東インド)、ベトナム、カンボジア、ラオス (フランス領インドシナ)
- ・ 南アジアおよび東南アジアにおける任意の**1国**の事例研究 (ただしこのセクションですでに記載のある国以外から選択):第一次世界大戦と第二次世界大戦の政治、社会、経済への影響 (どちらか一方の大戦の影響のみに焦点を絞ることも可)

6. 中華民国 (1912 ~ 49) と共産主義の台頭

このセクションは、以下の歴史上の出来事に焦点をあてて学習を行います。

- ・ 1912年から、1928年の蒋介石による南京国民政府の樹立までの中華民国の初期の苦難
- ・ 1936年の第二次国共合作までの中国共産党と中国国民党の対立
- ・ 日本による満州侵略と十五年戦争 (1931 ~ 45)
- ・ 日中戦争 (1937 ~ 45)
- ・ 中国国民党と中国共産党の間の国共内戦および毛沢東指揮下での中国共産党の勝利 (1949年10月)

また、このセクションでは、中国を統治するということの複雑性、中国国民党派と中国共産党派のイデオロギーの対立、中国における権益を求めた日本による侵略について理解することに重点を置きます。

- ・ 対華21カ条要求 (1915); 新文化運動; ヴェルサイユ条約 (1919); 五四運動 (1919)
- ・ 袁世凱; 軍閥; 北伐; 中華ソビエト共和国; 長征 (1934 ~ 5)
- ・ 中国国民党: 指導力、イデオロギー、政策
- ・ 中国共産党: 指導力、イデオロギー、政策
- ・ 第一次国共合作 (1924 ~ 7); 第二次国共合作 (1936 ~ 45)
- ・ 中国対日本の十五年戦争 (1931 ~ 45)
- ・ 国共内戦と中国共産党の勝利 (1946 ~ 9)

7. 大日本帝国: 統治とその余波 1912 ~ 1952

この項目では、明治時代の終焉後から1952年までの日本の歴史、すなわち、議会制民主主義制度の確立の失敗、満州と中国における侵略行為を引き起こすこととなった軍国主義と過激なナショナリズムの台頭、そして、日本主導の「大東亜共栄圏」設立を装った、東アジア、東南アジア、太平洋にまたがる大日本帝国樹立の試みを扱います。特に、日本の文化的伝統、当時の経済条件に関する見解、1930年代における世界恐慌の影響、そして国際情勢を背景とした、日本における民主主義の失敗と軍国主義の台頭に焦点をあてていきます。

- ・ 第一次世界大戦とその戦後会議 (パリ講和会議、ワシントン会議、ロンドン会議)
- ・ 大正デモクラシー: 自由主義的価値観の発展と二大政党制の出現
- ・ 軍国主義の台頭と政治における軍の影響

- ・ 満州侵略（1931）と中国侵略（1937）ならびに欧米諸国との関係への影響
- ・ 真珠湾攻撃と太平洋戦争（1941～1945）
- ・ 敗戦と連合国占領下の日本：政治と軍事における変化
- ・ 占領下での社会的、経済的、文化的改革（1945～1952）

8. オーストラリア・ニュージーランド・太平洋諸島における歴史的展開 1941～2000

このセクションは、1941年12月以降の、東南アジアにおける日本の勢力の拡大に焦点をあてます。日本による1941年12月の真珠湾攻撃はアメリカ合衆国の太平洋戦争への参戦を意味しました。そして1942年2月のシンガポール陥落はオーストラリアとニュージーランドのイギリスへの依存を揺るがし、これによって両国は日本の脅威と戦うためアメリカ合衆国に助けを求めようになりました。また、日本の敗北を受け戦略に変更を加えた両国は、アメリカ合衆国と同盟関係を築き、中国における共産党の勝利後は強い反共産主義路線をたどりました。両国とも（オーストラリアは特に）、イギリスとヨーロッパからの移住を奨励し、1960年代の終わりごろにはアジア諸国からの移住も進んで受け入れるようになりました。オーストラリアもニュージーランドも世界情勢、特にアジアならびに太平洋諸島の情勢において、国際機関でより積極的かつ独立した役割を担うようになりました。さらに、イギリスとのつながりが弱体化するにつれ日本との経済的なつながりが徐々に強化され、その後は中国や東南アジア、太平洋諸島における経済新興国ともつながりをもつようになりました。

- ・ 社会、文化、ナショナルアイデンティティの形成
- ・ 戦後のオーストラリアおよびニュージーランドへの移住とその移住が社会に及ぼした影響
- ・ オーストラリアにおける政府：カーティン、チフリー、メンジーズ、ホイットラム、ホーク、キーティング、ハワード
- ・ ニュージーランド労働党とニュージーランド国民党間の闘争
- ・ アボリジニに対する態度と政策（オーストラリア）、マオリ族および他の少数民族に対する態度と政策（ニュージーランド）
- ・ オーストラリアとニュージーランド：外交政策と国際協調
- ・ 経済政策と経済再編（イギリスのEU加盟の影響を含む）；日本、東南アジア、中国における経済発展；太平洋諸島における独立国家の出現
- ・ 文化の発展——ヨーロッパ、アジア、アメリカ合衆国の文化の影響と多文化社会の発展

9. 南アジアと東南アジアにおける発展 —— 20世紀半ばから2000年まで

このセクションでは第二次世界大戦後の南アジアと東南アジアの独立国における政治的発展を分析します。第二次世界大戦後、これらの独立国においては、民主主義的機構と自

由選挙への忠誠と、分割・分裂（例：東パキスタンからのバングラデシュの独立）を避けることのできる強い政府の設立への願望との間に緊張状態が生まれるようになりました。その規模に差はあったものの、民族、宗教における少数派はこの地域のどの国にも存在し、ナショナルアイデンティティーを形成し国の結束を高めるにあたっての問題となりました。これを受けて、軍の後援を伴う強力な中央集権的政権が国家イデオロギーの普及と国の結束の維持を実現するために必要であると考えられるようになった一方で、国民選挙によって承認される政府への憧れも存在しました。この、民主主義への欲求と中央集権的な強力な政府への欲求の間のジレンマが、この時代の南アジアおよび東南アジアにおける共通の特色であったと言えます。

- ・ インド：ネルー、インディラ・ガンディー、ラジーヴ・ガンディーの国内政策と功績
- ・ インド・パキスタン関係（カシミールを含む）；インドの外交政策（非同盟を含む）；中印関係
- ・ パキスタン：ジンナー、アユブ・カーン、ズルフィカール・ブットー、ジアの国内政策と功績
- ・ インドとパキスタンにおける宗教問題
- ・ インドとパキスタンにおける社会と経済の発展
- ・ インドシナにおける発展：ベトナム（1955～75）、カンボジア（カンプチア）、ラオス
- ・ 政治・社会・経済発展の事例研究（以下より**2国**を対象国として選択）：フィリピン、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、インドネシア、ビルマ（ミャンマー）、スリランカ、バングラデシュ

10. 地域大国としての中国——20世紀半ばから2000年まで

このセクションは、中国共産党指導のもとでの世界大国としての中国の出現を扱います。大国となるまでの過程で、中国は、毛沢東指導下の共産党がその支配と社会主義国としてのビジョンを国民に押しつけたことによる国内での社会的な大激変を経験しました。また、毛沢東の死後のより現実主義的な政権は、中国経済の近代化を促し、中国をグローバル経済の中での新たな経済大国の座へと導きました。その国土と人口の大きさ、また、軍事力を土台にして、中国は2000年ごろまでには地域大国として認められるようになりました。

- ・ 共産主義国の建設（1949～1961）；毛沢東が果たした役割
- ・ 社会主義への移行；社会と経済の発展における成功と失敗（1941～61）
- ・ 文化大革命：背後の理由と結果、政治、社会、文化における影響
- ・ 外交政策（1949～76）：米中関係；中ソ関係および中ソ対立；グローバルパワーとしての中国
- ・ 毛沢東死後の中国：権力闘争、「四人組」と鄧小平（1976～97）；政治、経済の発展；江沢民
- ・ アジアにおける中国の影響：他国との関係；香港と香港返還；中華民国（台湾）における経済、政治、社会の発展

11. 20世紀後半におけるアジア・オセアニアの世界的な影響

このセクションでは、アジア・オセアニアという地域がグローバルなレベルにおいて担った役割について考察します。20世紀後半には、日本は経済大国へと発展し、さらに、韓国、香港、台湾、シンガポール、マレーシア、タイ、そしてインド亜大陸の国々も奇跡的な経済成長を遂げました。1990年代後半、アジア・オセアニアは経済危機に襲われましたが、それでもこれらの国々は富と権力を保持し、この地域を世界経済における重要な原動力として成長させました。それに伴い、アジア・オセアニアでの社会、経済、政治、文化における変化も、国際的に影響を及ぼすようになりました。

以下の一覧における最後の3項目では、アジア・オセアニアから任意の**1国**を選択して事例研究のアプローチをとった学習を行います。なお、事例研究の対象として選択された地域は、試験答案の冒頭部分に明記することとします。

- ・ 朝鮮戦争：原因、過程、結果
- ・ 日本における政治と経済の発展
- ・ 台湾と韓国における経済の奇跡的な成長
- ・ シンガポール、香港、マレーシア、タイ、インド亜大陸における発展
- ・ 地域情勢、世界情勢への影響としての宗教
- ・ 経済、社会、文化における原動力としてのグローバル化
- ・ 環太平洋地域と太平洋諸島：経済と政治における変化

12. 社会と経済の発展 1945～2000

このセクションでは、生徒は**アジア・オセアニアにおける国を1つ**選択して事例研究を行います。下記のトピック一覧からもわかるように、この事例研究を行うにあたっては、対象となる国に関する詳細な知識が要求されます。また、政治的要素への言及をする場合には、この項目のテーマである「社会と経済の発展」に関連するものであることが必要です。

この事例研究を通じて、生徒は、選んだ**1つ**の国の文脈の中で、調査能力と批判的思考力^{クリティカルシンキング}を伸ばすことができます。なお、事例研究の対象として選択された国は、試験答案の冒頭部分に明記することとします。

- ・ 社会構造と社会的風潮：医療制度改革、社会保障制度、ジェンダー問題、参政権
- ・ 宗教の役割とその影響、紛争、対立
- ・ 教育の発展、国家の成長、多様性
- ・ 芸術の発展：視覚芸術、音楽、演劇、文学と映画、メディア、プロパガンダ、娯楽、スポーツ
- ・ 海外からの移民と自国民の海外移住：原因と結果、人口構成の変化、都市化
- ・ 産業革命：社会におけるテクノロジーの影響、情報化時代

HL 選択項目 5：ヨーロッパと中東の歴史

この選択項目は18世紀半ばから20世紀の終わりまでのヨーロッパと中東における主要な歴史の流れに焦点をあてます。ヨーロッパと中東は地理的に近く、協力と反目の中で類似点と相違点が生まれました。この時期における主な歴史的展開としては、革命の勃発、帝国の崩壊と新たな国民国家の建設、政治、社会、経済の各分野における改革、独裁制の出現と民主主義の復活などが挙げられます。以下のセクションでは、世界の主要国に重点を置っていますが、他の国家における発展についても事例研究を通じて学習することができます。

適切であれば、セクションによっては、生徒が自国もしくは他国の歴史を事例研究の方法をとって学習することが可能です。

なお、試験問題は、この「指導の手引き」に記載のある人物と出来事以外からは出題されません。

また、箇条書き項目の中にはカッコ内に例として人物などが記載されている場合がありますが、試験において、これらのカッコ内の人物、場所、出来事などを指定した問題が出題されることは**ありません**（つまり、適切であればどのような例を使っても構いません）。

生徒は**3つ**のセクションを詳細な学習の対象として選択します。

注：この選択項目は、ルート2の「SL・HL共通項目」（「指定学習項目」と「トピック」）を学習した生徒**のみ**が選択できます。



図5

ヨーロッパと中東の地図（国境は2000年時点のものを使用）

1. フランス革命とナポレオン——18世紀半ばから1815年まで

このセクションでは、フランス革命の起源、勃発、過程と結果に焦点をあて、アンシャン・レジーム（旧制度）に対する社会的、経済的、政治的、思想的挑戦と、ナポレオン・ボナパルトの台頭と支配へとつながった、フランス革命の経過における諸段階について学習します。また、ナポレオンの国内政策と外交政策に加えて、フランス革命がフランスおよび近隣のヨーロッパ諸国に与えた影響を考察することが求められます。

- ・ アンシャン・レジームの危機：フランス王、特にルイ16世が果たした役割；アンシャン・レジームへの思想的、政治的、社会的、財政的、経済的挑戦
- ・ 革命の段階と急進化：都市部、農村部での反乱；1791年憲法；君主制の運命；恐怖政治；ロベスピエール；テルミドールのクーデター；総裁政府
- ・ 革命思想普及のための革命戦争（1792～96）
- ・ ナポレオン・ボナパルトの台頭
- ・ 1804年以前と1804年以降のナポレオンの国内政策と外交政策；ナポレオン戦争
- ・ ナポレオンによるフランス第一帝政の崩壊とフランス復古王政；ウィーン会議

2. ドイツ統一とイタリア統一 1815～90

このセクションは、ドイツとイタリア半島におけるナショナリズムの台頭と成長および新たに建設された2つの国民国家における権力の構築と強化に焦点をあてます。生徒は統一の過程における経済的、政治的要因、国民1人ひとりが果たした役割、そして諸外国の関与の重要性について考察することが求められます。また、ドイツ、イタリアにおける主要な国内政策と問題に加え、1870～71年以降の勢力均衡における変化と他のヨーロッパ勢力との関係も考察していきます。

- ・ イタリアにおける革命とローマの重要性；1815年から1848年までのオーストリア帝国とドイツ諸領邦
- ・ イタリア統一：サルディーニャ王国（ピエモンテ・サルディーニャ）の勢力拡大；マッツィーニ、カヴール、ガリバルディ；外国勢力の関与とその影響
- ・ プロイセン王国の隆盛（1815～62）：ドイツ連邦、ドイツ関税同盟などの政治的、経済的要因；プロイセン王国とオーストリア帝国の関係（1866年まで）
- ・ オーストリアの影響力の衰え：クリミア戦争；イタリア；プロイセン＝オーストリア戦争（普墺戦争）（1866）；オーストリア＝ハンガリー二重帝国；ナショナリズムの挑戦
- ・ ビスマルク、プロイセンと統一：外交、経済、軍事の再編成；ドイツ統一戦争、1871年憲法
- ・ イタリア統一とドイツ統一の比較
- ・ ビスマルクのドイツ：国内政策と外交政策

3. 19世紀初頭から20世紀初頭までのオスマン帝国

このセクションでは、19世紀初頭から20世紀初頭までのオスマン帝国における歴史的展開を内的要因と外的要因の両方から考察します。帝国の衰退はこの地域への関心の高まり、そしてオスマン・トルコ帝国の領域内における変革への要求を意味しました。また、このセクションでは、19世紀から20世紀にかけてのオスマン帝国の変化にも焦点をあてていきます。

- ・ 19世紀初頭における問題：ギリシャ独立戦争
- ・ エジプトのムハンマド・アリー：権力の確立と維持；影響；オスマン帝国およびヨーロッパの反応
- ・ 国内の近代化の試み：タンジマート（恩恵改革）の背後にある理由、ねらい、および結果；アブデュルハミト2世：反動と改革
- ・ クリミア戦争（1854～6）：原因と結果
- ・ 東方問題；ヨーロッパからの挑戦とオスマン帝国の反応（19世紀半ばから1913年まで）；オスマン帝国の衰退
- ・ レバノン：オスマン帝国による支配の度合い；社会的緊張状態と1860年の内戦；1861年以降の自治の度合い
- ・ 「統一と進歩委員会」の成長（1908/9年まで）；「青年トルコ」による改革；バルカン戦争

4. 西ヨーロッパと北ヨーロッパ 1848～1914

このセクションは、1867年から1914年までのイギリスの歴史と、第二帝政から第三共和政までのフランスの歴史に焦点をあてます。これは西ヨーロッパと北ヨーロッパにおける、戦争、政治的混乱、社会の激変、そして変化と近代化の時代でした。

- ・ フランス：1848年の二月革命、帝政と共和政
- ・ ナポレオン3世：国内政策と外交政策
- ・ 帝政の崩壊；パリ・コミューン
- ・ 第三共和政（1875～1914）：危機と政策；ブーランジェ；財政問題；ドレフェス；左翼運動；世俗国家の建設
- ・ イギリス（1867～1914）：参政権の拡大；社会改革；政党の発展
- ・ ディズレーリとグラッドストン：国内政策（アイルランドを含む）；外交政策と帝国主義政策
- ・ 西ヨーロッパまたは北ヨーロッパにおける任意の**1国**の事例研究（例：スペイン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、ポルトガル、スウェーデン、スイス、その他該当地域内における国家）

5. ロシア帝国、革命、ソヴィエト政権の出現 1853～1924

このセクションは、帝政ロシアにおける皇帝の権力の衰退とソヴィエト政権の出現に焦点をあてます。生徒は、帝政衰退のきっかけをつくり、そしてそれを加速させた、社会、

政治、経済における要因を学習します。また、国内改革の試み、およびこれらがどのように帝政の衰退を加速（もしくは減速）させたのかを、戦争や外交問題のもつれによる影響とともに考察していきます。

- ・ アレクサンドル2世（1855～81）：農奴解放；軍事、法、教育、地方自治における改革；後の反動
- ・ アレクサンドル3世（1881～94）とニコライ2世（1895～1917）の政策：後進性、近代化の試み；皇帝の地位の性質；反対運動の発展
- ・ 日露戦争の重要性；ロシア第一革命；ストルイピンとドゥーマ；第一次世界大戦（1914～18）のロシアへの影響
- ・ ロシア革命：二月（三月）革命；ロシア臨時政府と二重権力（ソヴィエト）；十月（十一月）革命（ボリシェヴィキ革命）；レーニンとトロツキー
- ・ レーニンのロシア（1917～24）：ソヴィエト政権の樹立；ロシア内戦；戦時共産主義；ネップ（NEP）；恐怖と強制；外国との関係

6. ヨーロッパの外交と第一次世界大戦（1870～1923）

このセクションは、第一次世界大戦の長期的要因、短期的要因、過程と結果に焦点をあて、1914年以前のヨーロッパにおける外交の崩壊と国際関係における危機、そして戦争の実行が軍事および国内戦線に及ぼした影響を考察していきます。また、連合国側の勝利および同盟国側の敗北の理由とパリ講和会議後の経済、政治、領土における結果についても学習します。

- ・ ヨーロッパの外交と1870年以降の、勢力均衡における変化
- ・ 1914年までのドイツの外交政策におけるねらい、手段、連続と変化；世界的な植民地をめぐる列強の対立
- ・ 以下の要素の相対的重要性：同盟体制；オスマン帝国の衰退；オーストリア＝ハンガリー帝国とバルカン半島におけるナショナリズム；軍拡競争；国際関係と外交の危機
- ・ 一般市民への影響；戦争が女性にもたらした社会的、政治的影響
- ・ ドイツおよびその他の同盟諸国（オーストリア＝ハンガリー帝国、オスマン帝国、ブルガリア）の敗退の要因；戦略上の失敗；経済要因；アメリカ合衆国の参戦とその役割
- ・ 戦後の平和条約とヨーロッパの領土、政治、経済における影響：ヴェルサイユ条約（サン＝ジェルマン条約、トリアノン条約、ヌイイ条約、セーブル条約／ローザンヌ条約）

7. 中東における戦争と変化 1914～49

このセクションでは、第一次世界大戦の中東における影響に焦点をあて、アラブ反乱の軍事面および政治面での重要性和、連合国の外交が中東の発展に与えた影響について学習します。独立国家もしくは委任統治の形をとった、中東における第一次世界大戦後の領土

および政治の再編成と、国家再生に向けての運動の出現について考察していきます。イギリスによる行政と政策、および1948年までのアラブ人とユダヤ人の間における紛争の起源と発展を包含するパレスチナ委任統治問題は、このセクションにおいて特に重要なポイントとなります。

- ・ 連合国の外交と中東における影響；フサイン＝マクマホン協定；サイクス＝ピコ協定（1916）；アラブ反乱（1916）；バルフォア宣言（1917）
- ・ パリ講和会議：中東における領土面、政治面での影響；委任統治制度：イラク、トランスヨルダン、シリア、レバノンにおけるイギリスとフランスの委任統治
- ・ 1948年までのパレスチナ委任統治の確立、統治：経済、社会、政治の発展；ユダヤ人移民の増加；協定・政策：ホープ・シンプソン報告、ピール委員会、白書
- ・ 第二次世界大戦後の緊張状態：国際連合パレスチナ問題特別委員会（UNSCOP）；イスラエル国家の建設；第一次中東戦争（1948～9）
- ・ アタテュルクとトルコ共和国：目標と政策（1919～38）；トルコ社会への影響；成功と失敗
- ・ イランとレザー・パフレヴィー（レザー・ハーン）（1924～41）：政権確立と政権の性質；近代化への試み；西洋からの影響
- ・ サウジアラビアとイブン・サウード（1932～49）：政権確立と政権の性質；国家における宗教の役割；社会・経済政策

8. 戦間期：対立と協調 1919～39

このセクションは、第一次世界大戦終了後から第二次世界大戦勃発までの戦間期と、国際協調と集団安全保障を促す試みに焦点をあてます。生徒は、国際協調の障害となった第一次世界大戦後の修正主義、経済危機、イタリア、ドイツ、スペインにおける民主主義と政治的正当性の危機をすべて検証、考察する必要があります。右翼政権の政策とそれに対する民主主義国家の反応も、このセクションにおける重要なポイントとなります。

- ・ ドイツ（1919～33）：政治、憲法、経済、財政、社会における問題
- ・ イタリア（1919～39）：ムッソリーニの国内政策と外交政策
- ・ 世界恐慌の影響（ヨーロッパにおける任意の1国の事例研究）
- ・ スペイン内戦：内戦勃発の背景；原因と結果；外国による関与；国民戦線軍の勝利の理由
- ・ ヒトラーの国内政策と外交政策（1933～39）
- ・ 集団安全保障の追求；戦間期の宥和；国際外交における失敗；1939年の第二次世界大戦勃発

9. ソ連と東ヨーロッパ 1924～2000

このセクションは、1924年からのソヴィエト政権の統合と、その生存、成長、ソヴィエト社会主義共和国連邦（ソ連）内外での勢力拡大を確実なものとするためにとられた手法に焦点をあてます。スターリン、フルシチョフ、ブレジネフ政権の誕生および特徴と、中

中央ヨーロッパと東ヨーロッパにおける1945年以降のソ連化の政策と実践を検証していきます。さらに、1945年以降の東西関係をソ連のねらいと指導力の観点から考察していきます。

- ・ スターリン（1924～53）：権力闘争；集団化と工業化；五カ年計画；憲法；個人崇拜；大粛清；社会への影響；外国との関係（1941年まで）
- ・ 大祖国戦争：戦争中の連合国間の協力関係の崩壊；冷戦ドイツに対する政策：ベルリン；東ヨーロッパにおける衛星国；ワルシャワ条約
- ・ フルシチョフ（1955～64）：スターリンの死後の権力闘争；非スターリン化；平和共存；国内政策：経済と農業；外国との関係：ハンガリー、ベルリン、キューバ、中国
- ・ ブレジネフ：国内政策と外交政策
- ・ 事例研究（ソ連化した国家もしくは衛星国を**1つ**選択）：ソヴィエトによる支配の確立；一党独裁制国家の性質；国内政策；反対派、意見の相違（例：東ドイツ、チェコスロバキア、ポーランド、その他該当する国家）
- ・ ソ連の変容：政治における発展と変化（1982～2000）

10. 第二次世界大戦と戦後の西ヨーロッパ 1939～2000

このセクションは、第二次世界大戦、戦後の復興、20世紀後半における冷戦の影響、そして（場合によっては）権威主義的政権から民主主義政権への移行について焦点をあてます。それぞれの国家が直面した社会、政治、経済における問題と、これらの解決のために各国および相互に受け入れ可能な政治、経済、外交政策の目標の実現を追求したヨーロッパ統合の動きの中でとられた手段を考察していきます。

- ・ ヨーロッパにおける第二次世界大戦；冷戦：ドイツへの影響、北大西洋条約機構（NATO）、軍事協力
- ・ 西ヨーロッパにおける大戦後の問題と政治、経済の回復：荒廃；負債（1945～9）
- ・ ドイツ連邦共和国の成立からドイツ再統一へ
- ・ 政治的、経済的統合への動き、1945年以降の協調と拡大：ヨーロッパ経済共同体（EEC）、ヨーロッパ共同体（EC）、ヨーロッパ連合（EU）
- ・ スペイン：フランコ政権；フアン・カルロス1世の下での民主主義への移行と民主主義政権の確立
- ・ 西ヨーロッパにおける任意の**1国**の1945年から2000年までの歴史の事例研究（ただしドイツとスペインは除く）：政府の性質；国内政策；反対派、意見の相違

11. 中東における第二次世界大戦後の発展 1945～2000

このセクションは、1945年以降の中東におけるナショナリズム、共同体主義、近代化、西洋化に焦点をあて、国内改革とその受け入れおよび成功の度合いと、中東全般または特定の国家の発展における外国の介入の影響について考察していきます。また、1973年の第四次中東戦争後のアラブ諸国家間およびアラブ諸国家とイスラエル間の関係についても詳しく学習します。

- ・ ナーセル、サダト、ムバラク指導下のエジプト：国家の性質；政治的發展；經濟政策、社会政策
- ・ イランにおけるムハンマド・レザー・パフレヴィー指導下での近代化と西洋化：西洋の影響；白色革命；社会の性質；イラン革命（1979）
- ・ レバノン：内戦、外部からの干渉、再建；宗教国家；經濟における緊張状態；民兵とパレスチナ解放機構（PLO）の發展
- ・ 汎アラブ主義：アラブ連合共和国（UAR）と指導力および結束の探求；UARの短命性；イスラームの統一性における長期的な影響
- ・ アラブ世界とイスラエル：不安定な関係と紛争；和平の試み；紛争が生み出した緊張状態（占領地区、インティファダ）
- ・ 中東における任意の**1国**の事例研究（ただしエジプトを除く）：政府の性質；国内政策；反対派、意見の相違、不満（例：イラク、イラン、サウジアラビア、シリア、その他該当する国家）

12. 19世紀または20世紀におけるヨーロッパと中東の社会と經濟の發展

このセクションでは、生徒は**ヨーロッパまたは中東における国を1つ選択し、50年ほどの期間**を対象に事例研究を行います。下記のトピック一覧からもわかるように、この事例研究を行うにあたっては、対象となる国に関する詳細な知識が要求されます。また、政治的要素への言及をする場合には、この項目のテーマである「社会と經濟の發展」に関連するものであることが必要です。

この事例研究を通して、生徒は、選んだ**1つ**の国の文脈の中で、調査能力と批判的^{クリティカルシンキング}思考力を伸ばすことができます。なお、事例研究の対象として選択された国は、試験答案の冒頭部分に明記することとします。

- ・ 社会構造と社会的風潮：医療制度改革、社会保障制度、ジェンダー問題、参政権
- ・ 宗教の役割とその影響、紛争、対立
- ・ 教育の發展、国家の伸長、多様性
- ・ 芸術の發展：視覚芸術、音楽、演劇、文学と映画、メディア、プロパガンダ、娯楽、スポーツ
- ・ 海外からの移民と自国民の海外移住：原因と結果、人口構成の変化、都市化
- ・ 産業革命：社会におけるテクノロジーの影響、情報化時代

ディプロマプログラムにおける評価

概要

評価は、指導および学習と一体化した要素です。DPでは、カリキュラム目標の達成を支援し、生徒に適切な学習を促すことを評価の最も重要なねらいとして位置づけています。

DPでは、学校外で実施されるIBによる外部評価（external assessment）、および内部評価（internal assessment）の両方が実施されます。外部評価のための提出課題はIB試験官が採点します。一方、内部評価のための評価課題は教師が採点し、IBによるモデレーション（評価の適正化）を受けます。

IBが規定する評価には次の2種類があります。

- ・「形成的評価」（formative assessment）は、「指導」と「学習」の両方に指針を与えます。生徒の理解と能力の発達につながるよう、学びの種類や、生徒の長所と短所といった特徴について、生徒と教師に正確で役立つフィードバックを提供します。また、形成的評価からは、科目のねらいと目標に向けての進歩をモニタリングするための情報が得られるので、指導の質の向上にもつながります。
- ・「総括的評価」（summative assessment）は、生徒のこれまでの学習を踏まえて、生徒の到達度を測ることを目的としています。

DPでは、主に履修期間の終了時または終了間近の生徒の到達度を測る総括的評価に重点が置かれています。ただし、評価方法の多くは、指導および学習期間中に形成的に用いることもできます。教師はそうした評価を実施するよう推奨されています。総合的な評価計画は、指導、学習およびカリキュラム編成と一体を成すものです。より詳しくは、IB資料『プログラムの基準と実践要綱』を参照してください。

IBが採用する評価アプローチは、評価規準に準拠した「絶対評価」です。集団規準に準拠した「相対評価」ではありません。この評価アプローチは、生徒の成果を特定の到達の度合いを示す基準に照らし合わせ、そのパフォーマンスを判断するものであり、他の生徒の成果と比較するものではありません。DPにおける評価について、より詳しくはIB資料（英語版）『*Diploma Program assessment: Principles and practice*（ディプロマプログラムにおける評価：原則と実践）』を参照してください。

OCCでは、DPの科目のコースデザイン、指導、および評価の分野で教師を支援するための多様なリソースを入手できます。また、リソースをIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。試験問題の見本やマークスキーム（採点基準）、教師用参考資料、科目レポート、評価規準の説明など、その他の資料もOCCで取り扱っています。過去の試験問題やマークスキームはIBストアで購入できます。

評価方法

I Bは複数の方法を用いて、生徒の成果を評価します。

評価規準

評価規準 (assessment criterion) は、オープンエンド型の課題に対して適用されます。各規準は生徒が身につけることが期待されている特定の能力に重点を置いています。評価目標は「何ができるべきか」を明確にし、評価規準は「どの程度よくできるべきか」を到達の度合いを示す基準に照らし合わせて測ります。評価規準を採用することで、個々のさまざまな解答の違いを識別することが可能となり、多様な解答を奨励することにつながります。

各規準には、どのような基準を満たすと特定のレベルに到達していると判断されるのかが詳細に説明されています。その説明は到達レベル別に段階的に並べられ、レベルごとに1つまたは複数の点数が設けられています。また、採点ではベストフィット(適合)モデルを用いて、各規準を個別に適用します。何点かその規準の満点となるかは規準の重要度に応じて異なる場合があります。各規準での得点を合計したものを、その課題に対する総合点とします。

マークバンド (採点基準表)

マークバンド (採点基準表) は、求められる学習成果の基準を一覧にまとめた表です。教師はマークバンドに照らし合わせて、生徒の到達度を判断します。規準ごとに、到達レベルに沿って段階的に到達の度合いを示す基準が並べられています。生徒の学習成果の違いを識別するために、各レベルの点数には幅をもたせてあります。個々の学習成果物にどの点数をつけるかを確定するには、ベストフィット(適合)アプローチを用います。

マークスキーム (採点基準)

この用語は特定の試験問題のために用意された分析的マークスキーム (採点基準) のことを指します。分析的マークスキームは、生徒の最終的な解答や、その他特定の種類の答案を要求する試験問題のために作成されます。これらは、各設問に対する総合点を生徒の解答の異なる部分についてどのように配分するかについて試験官に詳細な指示を与えるものです。このマークスキームには、試験問題の解答で求められる内容や、評価規準をどのように適用するかについての手引きとなる採点のための注意事項などが含まれます。

評価の概要——標準レベル（SL）

2010年 第1回試験

評価の構成	配点比率
<p>外部評価</p> <p>試験問題1（1時間） ルート1の場合は「指定学習項目」の2項目 ルート2の場合は「指定学習項目」の3項目 4つの短答形式・求答形式の問題 評価目標1～3について評価 (25点)</p> <p>試験問題2（1時間30分） ルート1とルート2のいずれの場合も、5つの「トピック」 2つの小論文形式の問題 評価目標1～4について評価 (40点)</p>	<p>75%</p> <p>30%</p> <p>45%</p>
<p>内部評価 「歴史研究」(historical investigation) (シラバスのどの領域でも可) およそ20時間 評価目標1～4について評価 (25点)</p>	<p>25%</p>

評価の概要——上級レベル（HL）

2010年 第1回試験

評価の構成	配点比率
<p>外部評価（5時間）</p> <p>試験問題1（1時間） ルート1の場合は「指定学習項目」の2項目 ルート2の場合は「指定学習項目」の3項目 4つの短答形式・求答形式の問題 評価目標1～3について評価 (25点)</p> <p>試験問題2（1時間30分） ルート1とルート2のいずれの場合も、5つの「トピック」 2つの小論文形式の問題 評価目標1～4について評価 (40点)</p> <p>試験問題3（2時間30分） 3つの小論文形式の問題 評価目標1～4について評価 (60点)</p>	<p>80%</p> <p>20%</p> <p>25%</p> <p>35%</p>
<p>内部評価 「歴史研究」(historical investigation) (シラバスのどの領域でも可) およそ20時間 評価目標1～4について評価 (25点)</p>	<p>20%</p>

外部評価

外部評価では、以下の2種類の評価手法が用いられます。

- ・ 各試験問題用の詳細なマークスキーム（採点基準）
- ・ マークバンド（採点基準表）

マークバンド（採点基準表）は、本資料に記載されています。

「試験問題1」は、分析的マークスキーム（採点基準）に基づいて採点されます。

「試験問題2」は、分析的マークスキーム（採点基準）とマークバンド（採点基準表）に基づいて採点されます。

HLのみが対象となる「試験問題3」は、分析的マークスキーム（採点基準）とマークバンド（採点基準表）に基づいて採点されます。

マークバンド（採点基準表）は、「歴史」のために設定された評価目標、および「個人と社会」（グループ3）の成績の評価規準の説明と連動しています。マークスキーム（採点基準）は試験ごとにその試験に準拠して作成されます。

外部評価の詳細——標準レベル（SL）

試験問題1

試験時間：1時間

配点比率：30%

「試験問題1」では、それぞれ以下の評価目標についての到達度が測られます。

設問	評価目標
設問1は、パート（a）とパート（b）の資料の理解度を試験する。	1. 知識と理解 ・ 歴史資料を理解する。
設問2は、2つの資料の比較と対比による資料の分析を試験する。	2. 応用と解釈 ・ 根拠としての歴史資料を比較し、対比する。
設問3は、2つの資料に関する、出所、目的、価値、限界の観点からの議論を試験する。	3. 知識の統合と評価 ・ 根拠としての歴史資料を評価する。

設問	評価目標
設問 4 は、背景知識と歴史資料に対する評価を試験する。	1. 知識と理解 ・ 歴史的な脈を理解していることを示す。 3. 知識の統合と評価 ・ 歴史資料と背景知識に基づく根拠を評価し、統合的に扱う。

求答形式の問題は、「指定学習項目」から出題されます。生徒はルート 1、**または**ルート 2 を「指定学習項目」として掘り下げて学習します。

2010年から2016年までの試験における「指定学習項目」は以下の通りです。

ルート 1 「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」

- ・ 指定学習項目 1 : イスラーム教の起源と隆盛 500 頃～ 661
- ・ 指定学習項目 2 : 両シチリア王国 1130 ～ 1302

ルート 2 「20世紀の世界史」

- ・ 指定学習項目 1 : 平和創造・平和維持——国際関係 1918 ～ 36
- ・ 指定学習項目 2 : 中東戦争 1945 ～ 79
- ・ 指定学習項目 3 : 共産主義の危機 1976 ～ 89

設問で使用される歴史資料は、一次資料もしくは一次資料と二次資料の混合となります。文献資料（史料）、絵や写真などの視覚資料、図式による資料が使用されます。「試験問題 1」で使用されるこれらの資料を自信をもって扱うには、「指定学習項目」で学んだ内容の歴史的な脈をしっかりと理解していることが不可欠です。そのため、「指定学習項目」を学習するにあたっての土台となるような、権威の確立した二次資料（文献）に生徒をあらかじめ導くことがきわめて重要です。

1つの「指定学習項目」につき、5つの歴史資料が使用されます。1つまたは複数の指定された資料から引き出せる根拠のみに基づいて解答する設問もありますが、その他の問題においては、生徒はあらゆる資料に基づく根拠と自分自身の知識の両方を活用することが要求されます。

生徒は選択した「指定学習項目」における4つの設問すべてに解答しなければなりません。「試験問題 1」は25点満点です。なお、採点にあたっては、試験問題に準拠した分析的マークスキーム（採点基準）を使用します。

試験問題 2

試験時間 1 時間30分

配点比率：45%

「試験問題 2」では評価目標 1～4 についての到達度が測られます。試験の対象となる評価目標はすべてマークバンド（採点基準表）に反映されています〔本資料の「外部評価のマークバンド（採点基準表）——標準レベル（S L）」を参照。マークバンド（採点基準表）は上級レベル（H L）と共通です〕。

生徒はルート 1、ルート 2 のいずれかから 2 つの「トピック」を選択して学習します。どちらのルートも 5 つの「トピック」から構成されています。

ルート 1 「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」

- トピック 1：王朝と支配者たち
- トピック 2：社会と経済
- トピック 3：戦争と戦争行為
- トピック 4：知的・文化的・芸術的發展
- トピック 5：宗教と国家

ルート 2 「20 世紀の世界史」

- トピック 1：戦争の原因・手段・影響
- トピック 2：民主主義国家——試練と対応
- トピック 3：権威主義的国家ならびに一党独裁制国家の始まりとその發展
- トピック 4：アフリカとアジアにおける民族運動・独立運動と 1945 年以後の中央・東ヨーロッパの国家
- トピック 5：冷戦

ルート 2 の「トピック」に関する設問で「地域」という言葉が使われることがありますが、これはシラバスの「20 世紀の歴史——トピック」冒頭部分に記載の世界地図に示されている 4 地域のいずれかを指します。また、比較形式の設問には複数地域からの例を必要とするものもあります。

試験は各「トピック」に関する 5 つのセクションから構成され、それぞれの「トピック」に対して 6 つの小論文形式エッセイの設問があります。各セクションの構成は以下の通りです。

- ・ シラバスに記載のある特定の人物、テーマ、トピック、歴史上の出来事に関する **3 つ**の設問
- ・ **2 つ**の自由形式の設問
- ・ 社会、経済、ジェンダー問題に関する少なくとも **1 つ**の設問（ルート 1 のいくつかの「トピック」においては設問のほとんどがこのカテゴリーに属する可能性があります）

また、上記の設問について、次のような設定があります。

- ・ 少なくとも**1つ**の設問はルート2における2地域の題材に関する知識を要求します。題材は、特定の例（人物、出来事など）を指定するか、任意の2つの例（人物、出来事など）を要求する形で設定されます。
- ・ いずれか**1つ**の設問は比較形式または引用に基づく形式をとります。

自由形式の設問に関しては、議論を展開、補強するために、関連のある例であれば何を使っても構いません。

生徒は**2つ**の設問に解答します。また、これらは**別々の**「トピック」から選択されなければなりません。「試験問題2」は、40点満点です。なお、採点にあたっては、マークバンド（採点基準表）と試験問題に準拠した分析的マークスキーム（採点基準）を使用します。

外部評価のマークバンド（採点基準表）—— 標準レベル（SL）

試験問題2のマークバンド（採点基準表）

「試験問題2」（SL・HL）の評価目標は、マークバンド（採点基準表）の右の欄に表記されています。

注：小論文形式の答案に関しては、評価目標の要素があてはまらない場合もあります。

- ・ 評価目標2：歴史問題や歴史上の出来事に対して異なるアプローチや解釈があることを認識している。
- ・ 評価目標3：歴史問題および歴史上の出来事に対する異なるアプローチと解釈を評価する。

マークバンド（採点基準表）は、各試験問題に準拠したマークスキーム（採点基準）と照らし合わせながら読むようにしてください。

評点	レベルの説明	評価目標と評点
0	この成果物は、以下に記す基準に達していない。	低い評点 評価目標1：知識と理解
1～3	設問の要求をまったく理解しておらず、設問に関連する歴史の正確な知識も見受けられない。 答案において適切な構成がほとんど（あるいはまったく）見受けられず、内容もあいまいで根拠のない主張の域を出ない。	・ 記憶の中から、問いに関連のある歴史の知識を選び出す。 ・ 歴史的文脈を理解していることを示す。 ・ 原因と結果、連続と変化といった歴史の過程を理解していることを示す。
4～5	設問をほとんど理解していない。 歴史に関する記述はあるものの、その大部分は不正確であるか、設問への関連性が薄い（あるいはその両方）。 歴史的文脈または歴史の過程についての理解がほとんど（あるいはまったく）見受けられない。 小論文の構成は見受けられるものの、焦点が設問からずれている。	評価目標4：歴史学のスキルの活用 ・ 小論文形式の答案として組み立てる。
6～7	設問をある程度理解している。 設問に関連する歴史の知識はある程度見受けられるものの、量、質ともに不十分である。 歴史上の出来事を歴史的文脈の中に位置づけようとする、ある程度の試みが見受けられる。歴史の過程に対する理解が見受けられ、(必要な場合においては) 比較および対比が行われているものの、十分なレベルには達していない。 小論文の構成は見受けられるものの、設問に部分的にしか答えていない。	

評点	レベルの説明	評価目標と評点
8～9	<p>設問の要求をおおむね理解している。設問に関連する歴史の知識があり、これらの知識の活用も見受けられる。ただし、答えは十分かつ正確には掘り下げられておらず、内容も記述的、描写的なレベルの域を出ない。もしくは、筋の通った議論は見受けられるものの、その根拠が十分であるとは言い難い。</p> <p>批判的論評が潜在的には存在する。歴史上の出来事を歴史的な脈絡の中に位置づけようとする試みが見受けられる。また、歴史の過程に対する理解、(必要な場合においては) 歴史の比較および対比の試みも見受けられる。</p> <p>時系列もしくはテーマに沿った形式で小論文を構成しようとする試みが見受けられる。</p>	
10～12	<p>設問の要求を理解しており、答えもこれに沿って作成されている。ただし、設問が含意するところがすべて考慮されているとはいえない。</p> <p>設問に関連する歴史の知識はおおむね正確である。また、これらの知識が根拠として応用されている。批判的論評の試みがある程度見受けられる。</p> <p>歴史上の出来事はおおむね歴史的な脈絡の中に位置づけて論じられている。歴史の過程を理解しており、(必要な場合においては) 歴史の比較および対比を行っている。</p> <p>歴史問題や歴史上の出来事に対する異なるアプローチや解釈をある程度認識している。ただし、答えは主に歴史学者の見解の要約によって構成されており、また、これらの見解は歴史を効果的に議論するための補足要素としてではなく議論そのものとして使用されている。そのため、このマークバンド(採点基準表)における高得点の範囲には届かない。</p> <p>時系列もしくはテーマに沿った形式で小論文を構成した試みが明らかに見受けられる。</p>	<p>中くらいの評点：</p> <p>このレベルにおいては、上記の評価目標に加えて以下の評価目標を達成することが求められる。</p> <p>評価目標2：応用と解釈</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 歴史に関する知識を根拠として応用する。 ・ 歴史問題や歴史上の出来事に対して異なるアプローチや解釈があることを認識している。 <p>評価目標4：歴史学のスキルの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 関連性が高い議論を根拠に基づいて構築し、それを小論文の答えとして組み立てる。

評点	レベルの説明	評価目標と評点
13～15	<p>答えは設問の要求を明らかに満たしている。</p> <p>設問に関連する歴史の知識が根拠として応用されている。根拠に基づいた批判的論評が見受けられるが、一貫性に欠ける部分がある。</p> <p>歴史上の出来事は歴史的な文脈の中に位置づけて論じられている。歴史の過程をしっかりと理解しており、(必要な場合においては) 歴史の比較および対比を行っている。</p> <p>歴史問題や歴史上の出来事に対して異なるアプローチや解釈があることを認識しており、これらに対する評価もある程度見受けられる。また、これらのアプローチや解釈は生徒の議論を補強する要素として効果的に使用されている。</p>	<p>高い評点：</p> <p>このレベルにおいては、上記の評価目標に加えて以下の評価目標を達成することが求められる。</p> <p>評価目標3：知識の統合と評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 歴史問題および歴史上の出来事に対する異なるアプローチと解釈を評価する。 ・ 根拠に基づいて批判的論評を展開する。 <p>評価目標4：歴史学のスキルの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 関連性が高く、バランスのとれた、焦点を絞った議論を根拠に基づいて構築し、それを小論文の答案として組み立てる。
16～20	<p>答えは設問の要求を明らかに満たしている。また、設問の要求に対する高度な理解も見られる。また、必要であれば、設問自体に対する批判的な議論を効果的に展開している。</p> <p>批判的論評を展開するにあたって、詳細で正確な歴史の知識が根拠として効果的かつ説得力のある形で活用されている。</p> <p>歴史上の出来事は歴史的な文脈の中に位置づけて論じられており、歴史の過程に対する極めて明確な理解も見られる。また、(必要な場合においては) 歴史の比較および対比を行っている。</p> <p>歴史問題および歴史上の出来事に対する異なるアプローチや解釈への評価が見られる。また、これらの評価は議論を補完、補強する形で効果的に答案に組み込まれている。</p> <p>答案は明瞭かつよく構成されており、関連性が高く、バランスのとれた、焦点を絞った議論が根拠に基づいて展開されている。</p>	

外部評価の詳細——上級レベル（HL）

試験問題 1

試験時間 1 時間

配点比率：20%

「試験問題 1」では、それぞれ以下の評価目標についての到達度が測られます。

設問	評価目標
設問 1 は、パート（a）とパート（b）の資料の理解度を試験する。	1. 知識と理解 ・ 歴史資料を理解する。
設問 2 は、2 つの資料の比較・対比による資料の分析を試験する。	2. 応用と解釈 ・ 根拠としての歴史資料を比較し、対比する。
設問 3 は、2 つの資料に関する、出所、目的、価値、限界の観点からの議論を試験する。	3. 知識の統合と評価 ・ 根拠としての歴史資料を評価する。
設問 4 は、背景知識と歴史資料に対する評価を試験する。	1. 知識と理解 ・ 歴史的文脈を理解していることを示す。 3. 知識の統合と評価 ・ 歴史資料と背景知識に基づく根拠を評価し、統合的に扱う。

求答形式の問題は「指定学習項目」から出題されます。生徒はルート 1、**または**ルート 2 を「指定学習項目」として学習します。

2010 年から 2016 年までの試験における「指定学習項目」は以下の通りです。

ルート 1 「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」

指定学習項目 1：イスラーム教の起源と隆盛 500 頃～661

指定学習項目 2：両シチリア王国 1130～1302

ルート 2 「20 世紀の世界史」

指定学習項目 1：平和創造・平和維持——国際関係 1918～36

指定学習項目 2：中東戦争 1945～79

指定学習項目 3：共産主義の危機 1976～89

設問で使用される歴史資料は一次資料もしくは一次資料と二次資料の混合となります。文献資料（史料）、絵や写真などの視覚史料、図式による資料が使用されます。「試験問題 1」で使用されるこれらの資料を自信をもって扱うには、「指定学習項目」で学習する内容の歴史的文脈をしっかりと理解していることが不可欠です。そのため、「指定学習項目」を

学習するにあたっての土台となるような、権威の確立した二次資料（文献）に生徒をあらかじめ導くことがきわめて重要です。

1つの「指定学習項目」につき、5つの歴史資料が使用されます。1つまたは複数の指定された資料から引き出せる根拠のみに基づいて解答する設問もありますが、その他の問題においては、生徒はあらゆる資料に基づく根拠と自分自身の知識の両方を活用することが要求されます。

生徒は選択した「指定学習項目」における4つの設問すべてに解答しなければなりません。「試験問題1」は25点満点です。なお、採点にあたっては、試験問題に準拠した分析的マークスキーム（採点基準）を使用します。

試験問題2

試験時間 1時間30分

配点比率：25%

「試験問題2」では評価目標1～4についての到達度が測られます。試験の対象となる評価目標はすべてマークバンド（採点基準表）に反映されています〔本資料の「外部評価のマークバンド（採点基準表）——上級レベル（HL）」を参照〕。

生徒はルート1、ルート2のいずれかから2つの「トピック」を選択して学習します。どちらのルートも5つの「トピック」から構成されています。

ルート1「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」

- トピック1：王朝と支配者たち
- トピック2：社会と経済
- トピック3：戦争と戦争行為
- トピック4：知的・文化的・芸術的發展
- トピック5：宗教と国家

ルート2「20世紀の世界史」

- トピック1：戦争の原因・手段・影響
- トピック2：民主主義国家——試練と対応
- トピック3：権威主義的国家ならびに一党独裁制国家の始まりとその発展
- トピック4：アフリカとアジアにおける民族運動・独立運動と1945年以後の中央・東ヨーロッパの国家
- トピック5：冷戦

ルート2の「トピック」に関しての設問で「地域」という言葉が使われることがありますが、これはシラバスの「20世紀の歴史——トピック」冒頭部分に記載の世界地図に示されている4地域のいずれかを指します。また、比較形式の設問には複数地域からの例を必要とするものもあります。

試験は各「トピック」に関する5つのセクションから構成され、それぞれの「トピック」に対して6つの小論文形式^{エッセイ}の設問があります。各セクションの構成は以下の通りです。

- ・ シラバスに記載のある特定の人物、テーマ、トピック、歴史上の出来事に関する**3つ**の設問
- ・ **2つ**の自由形式の設問
- ・ 社会、経済、ジェンダー問題に関する少なくとも**1つ**の設問（ルート1のいくつかの「トピック」においては設問のほとんどがこのカテゴリーに属する可能性があります）

また、上記の設問について、次のような設定があります。

- ・ 少なくとも**1つ**の設問はルート2における2地域の題材に関する知識を要求します。題材は、特定の例（人物・出来事など）を指定するか、任意の2つの例（人物・出来事など）を要求する形で設定されます。
- ・ いずれか**1つ**の設問は比較形式もしくは引用に基づく形式をとります。

自由形式の設問に関しては、議論を発展・補強するために、関連のある例であれば何を使っても構いません。

生徒は**2つ**の設問に解答します。また、これらは**別々の**「トピック」から選択されなければなりません。「試験問題2」は、40点満点です。なお、採点にあたっては、マークバンド（採点基準表）と試験問題に準拠した分析的マークスキーム（採点基準）を使用します。

試験問題3

試験時間 2時間30分

配点：35%

「試験問題3」では評価目標1～4についての到達度が測られます。試験の対象となる評価目標はすべてマークバンド（採点基準表）に反映されています〔本資料の「外部評価のマークバンド（採点基準表）——上級レベル（HL）」を参照〕。

生徒は以下より選択項目を**1つ**選択します。選択項目ごとに別々の試験が用意されています。

ルート1「ヨーロッパとイスラーム世界の歴史」

選択項目1：中世ヨーロッパとイスラーム世界の歴史

ルート2「20世紀の世界史」

選択項目2：アフリカの歴史

選択項目3：南北アメリカの歴史

選択項目4：アジアとオセアニアの歴史

選択項目5：ヨーロッパと中東の歴史

生徒は選択項目の中から**3セクション**を選んで学習します。

設問において言及される特定の国、出来事、人物はシラバスに記載があるもののみとなります。事例研究のアプローチがとられる場合においては、答案を作成する際、指定の地域内であればどの国に言及することも可能です。

注：場合によっては例外もありますので、シラバスを参照するようにしてください。

試験は24の設問によって構成されます。1つのセクションつき**2つ**の小論文形式の問題^{エッセイ}が出題されます。

生徒は**3つ**の設問に解答しなければなりません。「試験問題3」^{ペーパー}は、60点満点です。なお、採点にあたっては、マークバンド（採点基準表）と試験問題に準拠した分析的マークスキーム（採点基準）を使用します。

外部評価のマークバンド（採点基準表）—— 上級レベル（HL）

試験問題2のマークバンド（採点基準表）

標準レベル（SL）に記載のマークバンド（採点基準表）と同様です。

試験問題3のマークバンド（採点基準表）

HLの「試験問題3」^{ペーパー}の評価目標は、採点基準表の右の欄に記載されています。

注：小論文形式の答案に関しては、評価目標の要素があてはまらない場合もあります。

- ・ 評価目標2：歴史問題や歴史上の出来事に対して異なるアプローチや解釈があることを認識している。
- ・ 評価目標3：歴史問題および歴史上の出来事に対する異なるアプローチと解釈を評価する。

マークバンド（採点基準表）は、各試験問題に準拠したマークスキーム（採点基準）と照らし合わせながら読むようにしてください。

評点	レベルの説明	評価目標と評点
0	この成果物は、以下に記す基準に達していない。	低い評点： 評価目標 1：知識と理解
1～2	設問の要求をまったく理解しておらず、設問に関連する歴史の正確な知識も見受けられない。 答案において適切な構成がほとんど（あるいはまったく）見受けられず、内容もあいまいで根拠のない主張の域を出ない。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 記憶の中から、問いに関連のある歴史の知識を選び出す。 ・ 歴史的な文脈を理解していることを論証する。 ・ 原因と結果、連続と変化といった歴史の過程を理解していることを示す。
3～4	設問をほとんど理解していない。 歴史に関する記述はあるものの、その大部分は不正確であるか、設問への関連性が薄い（もしくはその両方）。 歴史的な文脈または歴史の過程に関する理解がほとんど（あるいはまったく）見受けられない。 小論文の構成は見受けられるものの、答案は根拠が不十分な主張の域を出ない。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 詳細かつ深く掘り下げた知識を効果的に展開する。 評価目標 4：歴史学のスキルの活用 <ul style="list-style-type: none"> ・ 小論文形式の答案を組み立てる。
5～6	設問をある程度理解している。 設問に関連する正確な歴史の知識はある程度見受けられるものの、その詳細は不十分である。 歴史の過程に対する理解が見受けられ、（必要な場合においては）比較および対比が行われているものの、十分なレベルには達していない。 小論文の構成は見受けられるものの、設問に部分的にしか答えていない。	

評点	レベルの説明	評価目標と評点
7～8	<p>設問の要求をおおむね理解している。設問に関連する歴史の詳しい知識は見受けられるものの、これらの知識の活用の仕方は不十分であり、内容も記述的、描写的なレベルの域を出ない。または、議論は見受けられるものの、その根拠が十分であるとは言い難い。分析の試みは見受けられるが、不十分である。</p> <p>歴史上の出来事を歴史的文脈の中に位置づけようとする試みが見受けられる。また、歴史の過程に対する理解、(必要な場合においては) 歴史の比較および対比の試みも見受けられる。</p> <p>時系列もしくはテーマに沿った形式で小論文を構成しようとした試みが見受けられる。</p>	
9～11	<p>設問の要求を理解しており、答案もこれに沿って作成されている。ただし、設問が含意するところがすべて考慮されているとはいえない。</p> <p>設問に関連する歴史の知識はおおむね正確である。また、これらの知識が根拠として応用されている。設問の主題に対してある程度の理解があることが批判的論評から見てとれる。</p> <p>歴史上の出来事はおおむね歴史的文脈の中に位置づけて論じられている。歴史の過程を理解しており、(必要な場合においては) 歴史の比較および対比を行っている。歴史問題や歴史上の出来事に対する異なるアプローチや解釈をある程度認識している。しかしながら、答案は主に歴史学者の見解の要約によって構成されており、また、これらの見解は歴史を効果的に議論するための補足要素としてではなく議論そのものとして使用されている。そのため、このマークバンド(採点基準表)における高得点の範囲には届かない。</p> <p>時系列またはテーマに沿った形式で小論文を構成した試みが明らかに見受けられる。知識の統合は見受けられるものの、不十分である。</p>	<p>中くらいの評点： このレベルにおいては、上記の評価目標に加えて以下の評価目標を達成することが求められる。</p> <p>評価目標2：応用と解釈</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 歴史に関する知識を根拠として応用する。 ・ 歴史問題や歴史上の出来事に対して異なるアプローチや解釈があることを認識している。 <p>評価目標4：歴史学のスキルの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 関連性が高い議論を根拠に基づいて構築し、それを小論文の答案として組み立てる。

評点	レベルの説明	評価目標と評点
12～14	<p>答案は設問の要求を明らかに満たしている。</p> <p>設問に関連する歴史の知識が根拠として応用されている。設問の主題に対して深く掘り下げた理解があることが批判的論評から見とれるが、一貫性に欠ける部分がある。</p> <p>歴史上の出来事は歴史的文脈の中に位置づけて論じられている。歴史の過程をしっかりと理解しており、(必要な場合においては) 歴史の比較および対比を行っている。</p> <p>歴史問題や歴史上の出来事に対して異なるアプローチや解釈があることを認識しており、これらに対する評価もある程度見受けられる。また、これらのアプローチや解釈は生徒の議論を補強する要素として効果的に使用されている。</p>	<p>高い評点：</p> <p>このレベルにおいては、上記の評価目標に加えて以下の評価目標を達成することが求められる。</p> <p>評価目標3：知識の統合と評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 歴史問題および歴史上の出来事に対する異なるアプローチと解釈を評価する。 ・ 根拠に基づいて批判的論評を展開する。 ・ 根拠と批判的論評を組み合わせ、それらを統合的に扱う。 <p>評価目標4：歴史学のスキルの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 関連性が高く、バランスのとれた、焦点を絞った議論を根拠に基づいて構築し、それを小論文の答案として組み立てる。
15～17	<p>答案は設問の要求を明らかに満たしている。また、設問の要求に対する高度な理解も見られる。また、必要であれば、設問自体に対する批判的な議論を効果的に展開している。</p> <p>批判的論評を展開するにあたって、詳細で正確な歴史の知識が根拠として効果的かつ説得力のある形で活用されている。</p> <p>歴史上の出来事は歴史的文脈の中に位置づけて論じられている。歴史の過程に対する極めて明確な理解が見られ、(必要な場合においては) 歴史の比較および対比を行っている。</p> <p>歴史問題および歴史上の出来事に対する異なるアプローチや解釈への評価が見られる。また、これらの評価は議論を補完、補強する形で効果的に答案に組み込まれている。</p> <p>答案は明瞭かつよく構成されており、関連性が高く、バランスのとれた、焦点を絞った議論が根拠に基づいて展開されている。知識と批判的論評が十分かつ効果的に集約されており、洗練された形で知識の統合が見受けられる。</p>	

評点	レベルの説明	評価目標と評点
18～20	<p> 答えは設問の要求を明らかに満たしている。また、設問の要求に対する高度な理解も見られる。また、必要であれば、設問自体に対する批判的な議論を効果的に展開している。 </p> <p> 批判的論評を展開するにあたって、詳細で正確な歴史の知識が根拠として効果的かつ説得力のある形で活用されている。また、答案から高いレベルの構想力がうかがえる。 </p> <p> 歴史上の出来事は歴史的文脈の中に位置づけて論じられている。歴史の過程に対する極めて明確な理解が見られ、(必要な場合においては)歴史の比較および対比を行っている。 </p> <p> 歴史問題および歴史上の出来事に対する異なるアプローチや解釈への評価が見られる。また、これらの評価は議論を補完、補強する形で効果的に答案に組み込まれている。これに加え、歴史に対して異なる(そして多くの場合互いに矛盾する)解釈が生じる理由を理解していることが答案からうかがえる。 </p> <p> 答案は明瞭かつよく構成されており、関連性が高く、バランスがとれた、焦点を絞った議論が根拠に基づいて展開されている。知識と批判的論評が十分かつ効果的に集約されており、きわめて洗練された形での知識の統合が見受けられる。 </p>	<p> 高い評点： このレベルにおいては、上記の評価目標に加え、太字で書かれている要素を少なくとも1つ達成することが求められます。 </p>

内部評価

内部評価の目的

内部評価は授業と一体を成す要素であり、SLとHLのいずれのレベルの生徒も必ず取り組まなければなりません。内部評価課題では、筆記試験でのように時間の制限やその他の制約に左右されることなく、それぞれの興味を追い求めつつ、知識とスキルの活用を示すことができます。内部評価はできる限り通常の授業に織り込まれるべきであり、履修期間の終了後に別途実施されるべきではありません。

なお、内部評価の要件はSLとHLで共通です。

指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

内部評価のために提出される「歴史研究」は生徒自身が取り組んだ学習成果物でなければなりません。しかし、学習成果物が「生徒本人が取り組んだものである」ことは、生徒自身がタイトルやトピックを決め、教師からの支援を一切受けずに、独自に内部評価課題に取り組まなければならないということではありません。教師は、生徒が内部評価課題を計画する段階と取り組む段階で重要な役割を果たします。生徒に以下の点について確実に理解させるのは、教師の責任です。

- ・ 内部評価の対象となる課題についての要件
- ・ 評価規準——評価課題を通じて、生徒は与えられた評価規準に効果的に取り組むべきであること

教師と生徒は内部評価課題について話し合わなければなりません。生徒がアドバイスや情報を得るために率先して教師と話し合うよう促してください。また、生徒が指導を求めたことで減点してはなりません。ただし、課題を完成させるにあたって教師から相当量の助けを要した場合には、IB資料『DP手順ハンドブック』に記載されている該当する書類にその旨を記入するようにしてください。

教師には、学問的誠実性に関連する概念、特に知的財産と生徒本人が課題に取り組むことについての基本的な意味および重要性をすべての生徒に確実に理解させる責任があります。教師は必ず、すべての評価課題が要件に沿って取り組まれていることを確認しなければなりません。また、内部評価課題が完全に生徒自身によるものでなければならないことを生徒に対して明確に説明しなければなりません。

学習プロセスの一環として、生徒は内部評価課題の第1稿を作成した後、教師からアドバイスを受けることができます。ただし、ここで与えられるアドバイスは、どうすれば生徒の取り組みの質を高めることができるかについてであり、教師が第1稿に細かいコメントを大量に書き込んだり、編集を加えたりすることは認められません。なお、この第1稿の次に教師に提出される課題が最終稿となります。

モデレーション（評価の適正化）、または評価のためにIBに提出されるすべての学習成果物は、本当に生徒本人が取り組んだものであることを教師が認証しなければなりません。また、規則違反の事実またはその疑いがあることはありません。各生徒は学習成果物が自分自身のものであること、またそれが最終版であることを正式に認め、内部評価課題のカバーシートに署名をします。なお、署名済みのカバーシートと内部評価課題の最終版を正式に教師（もしくはコーディネーター）に提出した後は、これを撤回することはできません。

生徒本人が取り組んだものであるかどうかは、生徒と課題の内容について議論することと、次のいずれか（または2項目以上）を精査することを通じて確認します。

- ・ 生徒の最初の案
- ・ 記述課題の1回目の草稿
- ・ 引用・参考文献
- ・ 生徒自身が書いたものであることが確認されている他の課題との文体の比較

教師と生徒によって署名されたカバーシートは、IB試験官によるモデレーション（評価の適正化）のために提出されるサンプルの課題だけでなく、すべての生徒の課題に添付されなければなりません。教師と生徒がカバーシートに署名をした場合でも、その成果物が生徒本人が取り組んだものでない可能性がある趣旨のコメントがある場合には、生徒はその課題の評価を受ける資格を失います。したがって、その課題に対しては、成績も与えられません。詳細については、IB資料『学問的誠実性』と同（英語版）『*General regulations: Diploma Programme*（総則：DP編）』を参照してください。

同一の課題を、内部評価と「課題論文」（EE）の両方の要件を満たすものとして重複して提出することはできません。

時間配分

内部評価は「歴史」におけるきわめて重要な要素です。SLにおける最終評価の25%、HLにおける最終評価の20%を占めます。この配点比率を踏まえて、課題に取り組むのに必要な知識、スキル、理解の指導にあてる時間、および課題を進めるために必要な時間を配分する必要があります。

SL・HLともに内部評価課題には、合計約20時間を割りあてることが推奨されています。この中には、以下の時間を含めるようにしてください。

- ・ 教師が生徒に内部評価の要件を説明する時間

- ・ 授業中に生徒が内部評価課題に取り組む時間
- ・ 教師と各生徒が話し合う時間
- ・ 課題に目を通し、進行状況を確認する時間、および進行状況を確認する時間、および生徒本人が取り組んだ課題であるかどうかをチェックする時間

内部評価への評価規準の適用

内部評価には、多くの評価規準が設けられています。各評価規準には、学習成果物が特定のレベルに到達している場合にその成果物に見られる特徴を記述した「レベルの説明」と、それに対応する点数が明示されています。「レベルの説明」では、基本的に学習の成果として捉えられる肯定的な側面を判断基準として取り上げています。ただし、下位の到達レベルでは、達成できなかった点を判断基準としている場合もあります。

教師がSLおよびHLの内部評価課題を採点する際は、評価規準の「レベルの説明」に照らし合わせて判断しなければなりません。

- ・ 評価規準は、SL・HL共通です。
- ・ ベストフィット(適合)モデルの考え方にに基づき、「レベルの説明」から、生徒の到達レベルを最も適切に示す説明を見つけます。学習成果物に見られる到達度が規準に示されている要素によって異なる場合、補正するというのがベストフィット(適合)アプローチの考え方です。与えられる点数は、規準に照らし合わせた場合に、到達レベルのバランスを最も公正に反映するものでなければなりません。「レベルの説明」に挙げられている要素をすべて満たさなければ、その点数が得られないということではありません。
- ・ 生徒の学習成果物を評価する際、教師は、評価規準で学習成果物のレベルを最も的確に示している説明と一致するまで、各レベルの説明を読まなければなりません。学習成果物が2つの説明のちょうど中間にあたりと見られる場合、両方の説明を読み直し、生徒の学習成果物をより適切に示す方を選ばなければなりません。
- ・ 1つのレベルに複数の点数が割りあてられている場合、生徒の学習成果物について、説明内容を達成している度合いが大きければ(学習成果物がその上のレベルに到達しそうな場合)、高い方の点数をつけます。説明内容を達成している度合いが小さければ(その下のレベルに近い場合)、低い方の点数をつけます。
- ・ 整数のみを用います。分数や小数を用いた点は認められません。
- ・ 教師は合格・不合格の線引きをするような考え方をせずに、各評価規準において、学習成果物を最も適切に表すレベルを判別することに専念しなければなりません。
- ・ 「レベルの説明」にある最上位レベルは、欠点のない完璧な学習成果を意味するものではありません。基準は、生徒が最上位レベルに達することができるように設定されています。その学習成果物が最上位レベルの説明内容にあてはまるのであれば、教師は最高点をつけることを躊躇してはなりません(最低点についても同様です)。

- ・ 1つの規準において到達レベルの高かった生徒が、他の規準においても到達レベルが高いとは限りません。同様に、1つの規準において到達レベルの低かった生徒が、他の規準においても到達レベルが低いとは限りません。教師は、生徒の全体的な評価からある特定の点数をその生徒の得点として想定するべきではありません。
- ・ 評価規準を生徒に示すことが推奨されています。

内部評価の詳細——標準レベル(SL)と上級レベル(HL)

「歴史研究」の要件

はじめに

「歴史研究」は、生徒がシラバスの制約を受けずに興味のある歴史トピックを選択し、授業で学んだ知識やスキルを応用することのできる問題解決型の学習です。内部評価課題は、柔軟性が高いため、生徒が自発的に学習に取り組むことができます。この課題では、さまざまな歴史資料の選択や分析、および多様な解釈との対峙を通じて生徒が歴史学におけるスキルを身につけ、応用できるよう、特定の歴史に関する考察に重点を置きます。生徒は根拠となる情報を自ら探し、選別、評価、活用して、適切な結論に至ることが求められます。課題は、このセクションの後半において指定されている形式に沿って作成します。

生徒がどのような研究を行うのかについては、以下の例を参考にしてください。

- ・ 文献資料（史料）やその他の多様な資料を使った、特定の歴史トピックまたは歴史テーマに関する研究
- ・ 博物館、遺跡、戦場跡、モスクや教会などの礼拝の場、歴史的建造物などでのフィールドワークに基づく特定の歴史トピックに関する研究
- ・ 文書（新聞を含む）を用いた特定の歴史問題に関する研究
- ・ 地域史の研究
- ・ 口頭でのインタビューに基づく研究
- ・ 小説、映画、芸術作品の解釈に基づく歴史研究
- ・ 文化的な問題についての歴史的観点からの研究

リサーチクエスト

研究課題に関しては、以下の例を参考にしてください。

- ・ トイトブルク森の戦いは、考古学のフィールドワークによってどの程度正確に推測することができるだろうか。
- ・ ギルド制度はノリッチ（イギリスの都市）の発展においてどのような役割を果たしたのだろうか。
- ・ カール1世はなぜ800年にローマ教皇によって帝冠を受けたのだろうか。
- ・ チンギス・ハンはモンゴルの勢力の拡大にどのように貢献したのだろうか。
- ・ トマス・アキナスによる『神学大全』はなぜ中世のキリスト教会において重要だったのだろうか。

- ・ 映画『*Naser Salah el Dine, El*』（1963）におけるサラーフ・アッディーンの様子は歴史的観点から見て、どの程度正確だといえるだろうか。
- ・ エンリケ航海王子の功績はポルトガルにおける航海にどのような影響をもたらしたのだろうか。
- ・ 明治時代、芸者の生活様式はどのように変化したのだろうか。
- ・ ニューディール政策のF S Aプロジェクトは、そのプログラムを支援するためのプロパガンダとして写真をどのように活用したのだろうか。
- ・ 第二次世界大戦においてヨーロッパで戦ったイギリス兵とアジアで戦ったイギリス兵の経験にはどのような相違点、類似点があるだろうか。
- ・ 1945年のドレスデン爆撃はなぜ起こったのだろうか。また、この爆撃によって市民はどのような影響を受けたのだろうか（被害をこうむった他の町に焦点をあてることも可能）。
- ・ 文化大革命において、中国の共産主義者たちはイデオロギーの流布のために伝統芸術である京劇をどのように活用したのだろうか。
- ・ タルサとオクラホマにおけるベトナム帰還兵の経験は、アメリカ国民の全体的な戦争認識とどの程度相似するものだろうか。
- ・ フォークランド（マルビナス）紛争における報道はイギリス報道機関とアルゼンチン報道機関でどの程度異なるものだったのだろうか。
- ・ 1980年のモスクワオリンピックは冷戦の緊張状態にどのような影響を与えたのだろうか。

「歴史研究」の範囲

「歴史研究」において、生徒は以下を行うことが求められます。

- ・ さまざまな歴史資料を使って歴史研究を行う。
- ・ 課題の提出日からさかのぼって10年以内に起こったことを除く歴史上の出来事またはトピックに焦点をあてる（つまり、課題が2010年に提出される場合は2000年まで、2016年に提出される場合は2006年までに起こった歴史上の出来事およびトピックが研究の対象となります）。
- ・ 問いの形式で書かれた「歴史研究」のタイトルを用意する。
- ・ S L・H Lともに、1500語から2000語（日本語の場合は3000字から4000字）のレポートを作成する。レポートは以下の要素から構成されること。
 - 生徒の氏名、生徒番号、^{リサーチクエスチョン}研究課題と正確な語数（字数）を記入したカバーシート
 - 研究計画
 - 根拠となる情報
 - 資料の評価
 - 分析

- 結論
- 参考文献と資料の一覧

「歴史研究」は教師が採点し、IBによるモデレーション（評価の適正化）を受けます。

トピックの選択

生徒は教師の指導のもと、トピックを自分自身で決定し、教師の承認を得ます。トピックは研究に値するもの、生徒の関心のあるものでなければなりません。

教師は、生徒が研究を始める前にトピックと研究課題^{リサーチクエスト}を承認します。その際、研究を行うにあたって十分な資料があること、研究が内部評価規準によって評価できるものであることを確認するようにしてください。

研究の際には、生徒は倫理的な配慮に対する認識をもたなければなりません。情報の機密性を尊重し、気を配らなければなりません。

研究において使用された資料はすべて参考資料の一覧に明記します。

レポート

生徒は、必ず以下の6つのセクションから構成されるレポートを作成しなければなりません。

- ・ A 研究計画
- ・ B 根拠となる情報
- ・ C 資料の評価
- ・ D 分析
- ・ E 結論
- ・ F 参考文献と語数（字数）

合計：1500～2000語（日本語の場合は3000～4000字）

25点満点

A 研究計画

このセクションにおいて、生徒は以下を行うことが求められます。

- ・ 問いの形式で書かれた研究トピックを明記すること
- ・ 研究範囲を定義すること
- ・ 研究方法を説明すること

B 根拠となる情報

このセクションでは、以下の点に留意して、研究で使用した資料を記載します。

- ・ 資料は研究に適切なものであること
- ・ 資料は正確に、統一された書式で記述すること
- ・ 資料は時系列もしくはテーマに沿った形で記載すること

C 資料の評価

このセクションは、以下の要素によって構成されます。

- ・ 研究に関連のある**2つ**の重要な資料に対する批判的評価
- ・ 選択された資料の出所、目的、価値、限界に対する明確な言及

D 分析

このセクションは以下の要素によって構成されます。

- ・ 本質的な要素、根底にある前提、相互関係を明らかにするために、複雑な問題を細分化して行った分析
- ・ 研究で扱う問題の歴史的文脈における理解
- ・ セクションBで記載した資料の批判的考察
- ・ 使用した資料、特にセクションCで評価した資料の重要性の認識
- ・ 資料に対する異なる解釈の考察（必要であれば）

E 結論

リサーチクエスト

研究課題に対して妥当であり、根拠とした情報とも合致する、明確な結論が求められます。

F 参考資料と語数（字数）

標準の書式に沿った参考文献目録、もしくは参考資料と引用の一覧を必ず作成しなければなりません。また、図や文書など、補足となる根拠は、レポートの最後に付録として載せるようにしてください。なお、上記（参考文献表と付録）は語数（字数）にカウントされません。最終的な語数（字数）を必ず表紙（title page）に正確に明記するようにしてください。

内部評価における評価目標

セクション	評価目標
研究計画	1. 知識と理解 ・ 特定の歴史のトピックに関する知識と理解を示す。
根拠となる情報	2. 応用と解釈 ・ 根拠の要約を提示する。 4. 歴史学のスキルの活用 ・ リサーチスキルおよび構成能力があることを示す。 また、参考文献を適切に使用し、参考文献表を正しく作成する。
資料の評価	3. 知識の統合と評価 ・ 根拠としての歴史資料を評価する。

セクション	評価目標
分析	3. 知識の統合と評価 ・ 根拠の要約を分析し、それを提示する。
結論	3. 知識の統合と評価
参考文献と語数（字数）	4. 歴史学のスキルの活用 ・ リサーチスキルおよび構成能力があることを示す。 また、参考文献を適切に使用し、参考文献表を正しく作成する。

内部評価規準 ― 標準レベル（SL）・上級レベル（HL）

「歴史研究」（SL・HL）は、DPの「歴史」の目標に基づいて作成された6つの評価規準を用いて採点されます。

規準A	研究計画	3点
規準B	根拠となる情報	6点
規準C	資料の評価	5点
規準D	分析	6点
規準E	結論	2点
規準F	参考資料と語数（字数）	3点
	合計	25点

A 研究計画

評点	レベルの説明
0	研究計画が存在しない、もしくは不適當である。
1	研究課題、研究方法、研究範囲が明確に述べられていない。
2	研究課題が明確に述べられている。研究方法と研究範囲の要点が述べられている。また、これらは研究課題に関連したものとなっている。
3	研究課題が明確に述べられている。研究方法と研究範囲が十分に発展した形で述べられている。また、これらは研究課題に十分に的を絞ったものとなっている。

B 根拠となる情報

評点	レベルの説明
0	適切な根拠となる情報が存在しない。
1～2	適切な根拠となる情報がいくつか見受けられるが、参考文献として明記されていない。

評点	レベルの説明
3～4	適切な根拠となる情報が記載されており、リサーチ能力、構成能力、参考資料を明記する能力があることもうかがえる。
5～6	すべての根拠となる情報が研究に適切であり、高いリサーチ能力と構成能力がうかがえる。また、すべての根拠となる情報が統一した書式で正確に明記されている。

C 資料の評価

評点	レベルの説明
0	資料の説明と評価が存在しない。
1	資料の説明は見受けられるものの、その出所、目的、価値、限界についてはまったく言及されていない。
2～3	ある程度の資料の評価は見受けられるものの、その出所、目的、価値、限界についての言及が十分ではない。
4～5	資料の評価が行われており、その出所、目的、価値、限界についても明確に言及されている。

D 分析

評点	レベルの説明
0	分析が存在しない。
1～2	セクションBに記載した根拠となる情報の分析の試みが見受けられる。
3～4	セクションBに記載した根拠となる情報の分析をしており、参考文献も明記している。セクションCで評価した資料を研究することの重要性をある程度認識している。また、必要な場合においては異なる解釈について考察している。
5～6	セクションBに記載した根拠となる情報を批判的に分析し、参考文献も正確に明記している。また、セクションCで評価した資料を研究することの重要性を認識している。必要な場合においては異なる解釈についての分析を行っている。

E 結論

評点	レベルの説明
0	結論が存在しない。もしくは、結論が研究と無関係である。
1	結論は見受けられるが、論じてきた根拠となる情報との合致が不十分である。
2	結論が明快に述べられており、論じてきた根拠となる情報とも合致する。

F 参考資料と語数（字数）

評点	レベルの説明
0	資料の一覧が存在しない。 あるいは 、課題が制限語数（字数）内で書かれていない。
1	資料の一覧は存在するが、不十分であるか、 もしくは 標準の書式に沿った統一された形で作成されていない。 あるいは 、表紙に語数（字数）が正確に明記されていない。
2	標準の書式に沿って資料の一覧が作成されており、 かつ 課題は制限語数（字数）内で書かれている。
3	標準の書式に沿った、適切な資料の一覧が作成されている。課題は制限語数（字数）内で書かれている。

指示用語の解説

生徒は、試験問題で使用される次の重要な指示用語および表現に慣れておく必要があります。指示用語は以下の定義に基づいて、理解されなければなりません。これらの用語は試験問題に頻出しますが、それ以外の用語を用いて、生徒に特定の方法で議論を展開するよう指示する場合があります。

分析しなさい Analyse	本質的な要素または構造を明らかにするために分解しなさい。
比較しなさい Compare	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
比較・対比しなさい Compare and contrast	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点および相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
対比しなさい Contrast	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
定義しなさい Define	語句、概念、または物理量の正確な意味を述べなさい。
詳しく述べなさい Describe	詳細に述べなさい。
論じなさい Discuss	さまざまな議論、要因、仮説を考慮し、バランスよく批評しなさい。意見または結論は、適切な根拠を挙げて、はっきりと述べなさい。
区別しなさい Distinguish	2つまたはそれ以上の概念または事柄の相違点を明確にしなさい。
評価しなさい Evaluate	長所と短所を比較し、価値を定めなさい。
考察しなさい Examine	論点の前提や相互関係が明らかになるように、議論または概念について考えなさい。
説明しなさい Explain	理由や要因などを詳しく述べなさい。

特定しなさい

Identify

数ある可能性の中から答えを確定させなさい。

正当化しなさい

Justify

答えや結論を裏づける妥当な理由や根拠を述べなさい。

どの程度

To what extent

議論または概念の長所または短所を検討しなさい。意見および結論ははっきりと提示し、適切な証拠および論理的に正しい論拠をもたせなさい。